

2006年度
日本語教育実習報告書

愛知県立大学日本語教員課程

目次

本書刊行にあたって

謝辞	i
日本語教員課程履修規定	ii

【第1部】実習生レポート

1. 自分自身の変化 ～実習を通して～

私の気持ちの変化	日比野莉那	2
教育実習を通して -私の成長-	吉田裕紀	4
日本語教育実習を通して起きた私の中の変化	真野由紀	7
実習活動を通して感じたこと	玉山和将	14
気になる隣人	金田文子	17

2. クラス活動を通して考えたこと

テーマ設定から見えてきたもの	大沼秀樹	22
教案がすべてではない	三宅由希子	25
初めての教案作り	石黒運美	29
読む・読まない -保見が丘日本語教室を通して-	石原友紀	32
二度の進行役を通して学んだこと	佐原江梨子	35
「会話をする」ということ	田中景子	39
実習生としてのボランティアをへて	中野瑠美	44
日本語教室での授業を通して	野路文紗子	48
会いたい人に会うために	福岡沙與子	54
頼れる“周りの人”	村上智美	57

3. 名古屋工業大学での日本語教育実習

前期の授業記録	竹川奈美江	62
後期の授業記録（中上級）	ハダダー	66
後期の授業記録（初級）と実習の感想	小田亜美	71

4. 西保見小学校でのボランティア活動

いろんな「私」	矢野淑恵	76
教育サポーターをとおして学んだこと	加藤麻紀	79
西保見小学校の子どもたちとの関わりの中で	清水めぐみ	84
PTA 祭りに参加して	松本奈津子	88

5. 豊田市教育委員会「ことばの教室」でのボランティア活動		
「ことばの教室」実習	大竹亜希子	91
ことばとは	幸得江美	95
【第2部】2006 年度日本語教育実習年間記録		100

本書刊行にあたって

2006年度の『日本語教育実習報告書』がようやく刊行にいたった。報告書の刊行は実習の翌年度秋、というのが通例であったが、今回は大幅に遅れてしまい、関係各所および実習レポートを作成した学生の方々に不手際をお詫び申し上げる。

2006年度は愛知県立大学の日本語教員課程にとって大きな転換期となった。1998年度の大学長久手キャンパス移転と共にスタートした日本語教員課程の発展を支えてきた土屋千尋が、2006年度末で退職し、帝京大学へと転出したのである。

地域からの要請に応え、大学授業開講時期終了後も年度末までボランティア実習を続けていたこともあり、例年、レポート指導の継続とともに報告書の発行が翌年度にまたがっていたのであったが、転出後では如何ともしがたかった。学生の提出レポートを、実習担当の土屋が、学生と話し合い指導を重ねた上で推敲してきたが、今回はそのような対応ができず、日本語教員課程担当の東および土屋の後任として本年度後期より赴任した宮谷が、誤字・脱字の修正、文体の統一、用語・用字やコロケーションなどの表現の修正を加えた。また、個人名が使用されていた部分について、当該者の承諾が得られた教員の氏名のみ掲載し、学習者等はイニシャルに変更した。レポート執筆者に無断ではあるが、報告書としての最小限の修正のみ加えたこと、お許しいただきたい。

2006年度の「日本語教育実習」は土屋の指導による最後のクラスである。本書は7冊目の実習報告書であるが、地域に出むき、地域日本語ボランティアの一員として学生を参加させることを授業に導入するといった、先進的な実習の地盤固めしてきた、その7年の結果である。

愛知県立大学は、大学としても大きな転換期を迎えている。2007年度から独立法人となり、また、2009年度から学部学科再編および、夜間主コースの廃止とともに昼夜開講制の廃止、また県立看護大学との統合も伴い、新「愛知県立大学」と生まれ変わる予定である。その中で、日本語教員課程も「第2ステージ」を迎えることとなる。

地域からの日本語ボランティアのニーズや地域の国際化に対応できる人材の育成のニーズは、増大する一方である。こうした転換期の報告書として、2006年度1年間の日本語教育実習の活動をここに記録する。

本書は以下の2部により構成される。

〔第1部〕実習生レポート

気づきのテーマおよび、実習先などによって分類し掲載した。

〔第2部〕2006年度日本語教育実習年間記録

日本語教育実習の活動内容を掲載した。

2008年3月

日本語教員課程担当教員 東 弘子

謝辞

愛知県立大学日本語教員課程の日本語教育実習の実施にあたり、機関見学および実習生として学生を受け入れて下さったNPO法人保見ヶ丘交際交流センター、(財)海外技術者研修センター(AOTS)、豊田市教育委員会(教育委員会主催「ことばの教室」、豊田市立西保見小学校、豊田市立東保見小学校)、名古屋工業大学国際交流センターのみなさま方、また、学生をボランティアの一員として認め、共に活動する中で学生を育成して下さった地域社会のすべての方々に、心より感謝いたします。

愛知県立大学日本語教員課程担当教員 東 弘子
宮谷敦美

日本語教員課程履修規程

第1条 本学学則第47条の規程により、本学の学生で日本語教員課程の履修を希望する者の履修科目及び履修方法は、別に定めがあるもののほか、この規程による。

第2条 日本語教員課程を修了するためには、別表の全ての基幹科目の25単位、関連科目のⅠから8単位以上、関連科目のⅡから4単位以上の計37単位以上を修得しなければならない。

第3条 この課程の授業科目の履修により修得した単位のうち、各学部履修規程により当該学科の授業科目と同一の場合は、卒業単位に算入する。

第4条 日本語教育実習の授業に参加するには日本語学8単位以上及び日本語教授法8単位の取得が必要である。

附 則

- この規程は平成14年4月1日から施行する。
- 改正後の日本語教員課程履修規程は、平成14年度の入学者から適用し、平成14年3月31日に在学する者については、なお、従前の例による。ただし、再入学、転入学又は編入学をした者については当該者の属する年次の在学者の例による。

附 則

- この規程は平成19年4月1日から施行する。

別 表

区 分	授 業 科 目	必要単位数		
基 幹 科 目	日 本 語 学 (1)	4		
	日 本 語 学 (2)	4		
	日 本 語 学 (3)	4		
	言 語 生 活	2		
	日 本 語 教 授 法 (1)	4		
	日 本 語 教 授 法 (2)	4		
	日 本 語 教 育 実 習	3		
計		25		
関 連 科 目	Ⅰ	国 語 学(注1)	4	8
		言語研究入門(外国語学部共通開設)	4	
		音声学(外国語学部共通開設)	4	
		言語学(外国語学部共通開設)	4	
	計		-	8
	Ⅱ	日本史学(近代・現代)(日本文化学科開設)	4	4
		日 本 文 学 (注2)	4	
		地 誌(注3)	4	
		比較文化(外国語学部共通開設)	4	
		日本の政治と経済(外国語学部共通開設)	4	
日 本 文 化 史(注4)		4		
心 理 学(注5)		4		
社 会 学(注6)	4			
計		-	4	

- 注1 「国語学」に該当するのは、次の授業科目である。国語史、国語概説、国語学各論、国文法論(以上国文学科開設)、日本語学(日本文化学科開設)
- 2 「日本文学」に該当するのは、次の授業科目である。国文学史、国文学概論、国文学各論(以上国文学科開設)、日本文学(日本文化学科開設)、国語国文学(英文学科開設)及び教育内容論(国語)(児童教育学科開設)
- 3 「地誌」に該当するのは、次の授業科目である。地誌(日本文化学科開設)、教育内容論(社会)(児童教育学科開設)
- 4 「日本文化史」に該当するのは、次の授業科目である。日本文学概論、日本文化史(日本文化学科開設)
- 5 「心理学」に該当するのは、発達心理学である。(児童教育学科開設科目)
- 6 「社会学」に該当するのは、次の授業科目である。現代社会論、家族社会学、地域社会学(社会福祉学科開設科目)及び現代日本社会論(日本文化学科開設)

【第1部】 実習生レポート

1. 自分自身の変化 ～実習を通して～

私の気持ちの変化 日比野莉那

教育実習を通してー私の成長ー 吉田裕紀

日本語教育実習を通して起きた私の中の変化

真野由紀

実習活動を通して感じたこと 玉山和将

気になる隣人 金田文子

私の気持ちの変化

外国語学部中国学科 日比野莉那

0. はじめに

私は、せっかく大学に来ているのだから、取れる資格や講義はどんどん挑戦してみようという軽い気持ちで日本語教員課程の講義を取り始めた。それまでは日本語教員という職業など聞いたこともなかったし、外国人の方と関わったこともなく、全く未知の領域だった。しかし、日本語関係の講義に出ているうちにどんどん面白くなって、日本語自体に、日本語の教授法に、そして日本に住んでいる外国人の方々に興味を持つようになった。今では、大学で一番打ち込んだことは、日本語教員課程で学んだことではないかと思うようにさえなった。特に、この実習は私にたくさんの事を教えてくれた。軽い気持ちで始めたものが、私の中でこんなに大きなものになるとは思ってもみなかった。この私の気持ちの変化について書きたいと思う。

1. はじめのころ

1.1 私には実習は無理だ

今でも最初の授業のことを本当によく覚えている。見慣れないメンバーと、今までとは違う緊張した空気。それだけで、少し不安だった。教科書の『つたえあう日本語教育実習』を見ながら土屋先生の話聞いた。メールは毎日チェックすること、メールで記録をながすこと、欠席の連絡はきちんとすること、社会の一員として他の人に迷惑をかけるようにすること…、様々な注意事項があり大変そうだなと思った。「一年間通して実習することはとても大変です。途中でやっぱり無理だと思ったら、早く言ってください。無理を続けるとみんなにも迷惑が掛かるから。大丈夫ですか、実習できそうですか？」私はこれを聞いて、ちょっとドキッとしたが頷いた。

家に帰ってから教科書をちらっと見てみたら、とてもおもしろかったので、一気に全部読んでしまった。そこには、実習生のものすごく熱い思いがつまっていた。学習者さん一人一人のことを細かく把握していたり、一つのことについてみんなで話し合ったり、真剣に授業について振り返っていたり、とにかく濃い内容だった。私は青ざめた。そしてものすごく落ち込んだ。私、こんなに熱くなれない！ 知らない人のためにそんなに一生懸命になれない！ こんな実習絶対できない、絶対に無理だと思った。その次の日、友達に泣きながら相談した。みんな「何とかなるよ～」と言ってくれたので、とりあえずやってみることにした。しかし、気分はものすごく重かった。

1.2 ボランティアのイメージ

そもそも、ボランティアという言葉が好きではなかった。みんな、人のためになる良いことをしているようで、結局は“してあげている”という満足感を味わうためにやっ

ているのではないかと思っていた。私もこれから、そのボランティアというものをするのか。先生は、保見の日本語教室には上下関係が無く、みんな対等な関係なのだと言っていたが、そんなことがあるのだろうか。何より、私自身が毎日いっぱいいっぱいでもらいたいの、他人に何かをしてあげるボランティアなんて出来るのだろうか。と思っていた。

2. 実習を通して

2.1 自然に

実際に実習に行くと不安はすぐに消えた。純粹に楽しかった。外国の方と話したことがなかったので、少し怖いなと思っていたけど、まるで違った。初めからみんな友達みただった。なぜもっと早くから、このようなところに来なかったのだろうと思った。そうしたら、外国人とか日本人とかいう枠を感じずに、普通に一緒に暮らせていただろうに。事実を知らないってことは怖いなと思った。知らない人に、自分のことを話すなんて出来ないと思っていたが、みんなのことがもっと知りたくなったし、私のことも知ってもらいたくなった。これが、自己表現型話題シラバスの良いところなのだなと分かった。

私も自然と学習者の人たちと仲良くなれた。Cさんはとても笑顔の素敵な方で、カラオケで乾杯を歌うのが好き。シュハスコとビールが好き。お兄さんも日本に来ていて、お父さんはブラジルにいて、昔は自動車修理の仕事をしていたが、今は退職して畑仕事をしている。お姉さんが誕生日に30センチ以上もある大きなケーキを作ってくれた。子どもの頃はよく自転車で、片道4時間もかけて川に泳ぎに行っていた。そして4時間もかかるのに、それを近いと言っていた。このように、Cさんのことをいっぱい知っている。Cさんだけでなく、他の学習者のこともボランティアのみんなのこともいっぱい知っている。Cさんは12月末にブラジルに帰国されたので、もう会えないだろうけど、目を閉じると、いつでもあの素敵な笑顔が浮かんでくる。そして、熱い思いが込み上げてくる。私も、自然に熱くなったり、一生懸命になったりしていた。それは、私が学習者やボランティアの方々のことを大切に思っているからかなと思った。

2.2 ボランティアとは？

ボランティアとは、することではなくて、させてもらうことではないかと思うようになった。私もみんなと一緒に教室に参加させてもらって、一緒に教室を作らせてもらっているのだ。みんなの仲間になれたことが嬉しかった。なんて幸せなことだろうと思った。もちろん私も自分にできることをやってきたが、みんなに教えてもらうこと、支えてもらうことの方が多かったように思う。保見の教室には上下関係がなかった。学習者さんもボランティアも先生もみんな同じように会話を楽しみ、日本語を教えたり、ポルトガル語や中国語を教えてもらったり、冗談を言い合ったりして、まるで大きな家族みただった。こんなに温かい気持ちになれたことに驚いている。ボランティアというのはこういうことだったのかと思った。

3. 最後に

実習を通して、日本語の教授法はもちろん、人間関係のあり方や社会人としての常識や物の考え方、温かい気持ちなど、人として大切にしていけないといけないことをたくさん学んだ。楽しい思い出も書ききれないほどある。私は人として成長できたと思っている。今後は日本語教員課程を修了した者として、もっと専門的なことにも関わっていったらいいなと思う。

仕事が忙しくて疲れていても、日曜日にはみんな教室に集まってくる。心話をしに集まってくる。本当に素敵な場所だと思う。そんなみんなの心地よい場所を、ずっとみんなで作っていったらいいなと思う。保見に限らず、日本中どこにでもこのような場所があったら、素晴らしいなと思った。

日本語教育実習を通して -私の成長-

外国語学部中国学科 吉田裕紀

0. はじめに

4月、保見ヶ丘日本語教室での日本語教育実習を前に、同じ場所でオリエンテーションがあった。私はこのときはじめて、保見団地を訪れた。それまで授業などでその団地のことは聞いていたが、百聞は一見に如かず、団地内に入るとまずその棟の数と外観に圧倒された。団地内には保育園、病院、ブラジル資本の店があり、近くには小学校とんでもそろった環境だった。保見駅から団地への道のりで、ブラジル人と思われる人たちとすれ違い、団地内でもトラックヤードで何人もくつろいでいた。近くにいながら、彼らは私にとってどこか遠い存在に思えた。私は他県出身で、それもいわゆる田舎、最近はそうでもないが外国人はあまり暮らしていなかった。暮らしていても目を向けていなかったかもしれない。私は狭い世界にいた。ここに来て、保見団地というところを、ここで教室活動を行っていくのだということを実感した。

1. 保見ヶ丘日本語教室

1.1 教室の様子

この教室にはさまざまな人が集まる。国籍はもちろんのこと、年齢、職業が異なった人たちが集まって教室活動が行われる。クラス活動では、学習者との対話活動で相手のことを聞き自分のことを話す。クラス活動の中やちょっとした雑談からもさまざまな人

の話、意見が聞ける。また主に同じクラス内の学習者同士で、ブラジル人学習者が中国人学習者に「こんにちは」や「さようなら」のあいさつを習ったり、その逆があったりとコミュニケーションがある。私も一緒になって教えてもらった。教室に参加した当初は、どうしていいか、何を話したらいいか戸惑っていたが、実習も半ばにしてようやくなじんできて、自然と活動が楽しくなってきた。年明けには、仕事のためずっと休んでいた C さんと話ができて嬉しかったし、向こうも喜んでいて。

1.2 進行役

ここでの活動全てが日本語教育実習なのだが、クラス活動をまとめてすすめる進行役をする番がまわってくる。私は何回か進行役をした中で、初級クラスと入門クラス（11月時点）のときが心に残っている。初級クラスは、実習の記録を担当した。対話活動から発表にみんなの意識をもっていくのや、発表から導入への進め方もどう切りだしているのか迷い、進行役の難しさを実感した。このときのテーマは「家の仕事について」だったが、そのものの話だけでなく、それを説明する過程だったり、「どうして？」とたずねたり、相手の生活や背景がみえてきて、それが面白いのだと改めて思った。

入門クラスでは、テーマは「私のうち」で、家の間取りを書いてもらった。その頃、入門クラスには新しい学習者が増えていて、私は彼らの家族構成などを知りたかった。しかしそれ以前に、私の家族というテーマで活動がされていたのでできなかった。間取りを書いてもらうことで結果的に、誰と住んでいるなどの話がでて、知ることができた。私はこのとき F さんとペアになって話をした。F さんとは本当に言いたいことは、他の学習者に通訳してもらって会話していた。テーマ上、家の中にあるものの語彙の説明が多かったが、キッチンなど絵カードにないものは説明に苦労した。F さんも困った顔でしんどそうだった。気分をかえて、逆にポルトガル語でどういうか教えてもらった。F さんはちょっと明るい顔になって教えてくれた。スペルを書いて、発音したがなかなかうまくできず、何度もゆっくり言ってもらってなんとか発音していた。さっきの F さんもこのようだったのかなと思った。単語はまだしも、文や会話を習得するのは本当に大変だと想像した。私のスキル不足もあるが、この日、教える難しさと教わる側の大変さを経験した。

2. 「日本版ワーキングプア」

年末、中国人学習者たちはとても忙しくて教室に来ていなかった。彼女たちは技術研修生として働いている。またあるとき、教室が始まる前、外で S さんに会った。これから教室に参加するのかと聞いたら、夜勤明け、との返事でこれから帰って寝ると言っていた。彼らに限ったことではないが、外国人労働者とその労働状況が気になっていた。

あるとき、週刊東洋経済の記事「日本版ワーキングプア」を読む機会があった。日本人の若者と日系ブラジル人、中国人が自動車、電機、精密などの製造業の生産現場で低賃金労働しているという記事だった。電機工場で働くブラジル人の記事、日系 2 世プロモーターのインタビュー、日系南米人たちの子供の不就学問題、外国人研修生を低賃金

で不正に働かせる記事などがどれも具体的エピソード、数値とともに書かれていた。

漠然とした話は耳にしていたが、この実態に衝撃を受けた。日本の製造業はそのように働かせているのか、日本の製造業、ひいては日本はこのような現状の上に成り立っているのか。

日々の暮らしの中で、私たちはこれを享受しているのか。知っていたようで知らなかったこと、この問題は当面解決しないだろうこと、この事実を知りえたことは収穫だった。

3. 日本語ボランティアシンポジウム 2006「日本語で暮らすということ」

12月に開かれたシンポジウムに実習の一環で参加した。講演者はそれぞれ、わたしは何人かというアイデンティティーに触れていた。母国では外国人、日本では外国人と言われる・・・と言っていたMさんは、後に「私は世界人だ」と答えを出していた。在日韓国人のKさんも、高校のとき本名を使うことを宣言し、韓国人であり、日本人であることを葛藤の末受け入れた。生まれた時はカンボジア国籍で、家族で日本国籍を取得したNさんは、ずっとカンボジア人であることにコンプレックスを持っていたが、今は自分に自信を持ち始めることができたと話している。また母語やその文化に劣等感を抱いていた理由の一つに、日本の排他的社会、日本の学校教育を指摘していて、アイデンティティーの形成には周りの環境も影響すると知った。己のルーツを知ること、受け止めることは、己がどうあるかにつながる大切なことだとこのシンポジウムで感じた。

4. 終わりに

保見ヶ丘日本語教室での実習の中で、日本語教師になるための力を養い、養われつつ、他の機関で外国人を取り巻く環境に触れた。小学校の見学・行事ボランティア、AOTSの見学・ボランティア日本語教室にシンポジウムへの参加などさまざま。実習を振り返ってみて、教室活動に加え、各種の見学・参加、また、外国人住民についての講義など、本当にたくさんのことを学び、経験する機会に恵まれた。いわば、日本で暮らす外国人というくくりで広く学んだ1年間だった。彼らはぜんぜん遠くなんかない、すぐ近くにいる。そして私にできることも近くにあるのだ。それを保見は教えてくれた。最後に、日本語教室で撮った集合写真が手元にあるのだが、みんな笑って本当にいい顔をしている。この一枚に保見の教室が表れているように思える。

日本語教育実習を通して起きた私の中の変化

外国語学部英米学科 真野由紀

0. はじめに

私は高校を卒業するまで、外国人といえばアメリカ人を始めとする欧米人を指していた。そして英語が好きだった私は、そういった外国人と関わるために将来英語を極めたいと考えていた。今思えば非常に視野が狭く、片目をつむって世界地図を見ているようなものだった。

あれから6年が経ち、さまざまな場面でいろいろな人々と出会い、多くのことを体験し、あらゆる角度から学び、自分の成長を感じるとともに、自分の視野が広がっていく喜びを感じてきた。この実習の一年間で、私は何を新しく学び、どう変わったのか。実習前の自分から振り返っていきたいと思う。

1. 実習前のブラジル人に対するイメージ

私が日系人の存在を初めて知ったのは、短大時代に地元である N 日本語教室に、日本語ボランティアとして通い始めたのがきっかけだった。その教室で初めて日系人と関わり、少しだけ彼らの労働環境や生活スタイルを知ることができた。

ブラジル人の Aさんは、指が2本無かった。仕事の話になったとき、Aさんは自分から、仕事中に機械で指を切断してしまった話をしてくれた。それでも、随分前の出来事だったからか、彼は怒る様子も悲しむ様子も無く、明るく振舞っていた。もう一人のブラジル人、Bさんはもう年配で60歳くらいだったが、冬になるとブラジルに戻り、暖かくなったら日本に帰ってくるという、渡り鳥のような生活を送っていた。彼は、日本にもブラジルにも居場所がある生活を、楽しんでいるように見えた。それが19歳の時に抱いた私の日系ブラジル人のイメージだった。

県大に入ってから、また少しブラジル人のイメージが変わった。アルバイト先の飲食店で、非常に多くのブラジル人を接客したからだった。平日はそれほどでもないが、土曜の夜ともなれば、お客の約3割がブラジル人だった。そこでの姿を見て、彼らに抱いたイメージは、気配り上手で、よく食べて、多人数で楽しむことが好きで、楽しみ方が派手で、反応が良くて、表現が豊かで、そして多くの場合は、実際の年齢よりも年上に見えるというものだった。しかし、彼らの普段の姿をそこから見ることはできなかったため、私は出稼ぎ労働者である日系人の考え方や生活をもっと知りたいと思った。

実習が始まる前、保見へのボランティアはできるだけ毎週行こうと決めていた。とにかくたくさん現場を経験して、保見から学べることは最大限に吸収したいと思ったからだ。また、毎週会える顔として覚えてもらうことで、学習者にとって安心してもらえる存在になりたかったからだ。こうして、私の日本語教育実習は始まった。

2. 実習を始めて

2.1 私が知っている日本語教室

先ほども述べたように、私は以前、N日本語教室で1年ほどボランティアをしていたことがある。現在、その教室はもうない。設立からの歴史をたどれば、随分長く続いていた教室だったが、将来的に持続可能な体制が整っていたかといえば、そうではなかったように思う。教室は基本的には個別対応で、会話か、文法か、学習者が教えてほしいものをボランティアに聞くというやり方だった。少ない時で、学習者とボランティア合わせて10人、多い時は、全員合わせて30人くらいであった。その教室の問題だと感じた点をいくつか挙げてみる。

まず、中心となっているボランティアの負担が大きいにも関わらず、若いボランティアにどんどん任せようという雰囲気はなかった。そして、ボランティアも学習者も気まぐれで来るので、学習者はいつも違うボランティアに教えてもらうという状況だった。そのため、ボランティアから「いきなり初対面の人に当たっても、何を教えて良いかわからない」という声もあった。学習者の進行状況を引き継ぐ体制が整っておらず、ボランティアはその都度、行き当たりばったりで、手探りの指導を行っていた。また、子どもを連れてくる学習者には、子どもはボランティアの手に負えないので、丁寧に断っていた。

それでも集まるボランティアが良い人たちばかりだったし、教室の雰囲気は明るかったのだから、学習者も来てくれたのだと思う。ここでは私も良い経験をさせてもらえたとし、人との出会いが自分を大きく変えた。しかしこの教室では、学習者に教えて「あげる」、ボランティアに教えて「もらう」、学習者がきて「くれる」、という気持ちが、多くの人の気持ちにあったことは確かである。「来てくれたの？ ありがとう！」と、私は学習者に対して言っていたし、日本人スタッフにも私自身がそう言われることもあった。その後は、忙しくなったことや、自分では行かなければいけないと思い込んでいたことに疲れてしまったことが理由で、私は次第に行かなくなってしまう。

2.2 保見ヶ丘日本語教室の新しい方法に出会って

そんな日本語教室での経験を持っていた私は、保見ヶ丘日本語教室と出会って、この教室の方針に深く感動した。ここでは、「相互理解」を目的として、ボランティアと学習者が交互に座り、互いに聞きたいことを聞き、話したいことを話す。紙に書くことは重要ではない。テーマを与えられて話すことによって、普段の会話では聞くことができないことまで話すことができ、会話はどんどん弾む。ここの学習者は、もっと相手のことを知りたいという気持ちが動機となって、話す・聞くという能力を伸ばしているのだ。週1回の授業で簡単に日本語能力が上がるというわけではないが、学習者とボランティアの距離、学習者同士の距離は、確実に縮まっていくのが分かる。ここに集まる学習者は、はじめは期待していたような勉強ができないと思うかもしれない。実際に、それが理由で来なくなった人もいるかもしれない。しかし私が見てきた限りでは、学習者は徐々にこの教室のやり方を気に入って、馴染み、相手のことを知る楽しさや自分のことを話す

楽しさを、感じていっているように思う。もちろん、話題はいつも楽しい内容や笑い転げる内容でなくても良い。話すことで相手のことをより理解できる内容であれば、やりがいを感じるものだと思う。学習者もボランティアも、能力向上の実感より、ありのままの自分を出せることや居心地の良さを実感することで、みんなが教室に「来なくなる」。それが保見ヶ丘日本語教室だと私は考えている。

保見ヶ丘日本語教室と、N日本語教室との大きな違いは、若者がエネルギーとパワーを持って教室を引っ張っていることだ。人数の面でもそうだが、それ以上にパワーという面で、若者がクラスを任されて必死に応えている。県大生には、実習だからというプレッシャーもあるが、それが良い形で教室全体を明るくしていることは、大学と地域の活動が繋がる意義がここにあると実感させる。また、ボランティアも学習者も安心して気軽に来ることができるのは、事前準備がしっかりしていて、その日やることははじめに提示されるからである。そのためには、ML（メーリングリスト）や教案作りなどスタッフのやることは、報告・連絡・準備…と大変だが、みんなで協力することで負担は軽減される。ML というシステムは、パソコンを媒介として「協働」作業を可能にし、今の時代にあってはとて有難いものだと感じる。そしてこの教室は、「誰でも入れます」と謳う保険のCMのように、本当に誰も排除しない。日本語ができる学習者は通訳としての役割があり、子どもは子どもクラスで勉強ができる。私はこの教室に出会い、このやり方で実習ができたことを心から嬉しく思った。

2.3 みんなの興味・関心レベルに話題を合わせるとのこと

保見のやり方が面白いのは、人の気持ちを動かすところにあると思う。10月15日、初めて中上級クラスにボランティアとして参加し、みんなの気持ちが入り込んでいくクラスを体験した。その日のテーマは、「扶養家族の範囲」であった。正直、私は誰が誰を扶養し、どこまでが扶養範囲かと言われても、良く分からない。しかし学習者の興味は旺盛だった。かなり日本語が話せるということもあって、クラス中、みんなが話題をふって質問を交わし、非常に有意義な時間となった。この日のクラスで、私は感想にこう書いた。

中上級はみんなの「知りたい」という意識も高く、深く濃い話ができたと私は大満足です。「扶養家族」というテーマは難しいような響きがありますが、Tさんがうまく進行し、豊かな経験と知識でお話しされるので、これは私たちにはとてもできまい！と感じました。（中略）「言葉が難しいから、話すのをやめる」というのは間違いだと、いつか言われたことがありましたが、まさに今日は体験によってそれを理解しました。「扶養」とか「世帯主」といった言葉は説明すれば誰でもわかるし、みんな立派な大人なので、むしろ自分たちに直接関わる話題になら、あえて使うことに意義があると感じました。中上級では特に、テーマのレベルを下げるのではなく、むしろみんなの関心のレベルに合わせる事が大切なのだと思います。（略）

そこで思い出したのが、自分の辛い体験である。高校一年生のときに英語教室に通い始め、私は自ら中級の会話クラスを選んだ。しかし、他の日本人生徒はサラリーマンの男性と、大学生と、小学校の教師をしている女性だった。まだ 16 歳だった私は、大人たちに混じる居心地の悪さを感じながら、毎週通っていた。大人達の遠い世界の会話は毎週続き、私は話すことを制限された気持ちになって、ほとんど話題に自分から入ることはできなかった。徐々に私は大人しい静かな自分を演じることにし、この教室だけの自分を作り始めた。半年ほど続けてから、忙しいことを理由によりやく辞めることができた。

このとき私はなぜ苦痛を感じていたのか、今になって分かることがあった。それは、自分が話したいこと・聞きたいことと、他の学習者の話したいこと・聞きたいこととの間にズレがあり、他の学習者に興味を持てなかったことが原因だったのだろう。それは年齢の差が問題なのではない。年齢で分けられるものではない大人としての自覚、子どもとしての自覚が、この英語教室内の溝を深めたのだと思った。

3. 進行役の役割とは？ 私の授業から

3.1 テーマ設定

12月17日に私は初めて進行役をした。それまではほぼ毎週通いつつも、準備の足りないボランティアの役に留まっていた。クラスの雰囲気には慣れているため、進行役だからといって緊張する必要はないのだが、準備不足では緊張してしまう。一年前の教育実習で、人前での自分の性格を一番よく理解していた。この時の授業をもとに、私は進行役として何をすべきだったのか、その役割を考えていく。

進行役にはまず、テーマ設定という役割がある。これは記録係の S さんと相談の上で決められるべきものである。私は、12月という季節を意識して、学習者に「何が聞きたいか」を考えた。クリスマス、年末、正月…どれもネタは尽きないテーマだと思った。国での過ごし方や今年の予定、理想の過ごし方など、話は尽きないだろう。私はその中でも、一番時期が近い「クリスマス」についてやりたいと思った。日本には、親がサンタクロースになりすまして子どもにプレゼントをあげる習慣がある。そこで、初級クラスの学習者、ブラジル、中国ではどうか。この話題ならば日本人同士でもそれぞれの家庭に違いが見られるし、クラスのメンバーは親世代から若者までいるので、その違いをきっと楽しめると考えた。

そして土屋先生に、そのことを相談した。すると先生は、「中国はどうだろうね？ クリスマスに何かするかね？」と、私に疑問を投げかけた。さて、中国人はクリスマスに何かしないのか。出身地や育った家庭にもよるのでは？ もし、中国人学習者がクリスマスについて経験がなかったら、話す話題が全く無くなってしまうのか。

そう考えた結果、私はクリスマスというテーマを一つに絞らず、幅を持たせて「年末・年始」でいこうと考えた。ところがここで、新たに先生から案を頂く。「24日のクリスマスパーティーで、何かやりたいことがあるか聞いたら？ まだパーティーで何をやるか決まってないでしょ？」なるほど、みんなで過ごすクリスマスパーティーについてな

らば、誰でも話すことができる。そこで私は、「今年の終わりにすること、クリスマスパーティーでしたいこと」というテーマに決めた。「今年の終わり」というのは、「年末」という言葉を避けた言い方だ。そして「今年の終わり」ならば、クリスマスも自然と含まれるだろうと考えた。また、正月まで入れると、中国人の旧正月の話など話題が広がりすぎると考えたため、テーマは年末までにとどめておいた。

このテーマを設定するにあたり、国による行事や習慣の違いをここまで意識するとは思わなかった。しかし、宗教の違いについては、自然に話題に出てくるのみに留めておきたいと考えた。テーマ設定やクラス内での活動準備において、使用する物を揃える他に、そういった部分の予測も重要な準備だと感じた。

3.2 退屈そうな学習者に対して

12月17日、私が進行する授業が始まった。10:05にスタートしたが、この時点でまだ学習者はRさん一人のみだった。それに対して日本人は5人もいた。正直言って、「やりづらい」と感じずにはいられなかった。しばらくして、学習者のCさんとボランティアMさんが入ってきた。少し安心した。遅れて入ってきた2人に、それまで話していたことを伝えた。そして「今年の終わりに何をするか話しましょう」と言って、クラスを2グループ（1グループ：学習者1人、ボランティア3人）に分け、それぞれに分かれて話し合いを始めた。

グループ内でだいたい全員が話し終わったころに、クラス全体に戻り、全員で話したことを共有する。「Kさんは、今年の終わりに何をしますか」一人一人順に聞いていくうちに、私の心配していたことが起きていた。一人一人の発表が長くなり、学習者のCさんが退屈そうに、黙ってよそ見をしていたのである。それを見て私は、早くみんなの発表を終わらせなければと、必死になり始めていた。途中で、日本人同士だけで話をしてしまう部分もあり、原因は学習者に対するボランティアの数が多いことだと、私はひしひしと感じていた。

この時、退屈そうにしている学習者に対して、私は何をすべきだったのか。問題点はどこにあったのか。私は、学習者とボランティアの比率が悪く、進行役にとって不都合だったことが大きな要因だと考えていた。しかし、実習後に土屋先生と反省会を行い、アンバランスの解消法をいくつか見出すことができた。

まず、学習者に分からない言葉を日本人が使っていたこと。私は進行役として、学習者がそれを理解できているかどうか質問を投げかけることで、もっと会話に巻き込むことができたはずである。例えば、授業の中で、こんなやりとりがあった。

ボランティア：31日、おせち料理を作ります。おせちは日本の伝統的な料理です。お正月に食べます。

学習者：おせち、食べ物？

ボランティア：そう、食べ物です。

この後、ボランティアは「今年の終わりにすること」というテーマをもとに、引き続き、自分の予定を発表した。しかし、こういった細かな言葉「おせち料理」など、一つ一つ

を大切にすることはできたはずである。「ブラジルにも、正月の食べ物ありますか」など聞くことで、話を深く進めることができたし、学習者が理解しているかどうか、確認ができたと思う。

そして、分からない単語は「学習者にとって単なるノイズでしかない」と先生に指摘され、大きな問題はここにあったと思った。分からない単語が出てきた時点で、学習者は聞く気をなくす可能性がある。それは、私自身の英語教室の苦い体験で、身を持って分かっていることだったが、進行役としてその配慮に欠けていたのだ。その点は、「誰かが難しい言葉を発する」ことは自然な流れとして、それに対応する意識を持っておくべきだったと思う。

クラスの中で、学習者がどれだけ参加できるか。そういった学習者の参加度を考えたとき、学習者対ボランティアの比率バランスはそれほど大きな問題にはならない。そこは進行役やボランティアの配慮で補える部分である。では、どうしたら学習者とボランティアが対等になれるか。どうしたら学習者も話したいことを話せるか。どうしたら、学習者がやる気をもって参加するか。進行役として、考え続けていきたいと思った。

3.3 一番聞きたいことを聞くということ

私がこの授業の中で、一番聞きたかったのは、サンタクロースの話であった。「テーマ設定」の章でもその理由を挙げたとおり、これを主なテーマにはせず、対話活動のグループの中で聞ければ良いと考えていた。しかしこの日、中国の学習者は全員欠席で、宗教的違いの配慮はそれほど必要ではなくなっていた。

私はクリスマスの話題になったタイミングを見て、ブラジルの学習者Rさんに聞いてみた。「日本は、子どものとき、サンタクロースはお父さんとお母さんです。ブラジルは？」彼の答えは、ブラジルも日本と同じで、親がサンタクロースのフリをして子どもにプレゼントを渡す、とのことだった。その後は、今でも祖母・母からプレゼントが送られてくるという話になり、グループ内の会話は温かい雰囲気にも包まれた。偶然その日、Rさんが着ていたTシャツも、去年のクリスマスプレゼントだということで、会話はさらに和やかになった。

先ほど退屈そうだったCさんは、もう一つのグループの中で楽しんでいるようだった。授業を終えて、今日Cさんは楽しんでくれたらどうかと気になり、サンタクロースの話題で話しかけた。すると、Cさんは急に嘔き出して笑いながら、自分のサンタクロース体験を話してくれた。Cさんは、自分の子どもが小さいとき、プレゼントを部屋の奥に隠しておいたという自分のサンタクロースの体験話をしてくれた。そんなCさんの楽しそうな表情を見て、それまでの不安が少し解消された。

私はこの授業を進行して、「自分が一番聞きたいこと」を持っていることの大切さを学んだ。授業の中で、これを絶対聞くんだった！という強い気持ちを持ち、ここさえ押さえおけば、ここから話題が逸れてもきっと不安は生まれまいだろう。私は「サンタクロースのことを聞く」と決めていて本当に良かったと感じた。進行役にとって、一番聞きたいことを決めてテーマ設定をするということは、授業計画のスタートである。そして、

気持ちの上でも最も根幹にあたる部分だと感じた。「スタート地点にしっかり足をつけることから始める。」一度定めたスタート地点に自信を持って授業を進めれば、クラスは必ずついてくる。一昨年前に経験した中学校での教育実習でも、「自信を持つこと」が「人を引っ張る原動力になる」と学んだ。これはどんな仕事においても、活動においても、ずっと忘れないでいたいと私は思っている。

4. 実習を終えるにあたって

まず、実習を終えるにあたって、この実習を心から素晴らしいものだと思った。一人でやりぬく研究とは違う。他者との協働によって進められるこの実習は、人間社会の学びであった。そして人との出会い。人生には無駄な経験も出会いもないけれど、この一年間は特に素晴らしい経験、素晴らしい出会いをしたと感じ、感謝している。

実習を通して、私の日系人に対するイメージが少し変わった。日系人はみんな明るくポジティブだと今まで思っていたが、一人一人を知っていくとそうでもない。控えめだったり、繊細だったりする彼らの内面を知ることができたのは、この教室活動を経験したからである。出稼ぎ労働者たちは劣悪な労働環境に置かれながらも、長時間労働に耐えながらも、それが母国で働くよりもよっぽど良い条件だという理由で、日本での生活を選んでいる。「日本は朝、一人で散歩ができる」と言っていたQさんの言葉をよく思い出す。普段、ニュースなどで戦争があるとかないとか、平和だとか意識することはあっても、日本を「安全な国」として意識することはあまりなかった。彼らと出会ってから、私の中で一番身近な国はブラジルやペルーなどの南米である。「日本」を考えるときの物差しとして、日系人の目線でこの社会を見ていくともっと面白いだろうと思う。

私の周りには、ブラジル人に対して「怖い」「できるだけ関わりたくない」というイメージを持っている人が多い。外国人をひっくるめて怖いといっているのではなく、昨今の日系人が絡んだニュース報道で、多くの人が日系人に限定して恐怖心を抱いている。何も彼らのことを知らないのに一方的にそう決め付けるのは、明らかな偏見だと私は感じていた。しかし、私から「怖くないよ。みんな良い人だよ」と言っても説得力がない。偏見の壁を取り払うにしても、そういった人たちに外国人と関わる気持ちがないことが残念な点である。

先日、日本語教室に通うSさんの思いが新聞に大きく掲載された。日本人と外国人のそんな心の距離を、「もっと交流すれば誤解は解けるのに」とSさんはコメントしていた。私もまさにそうだと思っている。互いに関わることは、プラスになっても、マイナスになることはない。私が自分の姿を人に見せることで、多くの人にそう伝えていきたいと思っている。

実習活動を通して感じたこと

文学部英文学科 玉山和将

0. 日本語教育実習に参加した過程

私は県立大学に日本語教育実習に参加したくて入学した。その理由はたくさんあるが、まずひとつは人と話すことが好きだからである。特に自分の知らないことを知っている人と話すことが好きなので色々な国の色々な年代の人と話ができるこの実習はすごく魅力的だった。ふたつ目に自分が在日韓国人であるということである。高校生の頃に帰化をしたので国籍的には日本人だが、韓国人であるということは変わらないと思っている。そのことで悩んだこともあった。日本に住む外国人として、在日韓国人とブラジルやペルーや、中国の方たちは私とは境遇が違うかもしれないが、そんな自分と似ている立場の人と話がしたかったので、この実習に参加しようと思った。その実習一年で学んだことを今回書きたいと思う。

1. 日本語ボランティアシンポジウムに参加して

私は12月2日に日本語ボランティアシンポジウムに参加した。そこで講話された方の中に、在日韓国人で唯一、本名で教壇に立つ先生がいた。私の姉も現在名古屋市立の中学校で教師をしている。しかし私の姉は既に帰化してから教師として働きだした。私はそれまで、日本人に帰化しなくては教師になれないと思っていた。だから韓国籍のまま教師になった人がいることに驚いた。そして私たちが帰化した理由もただ姉が教師を目指していたということだけではなく、教師になるために韓国籍では不利になるのではないかという私の両親の考えがあったと思った。私の両親の世代はまだ韓国人に対する差別が根強く残っていた時代で、私の父も韓国人ということで馬鹿にされたりした経験があることを語っていた。私はもはや韓国人に対する差別等ほとんどないと思っているが、父親の中では未だに差別問題が頭にあると思う。

この先生の話の内容が、私は自分が体験したことや自分が感じたこととほとんど同じと言っていいほど似ていて、すごく共感した。小学校の卒業証書をもらう時に、担任の先生に、どちらの名前を使うか聞かれ、自分が韓国人であることを改めて知ったこと、そして「玉山和将」という名前が通名で、本名は韓国の名前であることを知ったことや、高校生になった時に外国人登録をしたことなど、私は親戚以外の在日の方に会ったことがなかったので、自分と同じ体験をしている人がいることがすごく新鮮だった。

私と、この先生の決定的に違うことは、私が帰化をしていること、そして、先生は韓国名を名乗っているということだ。私は、この先生は本当に強い人だと思った。私は今この実習をしていても自分が在日であることをほとんどの人に伝えていない。大学の友達でも知っている人はほとんどいない。私は高校生の時に、信頼していた人から在日であるということで偏見を持たれたことがあり、あまり在日ということに自信を持たずに

いた。今回この講演で聞いた、在日の先生や日系ブラジル人の方の話は私を勇気づけてくれるものだった。「私は日本人であり、韓国人である。」「日本人でもブラジル人でもない、私は世界人だ」という言葉は今でも心に残っている。そして私自身が、自分が在日であるということにこだわりを持ってしまっていたのだと思った。このシンポジウムに参加したことで、自分の中で長い間悩んでいたことが少し解決したように思う。これからはもっと自分に自信を持っていきたい。

2. 子供たちとのふれあい

わたしは、9月頃から、よく子供のクラスを担当するようになった。そのクラスには中学生のHちゃんが来ていて、中学校での勉強を習いに来ていた。最初に彼女に会った時は、中学生の女の子が、大学生のお兄さん（おじさん？）と話をしてくれるだろうかと心配だった。しかしそんな心配はすぐになくなった。Hちゃんはとても人懐っこく、色々な話をした。学校のことや友達のこと、部活のこと等、色々な話をしてくれた。最初はほとんど話をしただけで勉強にはあまり時間を使わなかった。Hちゃんはあまり漢字が読めないで、漢字の読みを書いてもらったり、数学、英語、理科などの勉強を教えてもらいに教室に来ている。しかし、私はやはり勉強よりもHちゃんと話をしているほうがおもしろいのでいつも勉強より話をするのに時間を使ってしまいがちだった。Hちゃんも勉強よりも話をしている時の方が楽しそうなので、ついつい勉強を忘れがちになってしまった。しかしHちゃんが漢字が読めないというのはすごく大きな問題で、国語だけでなく、理科、社会など、色々な勉強で他の子供たちよりも理解するのに時間がかかってしまう。また、お父さんも教育熱心な方で、それがHちゃんのプレッシャーになってしまわないかと心配になることもあった。これは私の意見だが、勉強は必要に迫られた時にやればよいと思う。実際私も、中学、高校と勉強は二の次だった。勉強よりも遊んだり、部活をしたりすることに時間を使っていた。勉強は、やらされているうちは、なかなか身につかないと思う。今のHちゃんはどうしても勉強をやらされているように見えるので、自分が本当に必要と思った時に勉強すればよいと思う。しかし、Hちゃんの場合勉強をしたいと思った時にはもう既に遅いという可能性もあるので、私は教室活動中も、Hちゃんの勉強をしっかり教えるか、もっと話をしたりゲームをする時間を多くするかどちらがいいか悩んだ。でもHちゃんが毎週この教室に来てくれて、色々な人と話ができるこの教室がなによりHちゃんのいい経験になると思う。中学生の時代に、大学生や色々な年代の人と話ができるこの教室が、なにより彼女にとっていいものだと思う。Hちゃんの勉強ももちろん心配だが、地域の繋がりが無くなりつつある社会でこの教室の存在は子供達にとってすごく意味のある場所だと思った。最近では、教室に来てくれる子供達も増えてきて、ますます子供クラスも活気付いてきた。こんな貴重な教室にHちゃんや他の子供達も、大きくなってからも遊びに来て欲しい。

3. 教室活動で学んだこと

私がこの日本語実習を通して学んだことはたくさんある。何より、自分の知らないこ

とをたくさん知ることができたことがよかった。ブラジル、中国など、色々な国の方や、自分の両親や祖父と同じくらいの方と話す機会が持てて、毎回興味津々で話を聞いていた。私はドラムをやっていて、ロックが好きだが、学習者の方でもロック好きの方がいて話をするといつも盛り上がった。最近ライブに行くとお客さんの2割位がブラジル人ではないかと思うほど、ブラジル人でロックが好きなのは多い。共通の好きなものがあるというだけで、心が通じ合う気がして嬉しかった。教室活動で何より大切なのは「おもしろい」と思えることだと私は感じた。私は何より教室のことを思い出すと「おもしろい」という言葉が一番に頭をよぎった。教室でも、餅つき大会でも、夏祭りでもやっぱり「おもしろかった」というのが一番の印象だ。そして、その活動の中で出会った地域の方や、学習者の方、みんなとてもあたたかい人ばかりで、本当にいい思い出になった。日曜日の教室は、前の日に朝までアルバイトで15分しか寝られないという状況もあったが、それでも教室に通ったのはやはり、会いたい学習者の方、聞きたい話、なにより、「おもしろい」からだと思う。国や年代や性別、何も関係なく、この「おもしろい」という気持ちを共有できるという教室は素晴らしいものだと感じた。

私は昔から性格が大雑把なのか、色々な大事な連絡も遅れてしまったり、連絡し忘れたり、直前になって焦ることがよくある。この実習中も連絡が遅れたり、し忘れたり、他のボランティアや先生方にも迷惑をかけてしまったことがあった。実習では実習以上に、社会人として大切なマナーや、連絡を一本化してしまわないこと、報告、相談等の大切さを知った。このことは私がこれから社会人になる上で一番守っていかなければならないこと、自分の一番直さなくてはならない点だと思う。社会に出る前にこの教室で色々注意を受けてよかったと思う。

実習で一番学んだことはなんといっても、自分が在日であるということにこだわりを持ってしまっていた自分のなかで何かが少しだが変わったような気がする。上にも書いたが、昔、「在日である」というただそれだけで、人の態度が変わったことがあり、国籍の違いだけで、人を判断したり、見方を変える人がいるので、自分のことを話したくなくなってしまうことがあった。しかし、ボランティアの方も含め、実習中に会った人は本当に、国や年齢やそんな違いを一切考えず付き合っていける人たちだったので、本当に自分の中で勇気を持てたような気がする。最近私は大学の友達数人に自分が在日であることを伝えた。みんな私に対する態度はもちろん変わらなかった。自分が一番こだわってしまっていたのだと、本当に気づかされた。しかしブラジル人の学習者の方がたまに、「ブラジル人だから」という見方をされるということをお話しているのを聞くと悲しくなる。未だに偏見や差別を持っている人はたくさんいる。そんな人達の考え方を変えていくためにも日本語教室がこれからどんどん増えて発展して欲しいと思う。

気になる隣人

外国語学部科目等履修生 金田文子

0. はじめに

私は、日本人外国人を問わず、自分とは違う人間その人に関心があり、気になる隣人として見てきたが、接触を開始するにはいつも抵抗感があった。日本語教育実習の経験をとおして、人とつながること、関係を作ることについて自己開発されたとまでは言えないかもしれないが、納得したことについて報告する。

1. 外国人労働者とのかかわり

私は愛知県北東部の山間地域、設楽（したら）町に住んでいる。十数年前から日系ブラジル人労働者がこの小さな町にも住むようになっていた。ほとんどが自動車用配線部品の工場労働者だったので、不況にともなう工場の縮小でどんどん去っていき、今では数えるほどになった。

Nさん一家は、佐久間ダムに溜まる砂を取り除く地元の小企業へ働きにやってきた。ダムの砂は溜まり続けるので仕事は途切れることがない。低賃金で勤勉に働く（と想像される）Nさんは、零細企業にとって貴重な戦力なのだろう。近所に住むようになって10年ほどになる。末っ子のH君が小学校から中学校に通う時代は、近所の子どもたちと遊んだり部活をしたりする姿を見かけたし、人なつこい笑顔で近所の大人や私も日本語でよく会話をした。ブラジルから年長の子どもたちが次々にやって来たが、皆静岡へ働きに行き、H君も中学を卒業すると静岡の工場へ出て行った。今、ここにいるのは、父親のTさんと妻Sさん、そしていちばん最後に日本にやってきた娘のMさんだけである。私を含め近所の人とはあまり接触がない。声をかければ実に礼儀正しくTさんが応対してくれるが、Sさん、Mさんは日本語が苦手なため話さない。日本人とあまりかかわらないから日本語を必要としないのだろうか。日本語が解からないからかかわりが持てないのだろうか。Nさん一家も私も、朝早く仕事に出かけて夕方遅く帰る暮らしが続いていて、ゆっくり接する機会も持てていない。日曜日は家族で出かけているようだ。ブラジル人コミュニティへ行っているのだと想像している。私たちはもうこれ以上は仲良くなれないのだろうか。

私の家族の一人は仕事上接した外国人を、特にホームシックになったときなどに時々家に連れてきた。アメリカ、ブラジル、中国、フィリピン、インド、オーストラリアなどの人がこれまでにやってきたが、今ひとつ打ち解けられないと感じてきた。私の語学力不足を理由にしてきたが、果たしてそれだけだったのだろうか。言葉の壁は確かに在るには在るのだが、もっと別の何かが左右しているのではないかと思うようになっていた。

2. 「知らない」という距離

保見が丘日本語教室での自己表現型の話題シラバスの実習は、互いに知り合い共生を生み出していくものという理解で臨んではみたものの、その具体的な姿が見えず不安と戸惑いの連続だった。自分の近くに知らない人や知らないことが入ってくるのは不安になる。「疑心暗鬼を生ず」で、何でもないことまで恐ろしく感じられる。NPO スタッフの方々やボランティア、さらに学習者と、一気に知らない人が近距離に寄ってきたわけだ。知らない人には無関心でいられるが、同じ場に立てばコミュニケーションが生じて無関心では居られない。しばらくは距離を保って様子を見る時期が続いた。とても対等な立場とは思えず、合わせよう慣れようとしていたように思い出す。

話題についても、「何を？」と迷い続けた。「伝えたいこと・聞きたいこと」を易しいことばに置き換えてと指導いただいたが、私には伝えたいことが何なのか容易に見極められなかった。教案を「作るが、捨てる」というベテラン教師の極意のようなことがいったいいつできるようになることかしら、私にはもう時間が無いな（私がリタイア後の学生であるため）とすっかり尻込みしてしまった。

しかし、日本語教室の参加者は、語り合うことで表情に変化を見せているように見えた。学習者、ボランティアを問わず、積極的に声をかけて人をつないでいくような動きを見せる人も出てきた。誰かがお休みするとその人の心配をするようになるなど、知らない人たちを自分の周りを取り込んで成長していき、知り合いに近づいていた。私は羨ましさを感じた。まだ、「伝えたいこと・聞きたいこと」が見つけれない状態だったのだ。これを見つけれられることは、相手に関心を抱くこと、人として知り合いになることなのだ気づいて、自分の殻を早く破らねばと焦った。それで、構えず普段どおりの自分で居るようにすることとひとの話に耳を傾けることを心がけるようにした。

日本語教室での話題は予測しない方向へ発展することがあり、特に中上級クラスの学習者が国のことを様々話してくれるのを聞いたり、日本で感じたことを聞いたりするのはとても興味深い。Iさんが結婚相手を日本人(血筋)にこだわっていること、Fさんが、日本の親や教師が子どもに「ばか」ということばを頻繁に使うことをブラジル人の親は受け入れがたいと思っていることなど、個人の考えていることを私という個人に話してくれる場面では「知り合い」になったとうれしく感じた。このような喜びを感じる人との出会いとあいまって、例えば、外国人労働者の置かれている状況や子どもの問題、日本語教育の研究活動やボランティアのネットワーク活動など、大学の教室で様々な情報もたらされた。だんだん日本語教室が特別な場から日常の場が変わって行くように感じた。設楽から豊田という物理的な距離1時間半があまり気にならなくなった。実習に行くという構えから、一員として在るという距離感に縮まっていったのだと思う。

私を取り巻くいろいろな人との関係が改めて気になった。Nさんとは10年間あまりも知らない人同士でいることが寂しく思えた。また、家族やグループ活動をしている仲間たちに対しては、慣れから来る思い込みやきめ付けがなかったか反省する点があった。よき隣人になるための伝え合う努力が足りないと思った。「知らない」でいることは楽なことではあるが、自分の周りの世界を取り込めないでいることだ、つまり自分が成長で

きないでいるということだと思った。

3. 何のための日本語教室か

日本語教師になる勉強ととらえて参加した日本語教育実習は、実は人間私の根っこの部分を見つめることだった。人との関係を築いていくこと、そのとき取り込んだ周りの広さが自分を成長させてくれることを再確認する機会だった。また、ボランティア活動というものも、自分だけの熱い思いだけでなく、常に状況、学習者や相手の気持ちに添うものかどうか、それを自分ができるかどうかを判断できることが大事だと確認した。実習生の教案と授業記録の吟味で、繰り返しこのことを学んだ。それで、私はまたいつそう用心深くなってしまい、以前ほどの積極さでは人に働きかけることができなくなった。私にできることなど限られているのだ。こういうとネガティブな言い方に聞こえるかもしれないが、限られている中に自分が大切にしなければならないものがあるのだと考えると、落ち着いた気持ちにもなった。私は、自分の足りない点を数え上げ、それをできないことの理由にするのを止めようと思った。

設楽町の隣、新城市へ働きにやってくる外国人研修生の為の日本語教室が昨年からは開催されていたことを最近知った。商工会が日本語教室事業を受託して補助金を運用し、講師を選択して実施しているのだそう。ここでは完全な構造シラバス、教科書を中心にした学習指導が展開されている。配置先の企業でうまく働けることを主眼にしている。日本語教室の目的も雰囲気も現実には様々あるのだと実感している。来日目的や受け入れ側の思惑が絡んでいるとはいえ、保見の教室での人間的な自由で温かい雰囲気を知る私にとっては、新城の教室の硬い雰囲気は気になって仕方がないところである。

海外でシニアボランティアを経験してきた元校長の講師が、私を一部受け入れてくれ、昼休み(私は商工会館内に事務局室を持つ社団法人にいる)に限って短時間の雑談時間を持つことができることになった。会話をして日本語を上達したい学習者と「話題シラバス」に課題を持つ私とがうまくマッチングしたというところだ。学習者に対して以上に、主催・運営スタッフに相当の配慮をしてこのチャンスを壊さないようにしている。出会いを大事に思う人としての会話を中国人の研修生たちとの間で試行錯誤し、成功反応を蓄積し失敗体験を生かしたいと思っている。同時に自己表現型の学習法の良さを主催者側にアピールすることになったらうれしいし、アシスタントやボランティアを多く活用して多様にみちた人々の関係の中でやっていくことも考えてもらえたらいい。

保見の教室で県大生が教育実習として経験できる種々のことは、日本語話者とそうでない人との双方向の学びになっているという点で、現日本社会の中ではまだ特異なしかも貴重なものであることを確認している。

4. 「共生」というところの持ち様

設楽町は、昔からの地縁共同体の名残が最近まで残る地域だったが、今ではそのつながりはすっかり姿を消している。時にうっとうしく感じてさえいたこの関係が懐かしいくらいに影を潜めてしまった。Nさんと疎遠なのも彼らが日系ブラジル人だというばか

りでなく、地域共同体の喪失が主因かもしれない。少子高齢化が急速に進んだ田舎町では、新しい関係の作り方を模索してまだ掴めないでいるのが現状だ。そして、「知らない」という距離を保つ気持ちは、関係を作る煩雑さを遠ざけやすいのも事実だ。それでも、私は保見の教室が実現しようとしている共生という心の持ち様が、様々なことの基本になると思っている。自己表現・対話・受容の活動が共生を育むと実感してきたことを、地域の共同学習の場に転移活用していこうと思う。地域の気になる隣人たちとの関係構築においても、相手の気持ちに寄り添い、また私を伝えようと心がけるつもりだ。

5. 私の身体から離れて周りを取り込む

私は、次回(2月11日)の初級クラスの進行役を実習で担当することになっている。進行役の重要さを感じるにつけ、何を話題にするかが悩みの種だった。話題について相談したとき、土屋先生から「違いを知識として知るための授業なのか」という指摘を受けてハッとした。実習生仲間の実践記録の読み返しを経て、またこのレポートを書きながら考えたことによって、肩の力が抜けた気がする。

私の話題に乗ってもらおうと邁進することを目標にしない。私の自己満足に付きあわせてはならない。話題から会話・対話活動がスタートし、話を弾ませてもらえたらそれでよい。話が弾めば自ずとそれぞれの個性が語られるので、伝えあうことを楽しめることをここで幾度も経験してきた。きっかけを提供するのが進行役の私のできることなのだ。私の身体から離れて周りを取り込むことに心をくたくこと。あたりまえでいてなかなか気づけなかった相手に委ねるということ。共同の場に居るなかまを信じるということ、それが重要なことだと胸にすんと落ちた気がする。実習で学んだ大きなことだと思う。

年間継続の実習だからこそこんな気持ちになれたのだと思う。短期間では無理なことだった。2月、3月に私のところに進行役が続けてまわってきた。ボランティアが少なくなる時期のための偶然なのだが、明るい気持ちで取り組める時期に当たって幸いだった。じっくり向き合い参加者との会話を楽しみたい。話が弾む展開、楽しい小道具を準備して臨みたいと思う。

2. クラス活動を通して考えたこと

テーマ設定から見えてきたもの	大沼秀樹
教案がすべてではない	三宅由希子
初めての教案作り	石黒運美
読む・読まない ー保見が丘日本語教室を通してー	石原友紀
二度の進行役を通して学んだこと	佐原江梨子
「会話をする」ということ	田中景子
実習生としてのボランティアをへて	中野瑠美
日本語教室での授業を通して	野路文紗子
会いたい人に会うために	福岡沙與子
頼れる“周りの人”	村上智美

テーマ設定から見えてきたもの

外国語学部英米学科 大沼秀樹

0. はじめに

私は今年度の日本語教育実習を通して本当に多くのことを経験し、そこから様々なことを知り、そして学んだ。特に、保見の日本語教室において、コーディネーターを務めた時の記憶は鮮明に残っている。準備段階から終わってからの記録にいたるまで、苦労はしたがすばらしい経験をさせていただいた。

そこで、本レポートにおいては私の実体験を元に、クラスを行う際に今まで実習を受けてきた方々も直面したであろう、そしてこれから実習を受ける方々も直面するであろう、「テーマ」設定の難しさについて述べたいと思う。私がテーマを決めるにいたった経緯、クラスを終えてみて感じたことを、事実在即して考察していきたい。

1. 今年の抱負はなんだろう？

私は2007年1月7日にコーディネーターを務めたのだが、当初はテーマを「今年の抱負」としていた。なぜそのテーマにしようと思ったか、それは単純に私が、学習者も含めたみなさんの抱負を聞いてみたい、ということの他に「お正月」というものを違った方法で話してみよう、と考えたからである。1月7日という日付から分かるとおり、この日は年明け初のクラスであり、大方の人は「テーマはお正月かな」と予想しているであろう、というのが私の考えであった。そこで、少し違った角度からアプローチをし、面白いと思わせると同時に、話しの展開に変化をもたらそうと思ったのである。

また、私は毎年、年の始めに抱負を日記にいくつか書いている。新年会などでは友達と「今年の抱負は？」などと語り合っている。このようなことから、私は年始めに「抱負」を持つことは、ある意味当然のように考えていた。そして飲んでいる時のイメージをクラスに持ち込めたら、いい話ができるとも考えていたのである。

2. 誰に対してクラスをするの？

年が明けた2007年1月5日に、土屋先生の研究室へクラスの相談へ行った。その時に、テーマ設定に対する私の考えの浅はかさを実感し、急遽変更することになったのである。

まず先生に言われたことは「私は抱負はない」の一言であった。これでは話しは続けられない、一体どうしたらいいのか、という問題が浮かび上がった。私は先生にこう言われたとき、「まさか」と思ったが、その後何人かに抱負を聞いたところ、たとえ答えてくれても、とてもスムーズに話していける感じではなかった。それは恥ずかしいとか言いにくいといった心理面に関することが大きかったように感じた。

また、土屋先生が言うには、年の始めに抱負を聞くと言うのは、小学校などでやらされていたことであって、しかもそれに対する返答というのは「勉強をがんばる」や「健

康に過ごす」など、ある程度答えが決まったものであり、それは学校の先生が望むものである、ということであった。つまり学校教育の影響を完全に受けていて、それは日本で学校教育を受けてきた者には理解しやすいが、そうでない人にとっては理解しがたい、しかも外国人がそういった時に言う、日本人にとっては変わった答え、というものを、楽しんでいるようなところがある、ということであった。

さらに、先生に「なぜ抱負にしたのか」と聞かれ、テーマ設定の経緯を話したところ、「それは誰に対して面白いと思わせるのか」という疑問に直面した。学習者を全く度外視していたわけではないが、このことに関してはボランティアに対して重きを置いていたのは間違いない。方向がそれてきてしまっており、そのことに私は気づいていなかったのである。

最後に、日本語教員と留学生へアンケート調査をしたもので「あなたの希望はどんなことですか」「あなたは将来何をするつもりですか」「あなたは何をしようと思えますか」といった問いに対し、総じて学生がいやだと感じる割合が高いという結果。その理由に、「将来について不安を感じている者がかなりいるから、未来に関する質問には、敏感に反応する。」「『私は何をしようとすると思う時、自分で考えて、決めたいものですから、他人に教えたくないです。』と聞いた学生もいる。」（井上孝代編著『留学生の発達援助』多賀出版）という裏づけを知った。

そしてテーマ変更するにいたった。まず根底にあったもの「お正月」を、そのままテーマにすることにした。理由は簡単である、「抱負」にしようと思った、その根底にあったものが「お正月」であったこと。それと、先生との会話の中で、お正月に何をしていたか、という話題で話しが弾んだこと。以上の理由により、私も先生も納得のテーマ「お正月」になった。抱負に関しては、当初の考えであった、抱負から切り出しお正月の話しに進むのではなく、お正月の話題の中で取り上げられるのであれば、取り上げてみよう、といった具合に考えていた。

3. クラスで実感した問題点

そして1月7日のクラス本番を迎えた。再設定したテーマ「お正月」でクラスに臨み、お正月に撮った写真などを利用してクラスは順調に展開していった。学習者は、自分が実際にやったことという具体的な話をすることができたので、話しやすいように私には見えた。この点も「抱負」をテーマにするのとは大きく違うところである。「抱負」であると自分の具体的な体験や経験は話すことができない。想像の世界なのである。

そしてもう一点、「抱負」ではクラス展開が難しいと考えられる会話が起った。進行役の私と学習者のRさんがペアになって会話をしているときに、学習者が初詣に行き、お賽銭を入れた、という話題になった時である。

R：それ！五円玉

進行役（大沼）：それからこうやった？（手を合わせる）

R：そう

進行役：なにかお祈りした？

R：した

進行役：なんでしたの？

R：それはダメ。話せない

進行役：あー、そうなんだ

R：そう、particular だから

M：プライバシーね

進行役：そうか、プライバシーだから言ったらダメなんだね

まさしく変更するにいたった過程の中で出てきた問題点が、クラスでそのまま出てきたのである。もしテーマを「抱負」にしていたら、軌道修正は可能であったとは思うが、出だしからつまずいたことであろう。

4. そこで見えてきたもの

クラスで会話をするにあたって強く感じたことは、言語という表面上に現れるものの根底にあるもの、例えばものの見方、考え方、価値観といったものが非常に大切である、ということである。会話は言葉だけ分かれば成立するというのは間違いであり、その奥にあるそれら価値観の理解なしには、コミュニケーションは成り立たないのであり、一歩間違えば対立などにもつながりかねない重要なものである。また言語は思想や信条といった宗教に関することにも密接に結びついていると思う。これらは人のアイデンティティ形成に大きな役割を担っているものであり、このことの理解なしに相手を理解することはできない。

では、こういった事柄に関する内容は避けるべきなのか、といった問題が浮かび上がる。私はただ単に問題を避けるべきではない、と考える。確かに扱いにくい問題ではあるが、だからといってただ単に避けるのではなく、なぜ扱いにくい問題であるのか、どうしたら話せるようになるのか、と考えていく過程が非常に重要だと思うのである。そして、そのように考えていくことが、本質的な理解へと近づいていくと思うのである。

5. 終わりに

今回のクラスで、テーマ設定の難しさを痛感したと同時に、事前に考察した問題点がクラスで浮かび上がったことで、それをより深く考え、理解してこられたと感じる。言葉という表面に出てくるものの根底にあるもの、という考えに及ぶにいたるには、クラスでの実体験が欠かせなかった。

これら実体験を通し、テーマ設定をする際に必要であると思うことは、まずはそれが本当に知りたいこと、聞きたいことであるか、ということ。そしてそれをどのように聞くのかという聞き方の工夫、相手への配慮が条件であると思う。知りたいこと、聞きたいことを聞くためには自分のことを話し、伝えなくてはならないし、それをするには「そうしたい」という気持ちが必要なのである。そしてただ聞く、伝えるのではなく、

伝わりやすいように話す工夫、聞く際に相手に注意することも考慮しなくてはならない。そういったことは講義を通して学べるし、クラスで実践することで身につく。

そして一番大切であり、クラスの目的ともなっていることは「人間関係作り」である。よい人間関係の構築なしには、よい会話は生まれまいだろうし、コミュニケーションも成り立ちにくいと思う。保見の学習者に対してだけでなく、誰に対してもよい人間関係を築いていく努力が必要であり、それが相手への理解、そして学習者にとっては日本語の習得へとつながっていくと思う。

教案がすべてではない

外国語学部中国学科 三宅由希子

0. はじめに

私は一年間の日本語教育実習を通して、ボランティアとして何回も各クラスに参加した。しかし進行役をしっかりと担当したのは10月29日、この日だけである。一年という長い実習期間から考えればたった一日だが、私にとって教案を考えていた時間・進行役を担当した一日・そして終わった後の振り返りの時間は、それまでの日本語に関する授業で学んだことを思い出させ、その後の日本語教室への参加の仕方を考えさせてくれる非常に有意義な時間となった。そのため、私はこのことを修了レポートにしたいと考えた。ここからは教案・授業記録などを参考にして、振り返ってみたい。

1. テーマ設定

私がテーマに選んだのは「習慣」だった。「自分が本当に聞きたいと思うことを聞かなきゃだめ」土屋先生がよく言っていた言葉である。私があるテーマに決めた理由は、自分が友人と話していた際に非常に話が弾み、興味を持った話題だったからであり、それを学習者とも話せたら、きっと授業は楽しくなるだろうと考えたからである。

2. 先生との相談

2.1 1回目の相談

私は自分の選んだテーマと進行をどのようにしていこうと考えているかを先生に話した。自分ではよいテーマだと思っていたので、土屋先生からも良い反応を得られるものだと考えていた。ところが、先生は私の話を聞くとしばらく黙り込んでしまった。そし

てまず聞かれたのは、どうしてこのテーマにしたのかということだった。私は友人との一件を先生に話した。そこでやっと分かったという表情を浮かべてくださった(私はそう感じた)先生から、このままでは話に発展しにくいから切り口を変えて、まずは昨日食べたものを聞いてみてはとアドバイスもらった私は早速、教案を本格的に考え始めた。

2.2 2回目の相談

私がメールで送った教案(案)に対して先生が2回目のアドバイスをくださったのは私が進行をする2日前のことだった。先生に、私の教案には無駄なところが多いと言われ、私は内心「がんばって考えたのに、これ以上どうすればいいのだろう」と思っていた。しかし、自分の教案をじっくり眺めてみると、なるほど、難点が見えてきた。私の教案はテーマの「習慣」を学習者に分からせようと必死になっていたのだ。始めに「習慣」という語句の説明・導入、所々での「習慣」の確認。保見の日本語教室はおしゃべりの中で日本語を学んでこうという趣旨の教室である。ある特定の語句を理解してからでなければ始められないおしゃべりなんて、どこが楽しいのだろう。それでは順番が違うと気がついた。そして私はもう一度、教案を練り直すことにした。今度は学習者にもボランティアにも分かりやすく。そしてスムーズに進行ができるように、一言一言まで記述しよう。そうして出来上がったのが以下の教案である。

3. 教案

10月29日 初級クラス 授業案

テーマ：私の習慣 進行役：三宅由希子

10:00 グループ分け

10:05 クラス開始

自己紹介：私はゆきこです。よろしくお願ひします。(一回り、自己紹介してもらおう)

10:10 テーマ導入

進行役(三宅)：みなさんは昨日、何を食べましたか？朝、昼、夜、ご飯に何を食べましたか？私は朝はパンと味噌汁、昼はうどん、夜はハンバーグを食べました。私は朝ごはんにはパンと味噌汁を毎日食べます。それではK(ボランティア)さん、Kさんは何を食べましたか。

K：私は朝は_____昼は_____夜は_____を食べました。

進行役：そうですか。_____は毎日食べますか。ときどき食べますか。あまり食べませんか。

K：_____は毎日食べます。

進行役：そうですか。みなさんは何を食べましたか。毎日食べるものはありますか。話してください。

10:20 グループ活動

10:35 発表

進行役：それではいいですか。〇〇さん、××さんは昨日、何を食べましたか。毎日食べるものはありますか。(一人ずつ聞く)

進行役：みなさん、毎日食べるものがあるんですね。〇〇さんは、いつから___を食べているんですか。どうして食べ始めたんですか。(臨機応変に質問)

10:45 導入2

進行役：私は毎日、お風呂の後に腹筋100回とダンベルを50回します。私のお父さんは週に二回泳ぎます。Kさんはスポーツをしますか。

K：あまりしません。

進行役：そうですか。全くしませんか。

K：たまに_____をします。

進行役：そうですか。_____をするんですね。みなさんはスポーツをしますか。毎日ですか。週__回ですか。月__回ですか。話してください。

10:50 グループ活動

11:10 発表2

進行役：それではいいですか。〇〇さん、××さんは運動をしますか。(一人ずつ聞く)
××さん、そのスポーツはどこでするんですか。誰とするんですか。
(臨機応変に質問)

11:20 まとめ

進行役：今日、話したことを書きましょう。

(スピーチ文をアルファベット、ひらがなで書く)

「私は昨日、朝___、昼___、夜___を食べました。」

「___は毎日食べます。」

「スポーツは___をします。」

「___は毎日(週__回、月__回)します。」

11:30 全体会

何人か(できれば全員)にスピーチ文を読んでもらう。

4. 実際の進行

導入部分を食べ物のお話にしたことにより、会話はスムーズに進んでいるようだったが、私が聞きたい「習慣」につながるような内容は学習者の口からは出てこなかった。しかし学習者の食べ物の話は興味深く、私はだんだん「教案どおりにいかななくてもいい

かな」と思い始めていた。私が一緒に話していたKさんは、朝、小麦粉を練ったものと野菜炒めを食べたそうで、小麦粉の練ったものは自分で作るそうだ。詳しく聞いていくと毎日、小麦粉を練って料理を作ると言っていた。それがKさんには習慣になっているらしいと私はこのとき思った。

ボランティアが上手く私の意図することをつかんでくれて、学習者は毎日食べるものも発表してくれた。特にMさんは健康のために毎日、豆乳を飲んでいると発表し、これはまさに私が望んでいた答えだった。そして学習者の頭にある概念と「習慣」という概念をつなげる手助けにもなった。語彙はわざわざ覚えさせるものではない。おしゃべりを通して、最終的に頭の中で概念と言葉がつながればそれで導入は成功したことになるのだ。

5. 進行役を終えて

考えることは、進行役をする前よりも後の方がずっと多かった。ほとんどは自分の進行に対する反省だったが。まずは学習者もボランティアもクラスを楽しめたかということ、進行はスムーズだったか、時計ばかり見ていなかったか、学習者には分かりやすかったか、考えればきりがなかった。私は授業記録を持って、再び土屋先生と話をした。そこで分かったことは、進行役はクラスに参加している人、全員が分かるような授業をしなければならないということだった。まめに確認をとり、分からない言葉がでてきたら全員でフォローする、そうした心配りが必要なのだと教わった。また進行役が発した言葉にクラスに参加している人は耳を傾ける。そのため、進行役は言葉づかいにも責任を持たなければならないということを改めて感じた。

6. おわりに

私はボランティアとしてクラスに参加しているとき、教案を気にかけたことはなかった。それが進行役になった途端に教案にしばられ、その通りに授業を進めなければと思ってしまった。私は以前に土屋先生が言っていた、「教案はしっかり作らなきゃいけないんだよ。でもそれよりおもしろい話になるとおもった瞬間に教案は捨てる。」という言葉思い出した。Kさんと話している途中に私が思った、教案どおりにいかななくてもいいかもというのは正直な気持ちで、そう感じた瞬間に教案は捨ててしまってもよかったのだ。これは進行役を担当したからこそ分かったことである。それから私はボランティアとしてクラスに参加しているときもそのことを意識して臨んでいる。自分も相手も楽しく。学習者に分かりやすく。

保見が丘日本語教室の活動は、学習者とボランティアのおしゃべりで成り立っている。教案がすべてではない。それがおもしろいのである。

初めての教案作り

外国語学部英米学科 石黒運美

0. はじめに

大学生活の4年間で日本語教員課程を通じ様々な科目を受講し、その総まとめとして日本語教育実習に参加しました。私は豊田市の保見団地にある保見ヶ丘日本語教室での活動が中心でした。今回のレポートでは、初級クラスで進行役での経験を書きました。

1. 保見団地訪問と初めての教室参加

初めて保見団地を訪れた時の事は今でも鮮明に覚えています。幼い頃から海に近い田舎に住んでいた私はまず団地の大きさに驚きました。そして、ブラジル人の人が乗っている鮮やかな色のスポーツカーや陽気な音楽の流れるバックヤードを見ると、日本ではないような錯覚に陥りました。

後日教室に参加すると、学習者とボランティアが国籍を問わず日本語で挨拶をし、笑って話す姿を多く目にし、これからここで活動ができるということに心躍りました。

2. 進行役

2.1 テーマ設定

何度かボランティアとして保見ヶ丘日本語教室に参加し、8月6日に初級クラスの進行役をする事になりました。まず、テーマを考えました。テーマを決める時は、どんなことを話したらみんなが楽しく教室での活動ができるかと言う事を一番に考えました。そして、当日の初級クラスのボランティアMさんとKさんに相談をしました。私は、「昼休みの過ごし方」「休日の過ごし方」「心に残っている先生」の3つのテーマを考え提案しました。それに対しどの案も面白そうだと思うけれど、「何がしたいのか。その活動の目的は何か、保見ヶ丘の理念にそってできるか、日本語学習に繋がるか」など、検討する必要があるとMさんのアドバイスがありました。Kさんからは「進行役と学習者だけのやりとりにならないように、進行役、学習者、ボランティア、さらに他の学習者、ボランティアと会話が広がっていく流れを生み出したい」という意見がありました。

3人の話し合いでは、「お気に入りの休日」というテーマなら、皆が興味を持って話せるのではないかと言う事になりました。言葉だけで全てを伝えるのは難しいのではないかと言うことで絵を見て当てるゲームも取り入れる事になりました。さらに、「～するのが好きです」、「休日は～したいです。」などのフレーズを覚えてもらえるのではないかと、頻度を表す「必ず」「時々」「よく」「あまり～しない」「いつも」なども学習項目に使えるそうだという意見が出ました。

以下は、MさんとKさんと話し合いまとまったおおまかなクラスの流れです。

テーマ「お気に入りの休日の過ごし方」

1. 進行役とボランティアで自分のお気に入りの休日の過ごし方について「話し、絵を見せて当てさせる、それについて質問等をしあう」ことをやってみせる。
2. ペアワークで「話し、絵を見せて当てさせる」部分を準備する。
3. クラス全体にペアが順次発表して、「質問したり、同調したりする」部分で全体交流する。
4. 全体報告会で発表するペアをみんなで選ぶ。

このテーマでの教室活動を通じ、お互い共通の趣味や好きなこと新しい発見があり教室以外での交流にも繋がる機会になればいいなと思っていました。

2.2 テーマの再検討

Kさん、Mさんとのメールでのやり取りを一旦終え、土屋先生のアドバイスももらいました。そこでもう一度見直さなければいけないことに気がつきました。保見ヶ丘日本語教室では、自己表現を目指した話題シラバスで活動が行われます。クラスは教科書にそって展開するのではなく自分自身のことを話し相手のことを聞きながら進められそれにより話題も展開します。自分の考えたテーマは心底話したい、聞いてみたい事なのかと言う一番大切なことにきちんと向き合っていないことが分かりました。日常の身近な現実の世界についてみんなと話す保見の教室でやる意味をもう一度確認する為テーマを再度考え直しました。

学習者やボランティアの人たちとどんな話がしたいか、自分は何を聞き話したいのかに重点を置きテーマ設定をする事にしました。私は去年の夏、小学校の同窓会に行き久しぶりに恩師に合いました。とても影響を受けた先生でした。算数が嫌いだった私に先生は「社会に出てから算数は直接生活の役に立たないかもしれないね。でも、今の勉強は頭の回路を作っているのだよ。無駄にはならないよ。」と言いました。その言葉を聞いてから私は算数もがんばれるようになりました。私はこの事を思い出し、みんなは今までどんな先生に出会ったのか、どんな学校生活を送っていたのかを聞いてみたいと思いました。そこで「先生」と言うテーマに決めMさん、Kさんの了承をもらいました。そして、土屋先生との話し合いで大まかな進行の流れを決めました。メインテーマである「先生」に加えブラジルや中国での学校生活にも興味があり、担任の制度やどんな教科を学んでいたのか、クラス内の様子なども聞きたいと思い「好きな教科」や「クラスにまつわる話」もする事にしました。

3. 進行役当日

8月6日初級クラス

進行役：石黒運美

ボランティア：9名（進行役含む）

学習者：6名

テーマ：学校（主に先生について）

簡単な自己紹介と昨日したことについて。

3.1 当日話したこと

当日は、ボランティア9名と学習者6名の15人でクラス活動をしました。全員の自己紹介が終わりメインテーマの「先生」に関する話に入りました。対話活動を通じて色々な話を聞くことができました。ブラジルの学校には時間別があり、例えば7時～12時、12時～17時、そして夜間、のクラスがあり、Cさんは午前の授業に行っていたそうです。また、昔は体罰があったが、今はもうブラジルでも日本でも厳しく禁止されているという話題で盛り上がりました。何か悪いことをしたら廊下に立たされるということが中国であるそうで、日本も同じだという意見が出ました。そして、Aさんの学校ではお坊さんの先生もいたということに皆驚いていました。学校の年数は中国の中でも違いがあるそうです。小学校が5年間又は6年間だそうで、TさんとKさんは6年間で、Sさんは5年間だったそうです。Cさんはブラジルで4・4・3年間だったそうです。Kさんは子どものころ、学校の寮に住んでいたそうです。Bさんは、朝ごはんの前にも授業があって、学校→朝食→学校、の時があったと言っていました。

3.1.1 進行役を終えて

進行役をやってみて保見ヶ丘日本語教室では自分の話すことが教科書のような役割をすることに気付くことができました。当日の参加者の経験は自分の知らないことばかりで興味が湧くものばかりでした。また先生との振り返りではボランティアの話す日本語も人それぞれ語彙やスピードが違うことを念頭に置き話すことや、みんなが話を共有できるような進行役としての指示や話の理解を深める為の質問、学習者に難しい単語や言い回しを説明すること等が大切だと分かりました。

4. さいごに

保見ヶ丘日本語教室に一年間参加し、強く心に残っている言葉があります。それは、ある日のクラスでTさんが言いました。「ここ、本当に楽しい。みんな会える。話せる。」仕事が休みの日曜日に早起きするのは眠いけれど、今この教室に通っていることが本当に楽しいと聞きました。Cさんは胸に手を置いていました。今まで英語塾に何校か通いましたが保見の教室では一番多く自分の事を話し相手のことを聞きました。相手と深く話すことの楽しさを肌で感じました。

読む・読まないー保見が丘日本語教室を通して

外国語学部スペイン学科 石原友紀

0. はじめに

私は日本語教育実習の場として、一年間、主に保見が丘日本語教室にボランティアとして参加していました。私は11月12日に初級の学習者向けの教案をつくり、初めて進行役として活動をする事となりました。それまではただのボランティアとして、活動の流れに身を任せるだけだったのが、自分が進行役をしてみて、改めてその大変さが実感できました。何を目的とするか、なにが知りたいのか、それが大切だと実感できた実習でした。

1. 準備

1.1 テーマ決め

最も重要にして最も難しかったことがテーマ決めでした。私が実習を行った時期にはもう、何回か同じ県大生のボランティアが進行役を務めていました。すでに済ませた内容は重複したくない。せっかく学習者が教室に来てくれているのだし、楽しく、盛り上がる活動にしたい。そんな想いがまず先にありました。この時期、学習者の勉強に対する熱意が表に表れてきた時期でした。つまり、「もっと文法を勉強したい」「漢字を勉強したい」といった具体的な勉強内容を挙げ、さらに能動的に「学習する」ことに目が向けられていたのです。

そんなこともあって、最終的に、学習者の好きな行為についての「好き」の度合いについて話そうと決めました。そうすれば、「あまり～ない」「とても～だ」という文法的なことも同時に学べて一石二鳥だと思ったからです。最初の案としては、ペアワークで相手の特徴を言いあうという計画だったのですが、自分から「私はこういう人です」という行為はしないと土屋先生に指摘され、特徴を探るために、どういう行為をするのが好きかについて話すことにしました。

1.2 教材

テーマに加えて、「読む」という要素も加えたくなりました。勉強熱が高まっている中で「漢字を読めるようになりたい」という希望をいう人がいたからです。それならば、と、活動中のペアワーク、またはグループワークをするときに生かせるように、好きな行為の項目と、好きな度合いが数字で表せるようにプリントを作りました。そうすれば今どういう事柄について聞いているのか、次にはどういう事柄について聞くのかが簡単になります。表記方法は、例えば、「カラオケが好き」、「おしゃべりが好き」という項目を左端に書き、項目毎の横に、1～5までの数字を横長に表記します。そして数字の1を「あまり～ない」2を「すこし」というように区別し、5を「とても」というように

好きな度合いが書けるようにしました。

2. 活動

この日、活動に参加したのはボランティア4人、学習者は3人でした。学習者は3人とも出身はブラジルです。中国の方々の勉強熱意が高まっていたので、中国出身の方々が参加できなかったのは残念でした。

2.1 読む・読まない

プリントをつくったので、皆で読み合わせてみました。質問項目を声にだして、音と文字を一致させる、これからやろうとする内容を知るという目的のためでした。文字は日本語とローマ字表記を合わせて記載していたので読めないことはないはずなのですが、発声しない学習者がいました。Cさんでした。隣に居たボランティアのMさんが、どこに話が進んでいるのかわからないかもしれない、と思って、「ここですよ」と指摘してもうん、とうなずいて、やはり声には出しませんでした。怖いと思ったのは、自分が「読んでくれない」と思ってしまったことです。確かに、読む・読まないは個人の自由です。だってここは学校じゃないですから、強制ではないはずですが、しかし、進行役だから先生のような役目をしていると感じていたのです。自分がして欲しかったことがしてもらえなかったショックと、なぜ読まないのだろうというギャップを感じました。声に出して「読む」ことは当たり前、と思っていたのはこれまで私が経験してきた学校教育による刷り込みだと気がつきました。日本語教室の活動は本来、双方が歩み寄りお互いのことを知ることが主旨であり、そこには先生と生徒のような上下の関係はありません。私の意識のなかで、進行役という肩書きでそういった上下関係の別が植えつけられていたのかもしれない。

2.2 対話・会話活動

対話・会話活動はいつものように、リラックスした雰囲気で行えました。普段の、一ボランティアとしてではなく、進行役として大変だと思ったのは時間配分でした。限られた時間の中でどう進めていくのか。繰り返すようですが、基本的には皆同じ立場で同じ目線で話します。その場を自分の力で無理にコントロールしようとするのは不自然だと思ったので、どのタイミングで何を言うかを考えるのが大変でした。私は時計が良く見える位置に席を陣取り、まず、学習者が集まるのを待ちました。何人来るかが決まっていないのが、始める時間を決めにくいところで、活動が始まるのはたいてい10時から10分過ぎたくらいからです。私の場合もそうでした。したがって、教案に固執して、その10分の遅れをとりもどそうと少し焦ってしまいました。自分の教案に従って進めたいと思ってはいても、会話は生き物ですから、なるようにしかなりません。進行役として経験を積んでいくともっとスムーズに、時間配分を調節できるようになるのかなと思います。

さらに、私は頻度を使う「全然～ない」「あまり～ではない」「とても」という単語を

意識的にいれて発話していたのですが、学習者はそうではありませんでした。私はMさんとXさんと活動していたのですが、Mさんは文法云々よりも会話そのものを楽しんでいる様子でした。学びというのは、自分でそういう意識を向けなければできないので、Mさんの場合は必要なかったのかもしれませんが。

3. フィードバック

3.1 目的をはっきりさせること

教案について土屋先生に相談したときに、「活動を通じて何が知りたいのか」という点を何回も聞かれました。それさえ決まれば、その目的のために何をすればいいのか、どういう内容の活動をすればいいのかが固まってきます。私の場合、さまざまな目的を含んでいたことに問題がありました。

それは、作成したプリントに関してでした。プリントがあると活動がわかりやすい、という思いつきから、次第に、学習熱が高まっている中で、現段階でどのくらい日本語を読めるのかを知りたくもなり、しかし後々に、そうすると活動に参加できない学習者もいるかもしれないと思いローマ字を同時に記載しました。日本語をローマ字で書かれた音と一致させて学習することができると思いました。ただ、そうすれば、先述の日本語の習熟度を測ることはできません。目的が何であるのかをはっきりさせることが重要でした。そして、少々学習者のレベルを考えて難しそうでも、本来の目的のためにする行為を進めるための勇気が必要だと感じました。後に、土屋先生からは、そうした習熟度を測ることは、次の活動にそれが生かされることであれば意味があるけれども、その場限りの活動で、「試す」ような行為はしてはいけないと指摘されました。確かに、学習者の立場にたつと、活動をしていて、この行為が果たして意味のあることなのか、疑問に思うこともありえます。だからCさんは読まなかったのかもしれませんが。

学習者が私達と一緒に声を出して読むものと思って教案をつくっていたのですが、そこがそもそも間違いでした。日本語の教育方法に慣らされていた私達は、自然と「その場をリードする人について読みあげる」行為が当然のようにできます。しかし、それは国が違えば全く行わないことかもしれないのです。「声に出して読むことで文字と音を一致させる」という目的がありましたが、学習者が望まないのであれば読むことを強制させてはいけないと感じました。

3.2 学習だけではない

活動を通して知れることは、文法や単語だけではありません。その人自身を知ることができます。私達ボランティアが本格的に保見が丘日本語教室に参加したのは5月頃かと思いますが、当時はボランティアも学習者も緊張していたように思います。顔を見ても名前がわからない、学習者なのかボランティアかわからないという事態が幾度もありました。しかし、対話・会話活動に参加するうちにその人の意外な面が見えてきたり、相手の文化背景を知ることができました。私が進行役を務めたときには、Kさんがギャンブルが好きだったり、Mさんが豆乳が好きだったり、意外な面を知ることが出

来ました。そうすると、「あ、この人はこういうことが好きだな」と、名前と顔を一致させて覚えることが出来るし、教室以外で話しかけるタネになります。確かに活動内容の名目は日本語教室ですが、この人に会うために、次にまた来よう、という活力が、対話・会話活動にあると思います。

3.3 進行役を通して

この言語教室には教科書もなにもありません。教科書と呼べるものがない代わりに、活動を成り立たせているのは参加者自身や、参加者の体験です。私は活動中の声を出して読む、という行為を普通の行為だと思っていました。そこには私が受けてきた教育の背景が反映されています。それが普通の行為と思うことが、この場では違うということが、実習中に感じました。Cさんが「読まない」という選択肢をとったことの原因はわかりません。読むことが恥ずかしいのか、読む意義がないと思っているのかはわかりません。その選択肢をとったことに対して少しショックを受け、そしてショックを受けたことで、自分が上下関係を意識していることに気づきました。

この実習は、私たちが日本語教育を与えるというだけでなく、私たちも学習者とコミュニケーションすることで、学ぶことができました。コミュニケーションをとることは、言語というツールではなく、相手を知りたいと思う興味です。そこにはフラットな関係がありました。だから、コミュニケーションする方法を学んでいたのは、学習者だけではなく、ボランティアも同じだったと思います。言語を教えるという一方的な矢印ではなく、双方で歩み寄る姿勢を意識的にとっていましたが、コミュニケーション本来の姿が、双方で歩み寄る姿勢が基本にあり、それを意識できた実習といえました。

二度の進行役を通して学んだこと

外国語学部英米学科 佐原江梨子

0. はじめに

私が保見ヶ丘日本語教室での進行役を通して実感したことは、「クラスはやってみないとわからない」ということと、「聞きたいことをそのまま聞くよりも、その周辺から聞いていく方がたどり着ける場合もある」ということだ。8月27日、初めて進行役をやることになった時は、学習者の国の給食について聞いてみたいと思い、「給食」をテーマに授業をした。しかし、「給食とは何か」という説明の多い授業になってしまった。2回目の

授業では、準備する時間は1回目に比べてかなり少なかった。それでも1回目の授業でもっとこうの方がよかったと感じた部分を生かすことができたと思う。1回目と2回目の進行を振り返り、その変化を比べてみたいと思う。

1. 8月27日、初めての進行役

進行役（佐原）：今日は、「給食」についてやります。（黒板に「給食（きゅうしょく）」と書く）

S（ボランティア）：学校でみんなで同じものを食べます。

進行役：「給食」、わかりますか。

学習者：わかります。

進行役：（給食の写真を見せる）給食です。

S：生徒が全部やります。係がいて、おかずを配ったり…

進行役：このような感じです。

（『くらしをまもる・くらしをささえる①学校給食』から、生徒が給食を用意している写真を提示）

このように、私の1回目の授業は、「今から給食の講義をします。」と言わんばかりに始まった。授業の構成は大きく分けて、〈1〉給食についての導入、〈2〉献立表を使い、献立名、材料の説明、〈3〉「給食」について質問・応答、〈4〉好きな給食メニュー・子供の時好きだった食べ物の絵を描く、〈5〉グループで話し合い、〈6〉発表とした。この〈1〉、〈2〉においては、進行役が一方向的に話す分量が多くなってしまった。

〈1〉、〈2〉の時の学習者の反応は、私が話すのをじっと聞いていたが、「ふ～ん」といった感じで、理解できなかったところを聞く以外は、質問もあまり出なかった。これは私自身のことを話し、学習者のことを聞き出すというより、一般的な給食の知識を共有する形になってしまったからではないだろうか。もっとボランティアや学習者に振って、そのやりとりを通じ、給食がどんなものであるかわかってもらえればよかったと感じた。

私は、「学習者の国の給食のこと、給食がなかったら子どもの頃に好きだった食べ物」を聞きたいと思ってこの教案を考えたが、「日本の給食のことを教えよう」という気持ちが働いていたのではないだろうか。また献立表を使うことを意識しすぎて少し説明的になってしまった。

〈3〉「給食」について質問・応答では、

進行役（佐原）：Cさん、ブラジルに給食はありますか。

C：ないです。

進行役：Kさん、中国に給食はありますか。

K：ないです。

教案を作る時から、学習者の国に給食がない場合も想定していた。しかし、実際に「ない」と言われて、その後どうつなげていけばいいか戸惑った。「ある・ない」の質問だと、

「ない」と言われた時に流れが一瞬止まってしまう。

〈4〉の好きな給食メニュー・子供の時好きだった食べ物の絵を描く時、最初に私が好きだった給食のメニューの絵を見せながら、話した。学習者・ボランティアは、私の絵に注目した。絵に対して学習者から、「上手ですね」「それは何ですか」などすぐに反応が返ってきた。絵はやはり視覚的にぱっと目を惹くものだけど、それだけではなく、「私の」好きな給食という点で、学習者の反応が前半のものとは違ったのだと思う。学習者にとってあまり給食が身近ではなかったため、子供の時好きだった食べ物を描いてもらったが、〈4〉から〈5〉グループで話し合いに移る流れはとてもスムーズだった。

Sさんの、中国人はパンにソーセージと生クリームのようなもの（マーガリンやバターではなく、マヨネーズに似ていて、白くて甘いもの）をはさんで食べる話など興味深い話を沢山聞きだすことができた点はよかった。

2. 2月4日、2回目の進行役

2.1 教案作り

2月4日、2回目の進行役を担当した。私がクラスで聞いたかったことは、「中国・ブラジルにバレンタインデーのようなものはあるのか」と「どんな時にプレゼントをあげるのか」ということだったが、どのように導入するか悩んだ。もしバレンタインデーの話題をメインにして、「ブラジルや中国にバレンタインデーはありますか」と聞き、「ない」と言われたら、そこで終わってしまう。1回目の授業の時、「給食」を全面的にテーマにして、「給食はありますか」と質問したところ、「ないです。」「あまり食べなかった。」という声が出て、あまり聞き出せなかったことがよぎった。

最初に作った教案では、導入を〈1〉プレゼントをあげる時、〈2〉もらう時というように2回に分けた。バレンタインデーのことも聞いてみたかったが、「ない」と答えられた場合を考えて、グループの活動の時に聞こうと考えた。しかし、「プレゼントをあげる時」「もらう時」というようにきれいに話が分かれるだろうかという不安があった。教案を土屋先生、先生との話し合いの時に一緒だった松本さんや2月4日にボランティアで参加するNさんに送った。Mさんからは、「あげる時・もらう時と分けることが不安なら、あげる時ともう一つの導入をバレンタインデーにしてみてもどうかという意見をもらった。導入の話が二つとも誕生日の話で、テーマが誕生日のようにもなっていたので、メリハリをつけるために二つ目をバレンタインにするのはいいアイデアだと思った。

Nさんからは、『あげる・もらう・くれる』が区別されることなく、混ざって使われていることが気になった。学習者はみんな『やりもらい動詞』をちゃんと知っているのだろうか」というメールももらった。はっとした。この点は、その後土屋先生にも指摘してもらったのだが、私は「あげる・もらう・くれる」の使い分けに全然注意していなかった。指摘してもらって本当によかったと感じた。

土屋先生とのやりとりでは、私が「バレンタインのことと、どんな状況でプレゼントをあげるかが知りたい」と言うと、「バレンタインだけに限定しないで、ゆるやかにどんな場面でプレゼントをあげるかを聞いてみたら。バレンタインのことも聞きたいなら導

入の部分で、少し触れておく。そこで学習者が興味を持ったらバレンタインの話にもっていけばいいんじゃない。一つのことを掘り下げて行ってね。」というアドバイスを頂いた。

そこで、「プレゼントをあげる時」「もらう時」と分けるのではなく、「あげる時」だけに絞り、友達の誕生日の話とバレンタインの話を導入で出して「どんな場面でプレゼントをあげるか」をゆるやかに聞いていくことにした。

2.2 実際の活動

初級2クラスは、学習者2人、ボランティア2人の計4人という少人数で、とても和やかな雰囲気では会話を楽しむことができた。時間配分の点では、発表の時間やまとめの時間を十分にとることができなかつたので、進行役としてもっと客観的に全体を見渡すことができるようにならなければと感じた。しかし、自分が聞きたいことを聞けたかという点では、2回目の方が満足度の高いものとなった。

導入で、バレンタインデーの話に触れるとすぐに学習者から反応が返ってきた。Rさんからは「あなた、チョコレート作れますか?」という質問。Tさんは去年バレンタインに社長からプレゼントをもらったことを話した。導入で、バレンタインデーのことに触れることによって、学習者が反応し、自然にバレンタインの話聞きだすことができた。ゆるやかな流れの中で、学習者が興味を持ったら自然とその話題を深めていくということができたと感じた。この点が「給食」の時の一方的な進行とは大きく異なっていた。

誕生日の話題でもRさんからすぐに質問が出た。

R：友達の誕生日パーティーいつしますか。8日（ようか）に友達の誕生日あります。いつパーティーしますか。前にしますか。後にしますか。

ブラジルは誕生日パーティーをするのは、誕生日の前だけだという。そこで、中国の場合はどうかとTさんに聞いてみた。

進行役（佐原）：Tさんはどうですか。中国では誕生日パーティーはいつしますか。誕生日の前ですか、後ですか。

T：両方あります。

N：あ、じゃあ日本と一緒にだね。

T：子どものとき、女の子は誕生日の前にやります。男の子は誕生日の後にやります。

N：あ、違う。へえ！

進行役：子どものときだけですか。

T：はい。

進行役：大人は両方？

T：はい、そうです。両方あります。でも、老人は誕生日の前の日にやります。

進行役：女の人が誕生日の前で男の人は誕生日の後ですか。

T：両方後です。

進行役：なんでですか。

T：わからない。後にやる、体に悪いといひます。だから前にやります。

みんな：へえ～～！

ここで、Tさんにも「誕生日パーティーを誕生日の前にやるか。後にやるか。」と聞くことによつて、子どもの頃の男の子と女の子、老人の違いという面白い話を聞くことができた。掘り下げて、話を深めることができたのではないかと思う。

テーマは「いつプレゼントをあげるか」という広いものだったので、中国での誕生日パーティーの話や、デート事情など、さまざまな話を聞くことができ、非常に興味深かった。自分が聞きたいことをずばっと聞いてしまうのではなく、その周辺からじわじわと聞き出していくことによつて、聞きたかったことが聞きだせる場合もあるということを実感した。

3. おわりに

日本語教育実習は、私がとつていた英語の教職課程とは全く異なり、戸惑うことも多かった。英語の教育実習の時のように、たくさん準備したからとつて、その日のクラスが上手く進むとは限らない。しかし、自分が予想しなかった方向に話が発展していく面白さは、この実習ならではだと感じた。「いつプレゼントをあげるか」という話から始めたのに、気づけば中学生の話、携帯の話へと発展している。そして、実習を重ねるごとに、学習者、ボランティアのことを段々と知つていき、理解していくことができる。そのような場で同じ時間を過ごすことができて本当によかった。

「会話をする」ということ

文学部英文学科 田中景子

0. はじめに

私は毎週日曜日、保見団地へ通ひ、保見ヶ丘日本語教室でボランティアを行った。そして、初級クラスで2回、進行役をやらせてもらった。この教室での進行役の役割は教えることではなく、話題を提供し、みんなが楽しく会話できるようにすることである。このレポートでは2回の進行役を通して考えたことについてまとめた。

1. はじめての進行役

9月、はじめて初級クラスの進行役をすることになった。テーマも決まらないまま、土屋先生のところへ相談に行った。何が良いだろうと悩んでいると、「今まで保見で話してきて、何か聞きたいと思ったことはない？」と聞かれた。以前に、家の近所や学校までどう行っていたかについて話したことを思い出した。私はそのことをもっと聞いてみたいと思い、どんなところに住んでいたのか聞くことにした。

土屋先生と話した結果、家の近くのおもしろい場所やおいしい食べ物について聞くことになった。しかし、どうやってその話にもっていきかが問題だった。いきなり家の近くの話から始めるよりも、別のことから導入して家の近くの話にもっていったほうが良いと思った。そこで、夏休みが終わったすぐ後だったので、まず、夏休みにどこに行ったかを聞くことにした。それから、「来年の夏休み、私はみなさんの家に行きたいです」と進めて、家の近くのことを教えてもらうことにした。先生からは「本当に学習者の家に遊びに行きたいの？それだったら、どうやって行くか、どれくらい時間がかかるかを聞いてもいいかもね」と言われた。架空の設定ではなく、本当に自分が行きたいから聞くということが大切なのだ。

1.1 実際の授業

9月17日 初級クラス

テーマ「旅行」 (家の近くのおもしろい場所、おいしい食べ物について)

自己紹介、夏休みにどこに行ったかについての対話活動、発表と順調に進んでいった。そして二つ目の話題に入り、「来年の夏休み、どこか行きたいです。私はみなさんの家に行きたいです」と言って、ボランティアに「家はどこですか。何がありますか。おいしい食べ物は何ですか」と聞いていった。ボランティアとの応答のあと、「みなさんも来年の夏休み、グループの人の家に行きたいですか。」と尋ねた。すると、学習者のKさんは「私は海に行きたい」と答えた。そのまま対話活動に入ってしまった、来年の夏休みにどこに行きたいかを話したグループと、家の近くについて話したグループとあったようだった。

1.2 感想と反省

今回、進行役をやってみて改めてクラスを進めていく難しさを感じた。話したことに對して予想外の答えが返ってきたり、思わぬ方向に話が進んでいったりして、結局一番聞きたかったことが聞けずに終わってしまった。みんな話したいこと、聞きたいことをそれぞれが自由に話したり聞いたりしているという印象を強く受けた。二度目の対話活動のときに、話すことをきちんと指示することができないまま対話活動に入ってしまったため、話題を統一することができなかった。また、みんなが話に夢中になっていたこともあり、最後の発表をしなかったのは良くなかったと思った。

Kさんの答えは少し考えれば予想できたことであつた。教案を作った時点であらゆることを想定していなければならなかったのだが、学習者もボランティアもわかってくれ

るだろうという考えがあった。「教案は細かく作っておいて、授業を始めたら教案は捨てるんだよ」という土屋先生の言葉通り、教案を捨てるべきだった。しかし、家のことを聞きたいという思いがあり、教案と違う方向に話が進んでいったときに、とっさに話題を来年の夏休みどこに行きたいかに変えることができなかった。

次回、このテーマで進行役をやるときには、話題をひとつにして初めから家の近くの面白い場所やおいしい食べ物について聞くようにする、または、来年の夏休みに行きたいところという話題にもっていくようにすると良いと思った。

2. 2回目の進行役

1月、2回目の初級クラスの進行役が回ってきた。前回の反省を踏まえて、今度はうまくやろうと思った。みんなが興味を持って楽しく話せる話題が良いと思うが、なかなかテーマが決まらない。前回と同じテーマでやろうかとも考えたが、もっと違うことも聞いてみたいと思い、「今までで一番がんばったこと」というテーマが思い浮かんだ。さっそく土屋先生のところへ相談に行った。「どうしてそれが聞きたいと思ったの？」と聞かれ、就職活動の面接で他の学生の話聞いておもしろかったから、と答え、「でも、それは考えてきているから答えられるけど、とっさに聞かれても答えられないよ」と言われた。確かに、すぐには答えにくい質問かもしれない。先生と話しているうちに、もっと他のことから聞いていって核心に触れるようにすれば良いとわかった。そこで、「学校外の時間にしていたこと」というテーマにした。

2.1 実際の授業の詳細

1月14日（日）初級2クラス

テーマ「学校外の時間にしていたこと」

ボランティア：Mさん、Aさん、Sさん

学習者：Rさん、Cさん、Kさん

10:18 自己紹介・導入

進行役（田中）：じゃあ、始めます。おはようございます。私はけいこです。よろしくお願ひします。

（以下、順に自己紹介）

進行役：私は、中学生と高校生のとときにカヌーをしていました。カヌーわかりますか。

C：カヌー？ わからない。（Rさん、Kさんもわからない様子）

（写真を見せる）

一同：あー！！（写真に見入る。学習者も写真を見てすぐ分かった様子）

C：これは何？ カヌー？

R：誰と？ 友達と？

進行役：みんなで、友達とカヌーをしました。

（みんなから質問が出て、賑やかになる）

進行役：朝、練習します。学校に行って勉強します。夕方、また練習します。毎日練習しました。休みの日も練習しました。パドルを使うのが難しいです。

進行役：じゃあ、Mさんは小学生・中学生・高校生のとき、学校が終わってからとか、休みの日、何をしていましたか。

(中略)

10:30 対話活動

11:05 発表

<Rさんの発表>

毎週火曜日サッカーしました。水曜日バレーボールかハンドボールかバスケットボールしました。木曜日体操しました。

<Aさんの発表>

中学のときに卓球しました。クラブに入っていました。毎日授業の後、練習しました。

<Kさんの発表>

中学生のとき、バドミントンした。1週間で3回。こどものとき、おままごと2週間に1回。

(Kさんの結婚の話、指輪の話、服の話をする)

<Cさんの発表>

小学生のとき走るばかり。運動会で高跳びと走り幅跳び。400メートルリレーで学校の記録やぶれた。中学のとき、バスケットボールちょっと。高校生のときは運動してない。小説いっぱい見た。

11:30 まとめ

2.2 感想

「学校外にしていたこと」というテーマで質問の仕方をどうするか悩んだ。勉強以外のことで学校が終わってからしていたことだけでなく、休みの日にしていたことも含みたいと思ったので、質問の仕方がわかりにくくなってしまい、グループ活動に入るときにRさんはテーマを理解できていないようだった。

しかし、「学校外にしていたこと」というテーマだけでもたくさん話題が出てきて、楽しく話すことができた。テーマをひとつにしたため、対話活動で時間が長すぎたかと思ったが、各グループ続けていろいろなことを話せたようでよかったと思う。発表でも、1人の話したことから質問したりして掘り下げて話を聞くことができ、面白かった。指輪の話は全然予想していなかったが、ブラジルでは・・・中国では・・・と国によって違うことを知ることができ、興味深かった。始終、笑いがあり、和やかな雰囲気で行うことができてよかった。

3. 授業を終えて

はじめの導入では、私が今までがんばってきたカヌーのことを話した。自分が話したいことだし、自分にしかできない導入だと思った。写真を見せることは学習者も興味を

持ってくれ、そこから質問も出てくるのでやりやすかった。しかし、対話活動に入る前にRさんは何を話せばいいのかわかっていなかった。導入の仕方が良くなかったのではないかと思った。授業記録を提出するときに、先生から導入部分をもう一度考えてくるように言われた。そこで、もう一度考えてみた。

朝、練習します。学校に行って勉強します。夕方、また練習します。毎日練習しました。休みの日も練習しました。パドルを使うのが難しいです。

↓

朝7時半に学校に行きます。走ります。腕立て伏せや腹筋をします。

8時から夕方の4時まで学校で勉強します。

夕方の4時から池に行きます。カヌーに乗ります。

学校が始まる前と学校が終わった後、練習しました。休みの日も練習しました。

(写真を見せる)

大会です。たくさん大会がありました。

大会の前はたくさん練習します。10キロ漕ぎます。

パドルを使うのが難しいです。

なかなか速くなりませんでした。でも、毎日練習しました。がんばって練習しました。

速くなりました。入賞しました。

時間を入れることでよりわかりやすくなり、大会という言葉を導入することで遊びではなくて試合などのために練習していたということがわかるようになった。相手に話してほしいことを、まずは自分がしっかりと話すことが大事だと思った。

4. 話題を膨らませること

今回の進行役では、前回の反省から話題をひとつにして、対話活動でしっかりと話せるようにした。しかし、対話活動の時間が長すぎてしまい、発表の時間をもっと多くとるべきだった。土屋先生が授業記録の学習者の発表を見て、「Kさんはおままごとをやっていたけど、CさんやRさんはやっていたのかな?」「Rさんの学校は運動会があったのかな?」と聞かれた。私は発表してもらっているとき、発表を次々と進めていかなければと考えていた。質問も発表している人にはしていたが、他の人に尋ねてみることはしていなかった。1人が話したことから、じゃあ他の学習者はどうだろうと思ってみんなに聞いてみるのが大切なのだと思った。

以前、会話をするということがよくわからない人が増えていると聞いたことがある。相手の話は何となく聞いているが、その相手が話し終わるとその話題は終わり、次に誰かが話し始めるとその人が話し終わるまで聞いて待っている。質問したり、混ぜっ返したり、相槌を打ったりすることはしないで、話が終わるのを待っている。「人の話は聞く、でも、興味関心はない」という感じの人が多いようだ。一人の話が終わったらそこで終わりではなく、その話題をみんなが興味を持てるように質問したりして膨らましていく

ことが上手な会話であり、進行役の役目だと思った。

5. まとめ

保見ヶ丘日本語教室は、コミュニケーションの場であり、会話を楽しむための教室である。進行役のときも、授業を進めないといけないとか教案に従って行わなければいけないとか考える必要はない。本当に自分が話したいと思うことを話し、聞きたいと思うことを聞けば良いだけだ。予想していない方向に話が進んでいくこともあるかもしれないが、楽しんで会話できればそれでも良いと思う。会話することはお互いのことを理解することであり、相手のことを知りたいと思う気持ちが一番大切だと思う。この教室では、ボランティアとして何度も参加するにつれて、だんだんと学習者のことがわかってきて、仲良くなることができる。相手のことを良く知っているからこそ、自分のことを知っている人がいるからこそ、毎回教室に来たくなり、温かく居心地の良い空間ができているのだと思う。相手のことをよく知りたいと思ったら、まず会話してみることが大切である。

実習生としてのボランティアを経て

外国語学部フランス学科 中野瑠美

0. はじめに

この実習が始まったとき、私は少し心に余裕をもって日本語教室の活動に臨める、と思っていた。というのも、実習が始まる前から、時々、保見ヶ丘日本語教室に参加していたからだ。教室にはすでに見知った学習者やボランティアがいたし、不安はあまりなく、私の実習は始まったように思う。しかし、実習生として教室参加してみて、実習をする前にボランティアとして参加していた自分と、今年一年、教室に通った自分には違いがあったように思う。ここでは、実習生として教室に通い始め、私の中で変わっていったことを書きたい。

1. 「進行役」

ボランティアとしての自分に引っかかりを覚えたのは、実習生として参加し始めてすぐのことだ。5月21日、急に進行役のDさんが遅れてくるということで、クラスで先に自己紹介をしてクラス活動を始めてほしいと、Dさんに電話で頼まれた。私は了解

したものの、内心不安で、すごく緊張していた。ちゃんと話をひきだせるだろうか。静かなクラスになってしまわないだろうか。

案の定、クラスに入って自己紹介をするも、そこで話が途切れてしまい、その後全く盛り上がらなかった。話は続かないし、クラスには笑い声さえ全くあがらないような状態で、Dさんが来るまでろくに話もできなかった。話を広げようと思っていたものの、構えてしまっていて「会話」ができなかったように思う。そのうち進行役のボランティアが来て、会話はそこで完全に止まってしまった。しーんとしたクラスをみて、失敗した、と思うと同時に、どこかでそれをやっぱり、と思っている自分がいた。私には進行役のような役割は難しい、と考えていたのだ。それは、実習が始まる前から思っていたことで、実習が始まる以前にボランティアとして参加していたときも、私は進行役をやることを避けていた。そのとき、私は完全に進行役＝クラスで一番偉い人、先生、というような印象を抱いていたのだ。そうではないと、本当に実感したのは、恐らく 10 月 21 日に初級クラスの進行役を務めたときである。

2. みんなでつくるクラス活動

10 月 21 日、初級クラスの進行役となった。テーマは「好きな場所」である。この日は、ボランティアが 4 人（中野、T、N、O）、学習者が 3 人（C、W、H）だった。

以下はこの日のクラス活動の導入部分の記録である。私は、自分がよく行くお店をクラスで紹介することから始めた。

進行役（中野）：私は昨日、家の近くの食べ物屋さんに行きました。食べ物屋さん。わかりますか。

（学習者 3 人にわからないと首を振られたので、説明した）

進行役：食べ物屋さん。レストランです。小さいです。おばさんがお店をやっています。ひとりでやっています。これです。（ここで、店の写真をみせる）

N：（お店の看板をみて）珈琲と雑貨ってかいてあるよ。

進行役：うん、そうですねー。（写真で店の中をみせながら）日本のものを売っています。

夏はカキ氷とワラビ餅がおいしいです。

O：（手を挙げて）はい！ 質問です。ご飯は食べられますか。

進行役：ご飯は……。そうですね。お茶漬けがあります。お茶漬け。わかりますか。

（学習者はわからない様子）

T：冷えたご飯にお茶をかけるんだよ。

進行役：そうそう！簡単ですよ～。

（まだお茶漬けがわからない様子の学習者）

N：ふりかけは？ご飯を食べるときふりかけはかける？

W：あ、はい。かけます。

N：そしたら、ご飯にふりかけをかけて、お茶をかけるんだよ。そうするとおいしい。

（Nさんの説明で、学習者はみんな、わかった様子）

進行役：お茶漬けおいしいです。お茶漬けは好きですねー。カキ氷とワラビ餅もおいしいですよ。カキ氷。わかりますか？冷たいです。甘いです。

(Wさんはわかったようだったが、他の学習者はわからなかったようだったので、もってきた写真をみせた。Hさんは写真もみつつ、Wさんのポルトガル語の説明でわかったようだった)

この日はクラス全体で会話がはずんで楽しかった。上記をみてもわかるように、この「お茶漬け」や「カキ氷」の説明も、進行役の私がなにか言うより、参加者みんながそれぞれ説明しあって言葉の意味を理解したようだった。進行役を終えて、考えたのは、進行役ってこんなものだったんだということだ。実習を始めた当初に私が感じていた「進行役」のイメージと、この日の「進行役」には違いがあった。それまでの私にとって、進行役は特別だった。進行役はクラスを仕切る重要な役で、進行役がいなければ、クラスが成り立たないように思っていたのだ。確かに、ボランティアと学習者が話しやすいように席を配置したり、クラス活動全体の基本的な流れをつくる「進行役」は重要で、その存在があるとクラス活動はスムーズに進むと思う。しかし、この日、わからないところがあれば、進行役だけでなくクラスの誰かが答え、進行役がたくさんしゃべっているというのではなく、みんながみんなよくしゃべっているという印象を受けた。誰が進行だとかボランティアだとか学習者だとかいうより、みんなが同じようにしゃべっている気がした。進行役をあまりに重く考えていたな、と思った。

振り返ってみると、実習生として参加する以前、何度もボランティアとしてクラス活動に参加していたにも関わらず、その中では毎回進行役に指示されてから動いていた。いつのまにか受身になっていたのだ。ボランティアのDさんが5月21日の記録で「学校で授業をしているのと同じ立場にいるように感じた」と書いていたことを思い出した。そう書かれた意味がやっときちんとわかった気がした。5月21日、私は本当の進行役はDさんだ、という思いがあり、Dさんが来た途端に、私の役目は終わり、あとは進行役に任せようというふうにおもったのだ。私は無意識に進行役とそうでないボランティアを区別していた。

学習者もボランティアも対等、といつも思っていたのに、自分自身、どこか進行役に任せるお客さんになっていたのだと気づいた。そう気づいたとき、もっと早くに進行役を引き受けていればよかったなあとと思った。そんなに気負うことではなかったのに、と思った。クラス活動はみんなで作るものなのだと改めて思った日だった。

その日以来、進行役はそんなみんなのクラスが始まるきっかけを与えるような役なのかも知れないと思えるようになった。そう思うと、その後進行役をすることは怖くなくなっていたように思う。

3. Wさんとのペアワークを経て

10月21日、私にとってもうひとつ忘れられない出来事となったのが、Wさんとペアを組んで話したことだ。Wさんとは以前にもペアになって話をしたことがあった。その

とき私がもっていた W さんに対するイメージは、「ちょっと無口」だとか「シャイ」というものだった。以前にペアで話をしたとき、こちらから質問をすると答えてはくれるが、一方的に質問してばかりであまり話が弾まなかったことを覚えていたからだ。そのため、今回ペアになったときも、正直、つまらない顔をされたらどうしようとか、途中で話が途切れたら何を話そうか、などと考えていた。しかし、W さんと話し始めてしばらくして、あれ、と思った。その日の W さんは、私にもたくさん質問をしたのだ。以前にペアになったときは、私が一方的に質問する側で、W さんからの質問は全くなかったのに…と思った。そのときは単純に「W さん、変わったなあ」と思った。その日、W さんとはいろんなことを話した。私が思っていた「ちょっと無口」というイメージとはまったく違う W さんの姿だった。W さんがダンスによく行くという話をしたり、カラオケに行くという話をし、さらに「今度一緒にみんなでカラオケいきましょう」と誘ってくれたのは、うれしかった。そしてそれと同時に、W さんがこんなに話して笑うのが、意外だった。

しかし、本当に意外だったのか、と後になって考えた。W さんは本当に無口な人だったのだろうか。学習者同士で話しているときは楽しそうに笑っていたところを何度か見たことがあった。そうして気づいたのは、私は知らないうちに W さんはこんな人だ、と決めてしまっていたのではないか…ということだ。最初に W さんと話をしたとき、すぐにこの人はちょっと無口なんだな、シャイなんだな、と決め付けていなかったらどうか、と思った。そして、その結果、私は W さんと前回話したとき、話題を途切れさせないように、矢継ぎ早に質問をしたように思う。けれど、この日は、そうではなかった。W さんのほうから「カラオケ好き？」と先に聞いてきたのだ。そこからカラオケの話で盛り上がり W さんがダンスが好きだということや、美空ひばりが好きだという話に広がっていった。W さんに会話の糸口をもらって助けられたような気がした。そうしてはじめてちゃんと W さんと会話をしたように思う。

W さんが 12 月にブラジルに帰ることになった。12 月 17 日に教室に参加した私にとって W さんに会えるのは今日が最後かもしれない、という日だったが、この日、私は W さんのいるクラスには参加していなかった。全体会が終わり、私は机で別のクラスの記録を書いていた。すると、W さんがひょいと私をのぞきこんできた。「来週来る？」と W さんに聞かれ、「来週は来ることができない」というと、「今日、最後。いままでどうもありがとう」とお礼を言われた。私はびっくりした。W さんに話しかけられて、お礼を言われるなんて思ってもみなかったからだ。最初の頃、ほとんど話すことがなかったことを思うと、W さんが私に声をかけてきてくれたことも、W さんに「ありがとう」と言われたことも、すごくうれしかった。「こちらこそ、ありがとう。」と素直な気持ちで言った。そのとき感じたことは、私は教室のボランティアとしてなにかしただとか、してもらったというよりも、W さんの友達になれたのかなと思った。対等、対等といいながら、私にはずっとボランティアとして私のほうから学習者に歩み寄らなければいけない、と思うところがどこかにあったように思う。けれど、10 月 21 日のクラスで、W さんはそんなことは関係なく、私が話しにくそうにしていたから会話を振ったのだと思

う。それは学習者とかボランティアという関係よりも、友達なのだと思います。私がそれまで歩み寄れなかったところを Wさんから近づいてきてくれたように感じた。こちらこそ「ありがとう」という気持ちでいっぱいだった。

4. さいごに

私がこの一年間、実習生として教室に参加して、自分自身が変わったと感じたところは、教室の問題や、教室全体の活動について、他人事ではなく考えるようになったところだ。実習生となる前、ボランティアとして参加していた頃にこのように考えられなかったのはどうしてだろうと考えると、やはりどこか「ボランティア」という言葉に縛られている自分がいたからではないかと思う。学習者とボランティア、と無意識に区別してしまっていたのではないだろうか。Wさんに「ありがとう」と言ったとき、私にあったのは、教室にきてくれたことへの感謝の気持ちよりも、Wさんと話す楽しい時間をつくってくれたことへの感謝の気持ちだったように思う。

また、この一年間は、私にとって、本当の意味で教室のボランティアという役割を考えた一年だったように思う。以前は「楽しさ」だけを求めて教室にきていたところがあった。けれど、実習として、保見ヶ丘日本語教室に通うだけでなく、保見の小学校の行事に行ったり、保見のお祭りに参加するなど、保見の実状をより深く知るうちに、保見ヶ丘日本語教室にお客さんとしてではなく、教室をつくる一員だという自覚をもって参加するようになった。「楽しさ」が参加意義になるのも悪いことなどではないけれど、この一年間、やっと本当にみんなと一緒に保見の教室を作る側にたてたような気がする。

日本語教室での授業をとおして

外国語学部英米学科 野路文紗子

0. はじめに

本レポートでは、私が日本語教育実習中実施した2回目の授業と、その振り返りについて述べたいと思います。授業は平成18年10月15日に、保見ヶ丘国際交流センター日本語教室の初級クラスで、家族・兄弟についてというテーマで行いました。

1. 授業案

10月15日 初級クラス

進行役：野路文紗子

テーマ：家族・兄弟

教材：一人につき白紙一枚、家族の樹形図、日本地図、筆記用具、家族の写真

時間	活動	活動内容
10:00	グループ決め	3～4名でグループ決め
10:05	自己紹介	私は、野路です。(順番に言っていく)
10:10	導入	見てください。これは、私の家族です。(写真を見せる) おばあさんです。おじいさんです。お父さんです。お母さんです。妹のアヤコです。私です。この人、お母さんのお姉さんです。 (もう一枚に写真を換える) この人も、お母さんのお姉さんです。この人は、マリちゃん、このお姉さんの子どもです。 (樹形図を書いて) 私は、4人家族です。私と妹、二人兄弟です。4人、一緒に住んでいます。(樹形図に祖父母を足して) おばあさんは、名古屋に住んでいます。おじいさん、いません。(天使の輪と羽根を描いて) 亡くなりました(死にました、を、亡くなりました、と言います)。(樹形図におばを書き足して) お母さんは、お姉さんが二人います。お母さんは、3人兄弟です。私の「おばさん」です。このおばさんは、名古屋に住んでいます。このおばさんは、カナダに住んでいます。マリちゃん、おばさんの子どもです。私の「いところ」です。いとこのマリちゃんは、イギリスに住んでいます。 Yさん、Yさんは何人家族ですか。兄弟は何人いますか。みんな、一緒に住んでいますか。
10:25	発問	みなさんは何人家族ですか。紙に絵を(樹形図をさして)、描いてください。一緒に住んでいますか。どこに住んでいますか。
	会話	グループで会話
10:35	発表	それでは、いいですか。〇〇さん、△△さんは何人家族ですか。一緒に住んでいますか。どこに住んでいますか。(ペアのことについて話してもらおう。一人ずつ聞く。)
10:45	導入2	私の顔は、お母さん、お父さん、どちらに似ていますか。おばあさんに似ていますか。(写真を見せて、みんなの意見を聞く。顔は、お母さんに似ていると言われるかもしれない) 私の顔は、お母さん(おばあさん)に似ています。お父さんには似ていません。似ている、分かりますか。同じ顔です、似ている、と言います。「Yさんは、家族の誰と似ていますか。」Yさんが写真を持ってきてくれたら)

		<p>私の性格は、お父さんに似ています。お母さんには似ていません。私のお父さんは家にいるのが好きです。私も、家にいるのが好きです。</p> <p>私の妹は、お母さんと似ています。お母さんは、外に出かけるのが好きです。私の妹も、外に出かけるのが好きです。私と妹は、仲がいいです。小さい時は、ケンカしました。いまは、ケンカしません。お父さんとお母さんは、今もよくケンカします。口ゲンカです。</p>
10 : 50	発問	みなさんは家族の誰と似ていますか。顔はにていますか。性格も似ていますか。
	会話	グループで会話
11 : 10	発表・まとめ	<p>それでは、いいですか。〇〇さん、△△さんは家族の誰と似ていますか。性格はどうですか。顔はどうですか。(ひとまわりする)</p> <p>スピーチ文をアルファベット・ひらがなで書く。</p> <p>わたしは__人家族です。私と、____、____、____です。</p> <p>みんな一緒に住んでいます。(もしくは、)私の____は、____に住んでいます。</p> <p>私の顔は_____と似ています。性格は_____と似ています。(誰とも似ていません)</p> <p>私は4人家族です。私と、お父さん、お母さん、妹です。みんな一緒に住んでいます。私の顔は、お母さんと似ています。性格は、お父さんと似ています。Yさんの家族は？(穴埋めに合わせて読んでもらう)</p> <p>この文を、紙に書いてみましょう(紙を配る)。何人家族ですか、誰と誰ですか、一緒に住んでいますか、顔、性格、誰に似ていますか、書きます。グループで、書いてください。</p> <p>終わりましたか。それでは、全体会で発表してくれますか？練習しましょう。△△さん、読んでみてください。はい、ありがとうございます。発表するのは、「～住んでいます」まででいいです。それでは、〇〇さん、読んでみてください(学習者の人に読んでいってもらおう。時間があればボランティアも)</p>
11 : 30	全体会	今日は、家族のことを話しました。△△さんは何人家族ですか？(練習の通りに学習者一人一人発表してもらおう。(紙を見ながら発表してもらおう。))

文：わたしは__人家族です。私と、____、____、____です。

みんな一緒に住んでいます。(もしくは、)私の____は、_____に住んでいます。

私は_____と似ています。私は_____と仲がいです。

語彙：兄弟、妹、姉、長男、次男、長女、次女、お父さん、お母さん、性格、似ている、よく～します。

2. 記録

10月15日初級クラス

進行役：野路文紗子

テーマ：家族、家族の誰と似ているか

教材：お正月の時の写真2枚、うら紙、地図（実際には教室に貼ってあるものを使用）

ボランティア：野路（進行役）、Y、N

学習者：学習者：Hさん、Rさん、Sさん、Wさん、Kさん、Cさん

グループ分け：①野路、K、C、②Y、C、H、③N、S、R

活動	内容	学習者の反応	
自己紹介	「私は野路です」の言い方で一回り。	慣れているので、数分もかからず。	
導入	①写真を見て、順番に「これは、私のお父さんです、お母さんです、妹のアヤコです、おばあさんです、おじいさんです、お母さんのお姉さんです、この人も、お母さんのお姉さんです…」と紹介 ②次に樹形図を描いて、「おばさん」「いとこ」という言葉で説明。おじいさんが亡くなっていることも絵で説明（天使の輪）	最初は用語ばかりで間延びし、学習者の反応もうすい。少し退屈そうな表情。 樹形図を描くと、絵が面白かったのか、少し笑いが起こる。	10:10
会話	③「皆さんは何人家族ですか？絵を、描いてください」と発問。グループに分かれて絵を描き始める。	最初はどこまでを樹形図に描いたらいいのか分からずとまどいがちの人が多かった。ボランティアがそこまででいいよ、などと言ってヘルプ。樹形図が描き終わると、この兄弟は結婚している、とか誰と一緒に住んでいる、という話題に。	10:15
発表	④まず、Yさんにふる。「Yさん、Cさんは何人家族ですか。」のような形で、全員に聞き終わる。	Sさんがまだおしゃべりしている。	10:25
導入2	⑤もう一度写真を見せて、「これ私です。誰に、顔、似ていますか。」	みんな小さい写真を一生懸命に見て、誰に似ているか意見を述べてく	10:35

	と意見を聞く。顔はお母さん似、性格はお父さん似だということを説明。	れた。やはりお父さんに似ているという意見はあまりなし。	
会話	⑥発問「みなさんは、家族の誰と、顔、似ていますか。性格はどうですか。」グループで話し合いが始まる。	やはりこちらの話題の方が笑いも多く、は盛り上がったように感じる。特に性格が似ているという話は、みんな興味津々で聞いていた。どんな性格なのかまで聞けなかったグループもいたので、それも発問に含めてもよかったと思った。	10 : 40
発表	⑦やはり Y さんからふる。「Y さん、C さんは、顔は家族の誰とにしていますか。性格は？」一通り回って発表。	また S さんが静かにならず。N さんに怒られて笑いながら謝っていた。	10 : 50
まとめ	スピーチ文をホワイトボードに書く。 まず自分が当てはめて言う。次に Y さんに当てはめて言う。次は学習者に順番に。	スピーチ文を書くとは何も言わなくても学習者も自分の紙に書いていた。当てはめて言うのも、慣れた様子でスムーズにいった。時間が余ったので、全体会で発表してくださいと全員に頼んだ。	11 : 10
全体会	⑧学習者に順番に立って、練習した文を発表してもらう。	みんな少し照れているようだったがけれど、きちんと練習できたので自信を持って発表できた。	11 : 40

スピーチ文

watashi no kazoku wa __nin kazoku desu.
わたしのかぞくは__にんかぞくです。
watashi no kao wa ____to niteimasu.
わたしのかおは____にいています。
watashi no seikaku wa _____to niteimasu.
わたしのせいかくは____にいています。

3. 振り返り

3.1 語彙を引き出すということ

授業を終えて、気になった点を振り返ってみようと思います。全体的に、やはり最初は兄弟の数など家族構成、どこに住んでいるか、結婚しているかいないかなど、単純な事実を確認する話を中心でした。しかし導入2を過ぎてからは、性格が「どんな」風かという内容に入った話になり、学習者もボランティアもいきいきと会話をする様子が見

られました。しかしやはり「どこ」、「だれ」、「いつ」、「何人」という単純な事実を述べることよりも、「どんな」ということを述べるの方が難易度が高いということが、学習者の様子からもよく分かりました。「どんな性格？」ときくとちょっと沈黙が落ちるのですが、その沈黙はどんな性格かを思い描いている時間と、そして日本語の言葉でどういったらいいのかを考えている時間じゃないかと思いました。「どんな」という質問にぱっと答えるのには、豊富な語彙力が必要なのだなと思いました。でも、学習者の K さんとの以下のようなやりとりが心に残りました。

進行役（野路）：お父さんはどんな性格ですか。

K：んー… なにかするとき、んー……

進行役：なにかするとき？

K：…あ、けが短い…

進行役：け？（気が短いのこととわかる）

K：きが短いの反対！

進行役：気が長い？

K：そう、気が長い！

進行役：へえー！ じゃあ、K さんとお父さんは、気が長いんですか。（K さんとお父さんは性格が似ていると聞いたので）何かやるとき、コツコツと…あ、なんていうか…ずっと続きますか。

K：そう！ ずっと続く。

進行役：じゃあお母さんは、すぐにやめちゃいますか。（お父さんとお母さんの性格は似ていないと聞いたので）

K：（笑顔になって）そう！ すぐやめます。

このように、K さんが一生懸命自分の知っている言葉を使って表現しようとしたのを手助けして、言葉を導けたのは本当によかったと思いました。「どんな」という必要には確かに語彙力が必要ですが、だからといって学習者の独習に任せるのではなく、こんな風に日本語話者とやりとりをすることで語彙を増やしていく方が、効果的に、しかもずっと記憶できるやり方で、学習者の語彙を増やせるのではないかと、このやりとりを振り返って感じました。

3.2 「家族」ということばのくくり方

そしてひとつ考えさせられたのが、K さんが会話では 5 人兄弟の 7 人家族と言っていたのに、スピーチ文では「3 人家族」と言ったのでことです。K さんはいまは兄弟はみんな別の場所で暮らしていて、同じ家に住んでいるのは、自分とだんなさん、だんなさんのお父さんだということを説明してくれました（しかし K さんだけ日本に来ているとのこと）。K さんが「3 人家族」と言ったのは、N さんの「家族は同じ家に住んでいるもの」という説明があったからでした。それはそれでひとつの感覚と思い、その場では

「Kさん3人家族」ということになりました。しかしあとになって考えれば、なにを「家族」という言葉でくくるかは、国によって、個人によって様々ではないかと思いました。特に初級クラスの20代～40代ほどの年齢の人たちは、家族の状況もさまざまですし、どこまでを「家族」とくくるかは、人によって違って当然のようにも感じました。実際Wさんは奥さんとお子さんの4人で暮らしていますが、発表の時は「8人家族」と言っていました。離れていても、家族は家族、と思うWさんの考え方も、ひとつの「家族」の感覚としてうなずける気がしました。実際のクラスではそこまで追求することはできませんでしたが、今後同じようなテーマで授業をする機会があったら、「家族」のくくり方が人によって違って自然なことじゃないか、ということを経験者と話し合うということを経験者、最終的な展望としてもつことができるのではないかと感じました。

なお、ことばの問題ですが、初期の教案では「何人家族か」ではなく「何人兄弟か（特に血のつながった兄弟）」という言葉で考えていました。教案を作っていた当初はそこまで考えが及ばなかったのですが、振り返ると「何人兄弟か」という言葉の方が、家族のくくり方と違ってあいまいなところがなく単純な事実として述べられるので、入門クラスの学習者にでも言えるのではないかと思いました。こうして考えると、今回の初級クラスでは「家族と自分がどんな性格か」ということを話題の中心にしましたが、同じ家族のテーマで、入門なら「何人兄弟か」という話題を中心に、中上級なら「どこまでを家族とくくるのか」という話題に発展させて、授業を展開できると感じました。

会いたい人に会うために

外国語学部中国学科 福岡沙與子

0. はじめに

私は小さい時から、人前で話したり、人にものを教えることが苦手でした。しかしなぜ日本語教育実習の課程を取ろうと思ったかというと、1年間留学に行ったことがきっかけでした。大学2年まで義務的に単位を取っていた私は、3年に上がる前に留学をしました。そこで自分とは全く違う生き方をしてきた人々に出会い、初めて外国人の友達ができ、もっといろいろなことを学びたいと思うようになりました。積極的に人と関わり、たくさんの人と話したい、将来外国で生活することがあれば日本語を教える仕事をしてみたいと思い、この実習を始めました。

1. 初めての進行役（8月20日）

初めて進行役になった時点から、早く終わることだけを願っていました。それまで2回ほど初級クラスに参加していましたが、教案を作り自分がクラスをリードしなければいけないことは私にとってとてもプレッシャーでした。ゲーム感覚で会話を楽しめたらいいなと思い、テレビ番組の「ごきげんよう」で使われている、6つの目のテーマにそって会話を進める“サイコロゲーム”をやることにしました。8月20日の初級クラスは学習者6人、ボランティア7人というクラスで大人数だったため、私はみんなに注目されることにとても戸惑いました。進行役の役割というものが漠然としており、授業の進め方をいまいちつかめず、時間を見る余裕もなく、会話だけが続け、発表することなくクラスを終わらせてしまいました。その日のTさんの感想メールで、「Cさんは日本でビックリしたことは何もない」というのを見て、テーマに問題があったのではないかと反省しました。おいしかった料理やきれいな景色というのは一人一人感じたことを話せるテーマですが、（日本に来て・海外に行って）ビックリしたこと、うれしかったこと、困ったこと、国に帰りたかったこと、というのは、既に“国”という枠組みで囲ってしまっているテーマだと思いました。この事について授業で土屋先生が、「何もない」というのはこちらが望まない答えであっただけであり、話が弾むような質問がいいのではない、とおっしゃいました。確かに私はビックリしたことはあるはずで、会話が弾まないようなテーマはよくないと思い込んでいました。しかし実際Tさんの話を聞いてみるとCさんは会社の社長がいろいろとサポートしてくれたため、ビックリするようなことに遭遇していないだけで、Cさんのことについて知ることはできていました。自分がどれだけ国というものに囚われ、盛り上がる話、楽しい話をしなければいけないと思込んでいたか、ということを実感しました。

2. 改善点

2回目に進行役を担当する日が決まり、前回のフィードバックと次回のテーマの相談を土屋先生にしました。私の前回の改善点は、テーマが6つあり多すぎたこと、緊張しすぎてしまったこと、時間を見ていなかったこと、発表する時間を作れなかったこと、記録をしっかりとらなかつたことでした。そこで次はテーマを一つに絞り、時間をしっかり見て、発表する時間を作り、記録をしっかりと取るようにしました。どうしたら緊張しないかを授業の時間を使ってみんなに考えてもらったところ、準備をしっかりとおくと不安が多少解消されるということだったので教案作りを頑張ろうと思いました。

次のテーマとして私が考えていたのは、仕事の休憩時間にすることでした。これまでの初級クラスでは好きな食べ物や習慣、家族などプライベートなことをテーマにしたものが多く、日々の生活の大部分を占める仕事の話をしていなかったことに加え、ちょうど私自身が新しいアルバイトを始めたばかりだったので、休憩時間にすることと一緒に働いている人のことについて聞いてみたいと思いました。

3. 2回目の進行役（11月19日）

教案をしっかりと作ったことから前のような緊張はなく、とても落ち着いた気持ちでできました。クラスは学習者4人、ボランティア4人のちょうど1対1でペアになりました。導入の途中、学習者、ボランティアから自然に質問が飛び交い、会話が弾みました。教案では“休憩”の説明をする予定でしたが、すっかり忘れてしまいました。しかし学習者は「10分休憩、20分休憩」というように「休憩」という単語を普段から使っていること、「休憩」とは短い休み時間だけを指し、お昼休みは「お昼」と呼んでいることが後で分かりました。2回目の導入で「店長」の説明をするために、予めポルトガル語と中国語を調べていきました。学習者に『店長』分かりますかと聞くと分からなかったようでしたが、すぐに調べてきた単語を見せると学習者は理解してくれ、調べてきてよかったと思いました。後日土屋先生と記録を見ながらフィードバックしたとき、1回目の導入の中でも「店長」という単語を使っており、学習者に確認しないまま進めてしまっていたことに初めて気がつきました。2回目の導入で確認したので、分からないことが分かったのであって、気づかないうちに学習者が理解できない単語を言ってしまうことがあると改めて実感しました。ペアワークではMさんと話しましたが、休憩時間に何をするかという話よりも、一緒に働いている人の話の方が盛り上がり、また上司の話、派遣で来た人の話、子どもの教育の話など、さまざまな話に発展しました。他のボランティアの感想メールを見ても、給料やごはん、音楽など私とMさんのように話が広がっていて、私の考えたテーマで楽しんで会話してもらえたかなと思いうれしくなりました。今回は時間もじっくり見て、発表も取り入れることができ、記録もしっかりとることができました。

4. 進行役を経て

2度の進行役をやってみて授業前の準備の大切さを身をもって知りました。1回目のときは、授業の進め方が分からないこと、緊張したことなどと、自分の中に何かと理由をつけ、やるべきことから逃げていたのだと思います。そのために他のボランティアや学習者に失礼な授業をしてしまいました。後日土屋先生と話している中で、私が逃げてきたことを全て指摘され、とても反省しました。2回目のときは、1回目にはできなかったことをすべてきちんとやろうと思いました。教案を一言一句書き、実際声に出して練習し、何回も見直してから臨む授業は、気持ちの余裕が全く違いました。緊張してしまうことについて、授業で実習生のみなさんの話を聞いたとき、「会話に入るとだんだん緊張も和らいだ」と言っている人がいましたが、2回目の進行でやっとその気持ちが分かりました。1回目のときに感じたような、早く終わってほしいという気持ちは全くなく、会話が楽しく、また他のペアの発表を聞くのが楽しく、あっという間に1時間半が終わってしまいました。2回の進行役を経験できて、教えるということはどういうことなのか、時間、学習者の反応、会話の流れの判断など、いろんなことに気を遣わなければならないことを学びました。これは教育の場面だけでなくこれから社会に出ていく上で、重要なことだと思いました。

5. おわりに

初めは1年間保見にボランティアとして通うことをとても大変なことに感じていましたが、終わってみるとあっという間の1年だったと思います。今まで中国、韓国以外の国の人と会話したことがなく不安でいっぱいでした。1年と言っても数える程しか私は行けませんでした。Rさんは私の髪型が変わったことに1番に気づいてくれました。Hちゃんは私が前髪を少し切っただけで気づいてくれました。Cさんはシュハスコパーティー以来仲良くなり、その後なかなか会えない日が続きましたが、会えるたびに「会いたかったよ」と言ってくれました。進行役をやることはとてもプレッシャーになっていたし、初めは実習のために通っていましたが、途中から会いたい人たちがいるから行く、話したい人たちがいるから行くということに目的が変わっていた気がします。また私が進行役を担当したクラスに参加してくれたボランティアには、たくさん質問をして会話のきっかけを作ってもらったり、しっかり記録をとってくれたり、私の説明不足な点を学習者に説明してもらったりと、助けてもらってとても感謝しています。私は2006年度の実習生の一人として、保見に通えたことをうれしく思います。これからもっとたくさんの人が保見で会いたいと思える人を見つけてくれるといいなと思います。

頼れる“周りの人”

外国語学部スペイン学科 村上智美

0. はじめに

保見ヶ丘日本語教室に実習生として通い始めて約5ヶ月、私は初めて一つのクラスの進行役をすることになった。担当は中上級クラスだった。中上級クラスの場合、教案を作成したり、先生とフィードバックをしたりする必要はなかったが、今振り返ってみると、初級クラスと同じくらい、考えて悩んだクラスだったかもしれない。テーマを決めるにあたり、クラスの学習者に、何について話したいか事前に質問してみた。そして、学習者から返ってきた答えは、その後の初級クラスの進行のヒントにも、この日本語教室の意義を考えるきっかけにもなった。今回のレポートでは、自分が進行役を担当したクラス活動の経過と、保見の教室について自分の中で変わっていった考えをまとめる。

1. 8月27日中上級クラス

1.1 学習者の要望を受けて

前の週の8月20日にも教室に参加していた私は、教室活動終了後、Iさん、Sさんとボランティア数人で、あるブラジル料理店へランチに出かけた。翌週の担当クラスのテーマがなかなか決まらず悩んでいたのも、その帰り道、思い切って、何かリクエストはないか聞いてみた。すると、学習者は「ブラジルの食べ物とか、祭りとかの話はもういっぱいした。だから、病院とか市役所とかそういう所で、何かからすればいいのか、何て言ったらいいのか分からない。そういうのを知りたい。」と言った。これは良いヒントをもらえた！と思い、活動テーマに取り入れることにした。

準備の段階では、「健康・病院」というテーマで、①健康のために何をしているか、②今の身体の様子・気になるところの症状、③対処法（寝る・薬・病院・食事・・・）、という流れを考えていた。その中で特に、「病院」に重点を置いて話を進めたかったので、受付や申込・診察の仕方を確認したり、自分の保険証や診察券を用意したり、病院が載っている豊田市内の地図を探したりして、張り切って教室に臨んだ。

1.2 実際の教室活動 —身体に良いこと—

当日は、学習者4人（Kさん、Nさん、Iさん、Sさん）とボランティア5人（Mさん、Tさん、Zさん、Fさん、村上）で、グループ分けをしないまま活動を進めた。最初に、健康のために何をしているか、という話題を持ち出した。すると、耳ツボ治療、病院でリハビリしている患者さんをサポートするボランティアなど、学習者・ボランティアともに、食事や運動でそれぞれ気をつけていることがたくさん出た。朝ウォーキングをしているというKさんの発言から、ブラジルの治安の話へと発展していく、この教室ならではの活動ができて面白かった。しかし結局、病院の話まで辿り着かなかった。学習者の要望に応えられなかったことが心残りだった。

2. 11月26日初級クラス

2.1 教案作成

いよいよ、初級クラスの進行役がまわってきた。それまで他のクラスで何度か進行役を担当していたものの、「病院」のテーマで活動していなかったので、これを機にもう一度取り上げてみようと考えた。そして、このテーマをもう一度掘り下げて、活動の流れを想像してみた。すると、「教える側」と「教えられる側」が出てきて、ボランティアから学習者へ、一方的に情報が流れるだけの様子が頭に浮かんだ。保見らしくない、と思った。

結局、自分が話したいこと、相手に聞きたいことを意識して考え直した結果、「風邪を引いたとき、疲れたとき、ストレスが溜まったとき」というテーマで活動することにした。以前考えた「健康③対処法（寝る・薬・病院・食事・・・）」の話題の延長上にあるし、これはこれで、みんなの面白い話が聞けそうだった。

教案について先生に相談しているとき、以前学習者から、病院でどう動いたらいいか教えてほしいという意見が出た、と話した。すると先生は、「それは、でも、保見でやっているのは、病院でのやりとりをそのまま教えるんじゃなくて、そういうことを周りの

人にどう聞くかということなんだよ。」と答えた。それを聞いたとき、私はすんなり納得できていなかった。周りの人って？場面シラバスで活動した方が、分かりやすいのでは？学習者が知りたがっているし…。そのような考えが頭の中を回っていた。

2.2 実際の教室活動 —みんなの対処法—

このときの初級クラス参加者は、学習者4人（Rさん、Mさん、Kさん、Dさん）、ボランティア人9人（Sさん、Zさん、Nさん、Fさん、Yさん、Aさん・Mさん・Hさん、村上）だった。中上級クラスのメンバーも加わり、大人数になったので、2グループに分けて対話活動を行なった。始まる前は不安が大きかったが、ボランティアの方々が要所要所でサポートしてくれたので、緊張はほぐれていった。

対話活動では主にMさんと話した。Mさんは、風邪をひいても子どもの世話をしなければならないので、寝ていられないと言っていた。同じく子どもがいるYさんと話が合うようで、二人の母親の強さを感じた。RさんやFさん、ZさんやNさん、Fさんの男性陣はお酒が薬だと言っていた。

体が疲れたときは寝る、という人が多い中、Mさんは運動してさらに疲れてからぐっすり寝ると言っていた。また、ストレスが溜まったときに運動する人が多く、嫌なことを忘れられる、考えなくて済むからという理由でみんな一致していて印象深かった。ちなみにKさんは、職場の班長さんが優しいのでストレスはないそう。ストレスの話でFさんは、仕事の嫌なことや問題は家庭に持ち込まないし、その逆もやらないよう気をつけているらしい。学習者に全体会での発表をお願いしたとき、KさんとRさんに「これ（発表するのが）、ストレスねー」と言われてしまった…。

2.3 会話の中で

記録を振り返っていると、先生がある会話に目を留めた。それは、グループ活動をクラス全体でシェアしているときの会話だった。

D：熱あったら、くすり飲むね。オレンジジュース、お酒も。ペルーも、にんにく？とうがらし？ 形がない、変な・・・

（しばらくしてから、しょうがのことを言っていることが分かる。）

F：しょうが？ と、さとう、入れて飲む。スープも作る。

F：ペルーもブラジルも、スープ飲むんですね。違いがありますか。

この後Kさんが、ポルトガル語でDさんに質問をする。Dさんはスペイン語で返答した。ペルーのスープは、ニンジン、セロリ、マカロニなどが入っているらしい。

S：疲れたらどうしますか。

R：誰もマッサージしません。ビデオゲームします。

S：プレイステーション？

R：そうそう。プレイステーションⅡ。サッカーが好きです。1時間、2時間くらい。
R：あなたは？
S：甘いもの、チョコレートやケーキを食べます。友達に電話します。面白いテレビをみて笑います。
S：Rさん、友達に電話しますか。
R：ブラジルの友達時間同じじゃない。時々電話することできない。電話できるとき、する。
F：じゃあ、友達に慰めてもらうんだね。
R：なぐさめる？
F：話をきいてもらうんだね。
R：はい。（Sさんが辞書で「慰める=Consolar」をひいて見せる。Rさん、ノートにメモ）

この記録を読んで、先生は「やっぱり、Fさんはすごい。この技術は見習いたい。この教室に一番長く関わっていて、こういう風にニュアンスで伝えられるんだね。」と言った。

Fさんは今回の会話の中で、学習者同士が会話できるような質問を投げかけた。それは当然、質問の仕方を示しているし、さらに、ボランティアだけでなく、学習者同士も言葉を交わすべき存在であることを伝えている。

また、Rさんが分からない日本語を耳にしたとき、Rさんは分からないと意思表示をし、それに対して、Fさんは具体的に、分かりやすい言葉で伝えた。さらにSさんも、すぐに辞書で単語を調べて教えた。この手助けは、保見では自然な光景である。

このとき、「それは、でも、保見でやっているのは、病院でのやりとりをそのまま教えるんじゃないくて、そういうことを周りの人にどう聞くかということなんだよ。」という先生の言葉の意味が分かったような気がする。

場面シラバスでいくら病院のやりとりをやったところで、その行為自体には全く意味がない。その教室の場では、実際に必要としていないのだ。分からないことを素直に聞き、周りがそれに答えるということを、保見の教室の外で再現できればいいのだ。保見に来ている人は、みんなそれができているのだから、どこへ行っても、周りの人とコミュニケーションがとれるはずだと、そう思い至った。

3. おわりに

保見の良い所は、「知りたいことを周りの人にどう聞くかが分かる」という意味が、今ではよく理解できる。「聞く」ことができれば、そこからコミュニケーションは始まる。保見には、その「聞く」行為が自然に、気軽にできる環境がある。話題シラバスに基づいた活動をするこの教室では、自分が伝えたいことを伝えること、相手に聞きたいことを聞くことが、当然なのである。地域のボランティアの人々、実習生、そして学習者同士が、頼れる“周りの人”なのである。保見の教室に参加している人は、みんなの身近

にいて頼れる存在であり、コミュニケーションできる環境を守っている。そして、この教室の外でも、周りの人に頼れるようになるよう、手助けをしている。保見の教室は、そういう頼れる人が集まる場所なのだと思う。

3. 名古屋工業大学での日本語教育実習

前期の授業記録	竹川奈美江
後期の授業記録(中上級)	ハダー
後期の授業記録(初級)と実習の感想	小田亜美

前期の授業記録

外国語学部スペイン学科 竹川奈美江

期間：2006年5月9日～2006年7月18日

時間：毎週火曜日 10:00～12:00

場所：名古屋工業大学留学生会館1階和室

担当者：ハダー、小田亜美、竹川奈美江

<ボランティア参加>

5月23日 吉田裕紀、5月30日 真野由紀、6月13日 幸得江美

6月27日 真野由紀、7月11日 中野瑠美

学習者：8人（中国人3人、韓国人1人+子ども1人、ウイグル1人、エジプト人1人、
バングラデシュ人1人）

クラスの記録

月日・テーマ 進行役	文型	語彙	教材
5月9日 テーマ：自己紹介 進行役：竹川	1)はじめまして。私は__ _____です。どうぞよろ しく 2)お名前は？ 出身地 は？ _____です 3)いつ日本に来ました か。 _____来ました	名前、出身地、1月～12 月、1日～31日、国の名 前、来ました	世界地図、日 本地図、愛知 県地図、名札、 ペン、紙
5月16日 テーマ：私の一日 進行役：ハダー	1)動詞の過去形 2)〇時から〇時まで 3)何を _____ましたか。 4)何時に _____ましたか。 5)〇時に _____ました。	きのう、午前、午後、朝 ごはん、昼ごはん、夜ご はん、〇時、起きました、 食べました、勉強しまし た、寝ました	紙の時計、絵 カード、紙、 ペン
5月23日 テーマ：家族・誕 生日 進行役：竹川	1)私の家族は _____と__ _____です。 2) (人) は〇歳です。 3) (人) の誕生日は〇月 〇日です。	家族、家、家族の名称 (例：父・お父さん、母・ お母さん、兄・お兄さん など)、誕生日、1月～ 12月、1日～31日、歳	親族の集合写 真、家計図、 語彙集、カレ ンダー、紙、 ペン
5月30日 テーマ：好きなも の・したいこと	1) _____が好きです。 2) _____が好きじゃな いです。	食べ物、飲み物、スポー ツの名称 (例：肉、魚、 コーヒー、お酒、野球、	絵カード、紙、 ペン

進行役：ハダー	3) _____たいです。 _____たくないです。 4) _____がほしいです。	相撲など)、好き、嫌い、 欲しい、晴れ、曇り、雨、 雪	
6月6日 テーマ：ファッション 進行役：小田	1) _____を着ています。 2) _____を履いています。 3) _____を脱ぎます。 4) _____をつけています。 5) _____をはずします。 6) (時間) かかります、 かかりました。 7) いつ _____ますか。	服や装飾品の名称(例： Tシャツ、タンクトッ プ、ズボン、スカート、 めがね、時計など)、化粧 粧、民族衣装、着る、脱 ぐ、履く、いつ	みんなの服、 化粧品、着物 やドレスの写 真、紙、ペン、 ワークシート
6月13日 テーマ：家の近所 進行役：竹川	1) (場所) に _____があ ります。 2) _____へ行きます。 3) _____から _____まで _____で(時間) かかりま す。	前、隣、右隣、左隣、後 ろ、毎日、よく、時々、 自転車で、歩いて、車で、 電車で	家の近所の略 地図、名前カ ード、場所カ ード、世界地 図、日本地図、 紙、ペン
6月20日 テーマ：日常生活 の中で見る日本の 文化 進行役：ハダー	靴を脱ぐ習慣、和室での 座り方、ドアノック、各 国の習慣の違いについ てビデオを見ながら話 し合う	玄関、いただきます、ご ちそうさま、胡坐、正座、 習慣、謙虚、「何もない けど」	ビデオ
6月27日 テーマ：病気・体 調 進行役：真野	1) 風邪をひいた(病気 の)とき、 _____ます。	病気、病院、風邪、体の 部位の名称、体温計、薬、 救急車、お粥、熱、痛い、 頭痛、腹痛、けが	自作の絵カー ド、ワークシ ート、お粥、 薬、紙、ペン
7月4日 テーマ：会いたい 人 進行役：小田	1) (人) に会う。 2) 否定文(_____できな い、 _____ない)	成人式、会う、馴れ初め	
7月11日 テーマ：習い事 進行役：竹川	1) 過去の習慣(例：「子 どもものとき _____を ていました」) 2) _____始める/終わる (例：習い始める、勉強 をし終わるなど)	習い事、習字、ピアノ、 水泳、塾、音楽、学校、 通信教育、月謝、無料	無料情報誌 「ホットペッ パー」

7月18日 テーマ：夏休みの 予定・自由に会話 進行役：ハダー	1) 未来表現（例：「夏休 みに___します、___す る予定です」 2) _____しなければい けません。	夏休み、予定、計画、旅 行、思い出、ニュース、 新聞	お菓子・お茶
--	---	----------------------------------	--------

1. はじめに

私は2006年の5月から2007年の1月まで名古屋工業大学（以下、名工大）の留学生やその家族を対象とした日本語クラスにボランティアとして参加しました。このクラスには中国人、韓国人、エジプト人、インド人などさまざまな国の人々が参加していました。「毎週、名古屋工業大学に日本語のボランティアに行っている」と知人に言うと、必ず「大変だね、頑張るね、ご苦労様」などと言われましたが、周囲が言うほど苦ではなく、毎週名工大でおこなう2時間の授業は毎回刺激的で楽しいものでした。なぜなら、学習者は私が今までに接したことのない国の人たちばかりで、彼らの国の知識もほとんどなかったため、たくさんのことを学ぶことができたからです。毎週、さまざまな国や人の話を聞くことができる名工大の実習は私にとって充実した時間を過ごせる貴重な場所でした。そこで、このレポートでは、私が名工大の日本語教室の中である一人の学習者を通じて感じたことを紹介しようと思います。

2. Mさんとの会話

名工大の日本語教室に参加していた複数の学習者の中に、特に思い出に残っている人がいます。それは、エジプト人のMさんです。彼女が参加していた前期のクラスは、彼女以外の学習者は日本で数年暮らしている主婦や大学院を目指す研究生などで日常会話程度の日本語を話す人たちでした。そんな中、Mさんだけが日本語学習経験がなく、まったくのゼロの状態でした。私たちは、毎回一人のボランティアがMさんをマンツーマンでサポートできるように注意を払い、英語でも日本語でもどんな言語を使ってもいいから彼女の隣に座って、たくさん話をしようとして努力しました。毎回教室に行っていた私は自然とMさんと話す時間が多くなり、実習が終わった今、自分が書いた感想を読み返すと、彼女との話がたくさん書かれていました。

【5月30日「好きなもの、したいこと」】

・・・天気（晴れ、曇り、雨、雪）のカードを見て、先週「雨、嫌い」と私が言ったときにMさんが「雨、好き」と言っていたのを思い出して、どうして雨が好きなのか聞いてみました。答えはエジプトでは雨がほとんど降らず、降っても1年に2、3日、たったの1、2時間しか降らないということでした。貴重な雨だからこそ、好きなのです。「なるほど～」とおもわず納得してしまう理由でした。雪はまったく降らないので、今年の1月に初めて日本で雪を見て、雪を見た感想は「かわいい」でした。その時に人生で初めて旦那さんと雪合戦をしたそうです。そして、最後に「欲しいもの」の話になったとき、新婚9ヶ月のMさんの欲しいものの答えは、「私は子どもが欲しい」

でした。おもわず、みんなが笑顔になりました。・・・

【6月13日「家の近所」】

・・・Mさんは留学生会館、校内に住んでいます。Mさんは、日本の家とエジプトの家の両方の周辺図を描きました。エジプトの家の近くにはスーパーが二つもあるそうです。エジプト＝ピラミッド、スフィンクスしか思い浮かばないので、ふつうにスーパーや団地があると言われても、想像しがたかったです。Mさんがどんなところに住んでいるのだろうと、ますます興味がわきました。

【6月20日「日常生活の中でみる日本の文化」】

・・・今回はMさんとの会話でイスラム教の戒律を少し学ぶことができました。アルコールは一切口にしないとか、食べる時、飲む時は右手を使うとか、女性は旦那さん以外に肌や髪の毛を見せてはいけないとか。Mさんはすべて守っているので、「私は良いイスラム教徒」と自負していました。エジプトでも、特別な市場にはお酒を売っており、飲む人もいて、女性でもショールで髪の毛を覆わなかったり、肌を露出していたりする人がいるらしく、Mさんはそういう人のことは「悪いイスラム教徒」と呼んでいました。・・・

【7月4日「会いたい人」】

・・・中でも一番盛り上がったのが、みなさんの旦那さんとの馴れ初めです。みなさん、照れながらも話してくれました。Mさんはエンジニアの大学に通っており、そこで工学を教えてくれた先生が今の旦那さん。年齢が8つ離れており、エジプトでは7、8歳離れているのが普通だと言っていました。旦那さんを好きになった理由は、かっこいいから、背が高いから、なんといっても良いイスラム教徒だから、と答えていました。最後の答えに驚きましたが、良いイスラム教徒であることがとても重要だそうです。・・・

2. 学習者との会話で学んだこと

Mさんとの出会いで、イスラム教に対する知識が少し深まりました。Mさんは敬虔なイスラム教徒で、度々イスラムの戒律についても教えてくれました。アルコールを飲めないということでクラスの中で「酒」という言葉さえ言うてはいけないのではないかと考えていましたが、飲み物の話や食べ物の話をしているときに、Mさんは自分から進んで「私は豚肉食べない、アルコール飲まない」と話していました。名工大のクラスでMさんとそんな話をした後で、日本語教育実習の授業内で先生がイスラム教についての話をし、ハラールマーク（イスラムの掟に正しく従って調理された食品についているマーク）について聞きました。知り合いにイスラム教の人がいなかったらすぐに忘れてしまっていたかもしれませんが、ちょうどMさんとイスラムの戒律について話した後だったので、この授業で学んだイスラム教の話は強く印象に残りました。あまり、宗教のことは深く

聞いてはいけないのではないかと考えていましたが、分からないまま失礼なことをして、相手を不快な気持ちにさせるよりも、知らないことは聞いて、相手への理解を深めればいいのだと感じました。

3. さいごに

私たちが日本語教室をおこなっていたのは、6畳ほどの小さな和室でした。全員畳の上に座り、一つの机を囲んで日本語を勉強しました。この珍しい教室スペースが和やかな雰囲気を作る手助けになったと思います。毎回のように終了時刻になっても話が絶えず、管理人さんに「時間ですよ～」言われていました。Mさん以外にもたくさんの外国の人たちと話をしました。みなさんいい人ばかりで、ときには教室に自国の食べ物を持ってきてくれたり、生まれたての赤ちゃんを連れてきて見せてくれたり、家に招待してくれたりしました。私は学習者のみなさんと良い関係が築けたからこそ、このようなうれしいことを学習者の人たちがしてくれたのだと思っています。学習者だけでなく、学習者の家族や日本語教室をコーディネートした名工大の職員の方々、留学生会館の管理人さんやチューターの学生など、名工大でさまざまな人と出会い、話をするのができて、とても貴重な経験になりました。きっと自分の世界も広がったと思います。

後期の授業記録（中上級）

文学部児童教育学科 ハダー

期間：2006年10月17日～2007年1月23日

時間：毎週火曜日 午前10時～12時

場所：名古屋工業大学 留学生会館の和室

担当者：竹川奈美江、小田亜美、ハダー

全学習者：名古屋工業大学留学生の家族と研究生

8人（韓国1人・インド1人・リビア1人・中国4人・インドネシア1人）

うち、中上級の学習者1名

教材：自主制作のプリントを使用

クラスの記録（学習者：Hさん 担当者：ハダー）

日時・テーマ	授業の目的・用意したもの	授業の内容
10月17日 テーマ： 自己紹介	自分のことを紹介できる 学習ニーズ調査を行い、学習者の 日本語レベルを把握する プリント・世界地図 日本地図、愛知県地図	1) 初対面の挨拶 2) 自分ことを紹介する 3) 地図を使って会話する 4) この教室の活動を説明する 5) 学習者のニーズ調査を行う
10月24日 テーマ： 家族全員の日	家族の紹介をできる 家族全員がいる時のことを言える 家族のことを簡単な文章で書ける 丁寧体と普通体を理解する プリント、写真	1) 家族の紹介、家族が揃ったときのこと 2) 丁寧体と普通体を勉強する 3) 家族のことを丁寧体で簡単な文書にする 4) 丁寧体を普通体に変える ～です ～である ～だ ～します ～する 5) 私の家族という文章を読む 6) 文章について感想を話す
10月31日 テーマ： 近所の付き合い	自分の家の近くの場所を紹介できる 近所の人とのかかわりを言える 簡単な文書で近所について書ける プリント、名古屋市の地図、自分の近所を書いた自作マップ	1) 家の近所を紹介する（自作マップを使う） 建物 店 スーパー ～区 ～町 ～住宅地 2) よく行く店などを紹介する 3) 近所の人との交流について話す 挨拶 遊びに行くかなど 4) 「私の近所」という簡単な文章を書く。普通体で書く 5) 文章の書き直しをする
11月7日 テーマ： 私の好きな芸能人	好きな芸能人を紹介できる 好きな芸能人の作品を言える プリント、写真	1) 好きな芸能人を紹介する 性別 年齢 などをできるだけ具体的に 2) 一番好きな歌と映画を紹介する どんなところが一番すきかを踏まえて話す 3) 好きな芸能人について簡単な文章で書く 4) 「世界一つだけの花」という文章を読む 分からない単語の説明 5) 助詞の勉強「さすが、って け

		れども」 6) 他動詞と自動詞の勉強 ～散る ～散らす ～落ちる ～落とす
11月14日 テーマ： 交通手段	いろいろな交通手段について言える 乗り物酔いの防止を覚える プリント、絵、写真	1) 今まで利用してきた交通手段について話す バス 地下鉄 電車 自転車 馬 バイク 新幹線 飛行機 船 2) よく使う交通手段について話す 3) 日本の交通について簡単な文章を書く 4) 「乗り物酔い」という文章を読む 5) 文法の勉強 音読みと訓読みの違い 例：使う 使用する 車に乗る 乗車する 6) 乗り物酔いを防ぐ方法について話す
11月21日 テーマ： 受身と使役	動詞の受身と使役を活用できる 受身文と使役文を理解できる 受身文を普通の文に書き換える 教材 『みんなの日本語』 『標準日本語』	1) 受身の説明 私は隣の人に足を踏まれた 被害者と動作者を明確にする 2) 受身文を普通の文章にする 隣の人は私の足を踏んだ 3) 普通文を受身文にする 母は私を叱った／私は母に叱られた 4) 使役文の説明 先生は学生に本を読ませた（動作主は学生） 5) 自動詞の受身 彼は犬に死なれた 6) 練習問題をする

		みんなの日本語の練習問題
11月28日 テーマ： 文法の練習	受身と使役文をもっと活用できる 話し言葉と書き言葉の違いを理解できる 助詞「は」の使い方をいくつか覚える 教材 『みんなの日本語』 『標準日本語』	1) 先週に引き続き受身と使役文の練習をする 2) 学習者に受身と使役を使った文章を作らせる 3) 話し言葉と書き言葉の違いを説明する ～してしまいました ～しちゃった ～忘れてしまいました ～忘れちゃった 4) 助詞「は」の使い方について練習問題をしながら説明する 教材として学習者が持っている『標準日本語』 と『みんなの日本語』を使う 5) 学習者の要望を聞き、これから何について一番勉強したいか、それに応じて資料を用意することなどを話し合った
12月5日 休み	学習者が風邪をひいたため中上級のクラスは休みになった	
12月12日 テーマ： 好きなスポーツ	自分の好きなスポーツについて言える よくするスポーツのルールなどを紹介できる 好きなスポーツ選手を紹介できる プリント、絵カード、絵	1) 自分の好きなスポーツを紹介する 相撲 野球 卓球 バレーボール 2) いままでやっていたスポーツについて話す 3) 好きなスポーツ選手を紹介する 4) 「私の好きなスポーツ」という

		<p>簡単な文章を書く</p> <p>5) 「卓球と私」という文章を読む</p> <p>6) 助詞の勉強 ～ひたすら ～いつの間にか ～さっそく</p>
<p>12月19日</p> <p>テーマ： 四季</p>	<p>四季について話せる</p> <p>季節の特徴を言える</p> <p>自分の好きな季節と景色を伝えられる</p> <p>プリント、写真</p>	<p>1) 四季 中国の四季と日本の四季について話す</p> <p>2) 自分の一番好きな四季を紹介する</p> <p>3) 一番好きな景色について話す</p> <p>4) 自分の好きな季節を簡単な文章で書く</p> <p>5) 「四季の歌」の歌詞を読む</p> <p>6) 日本と中国の四季を比べる 気温 雨 雪 梅雨 砂嵐 氷点下 蒸し暑い 乾燥 など</p>
<p>1月16日</p> <p>テーマ： 正月</p>	<p>日本の正月の行事を理解する</p> <p>母国の正月について紹介できる</p> <p>プリント、絵</p>	<p>1) お正月にしたことを話す</p> <p>2) 母国の正月を紹介する 旧暦の正月</p> <p>3) 「日本の正月」という文章をよみ、日本の正月について理解する 鏡餅 年神さま 門松 しめ飾り 元日 大晦日 おせち 初詣 大掃除 屠蘇などの読み方などを理解する</p> <p>4) 文法の勉強 ～より (駅よりの店) ～もたらず ～ばかりのいろいろな使い方 ～でも (ご飯でも食べに行こうか テレビでも見ようか)</p>
<p>1月23日</p> <p>テーマ： 外国人から見た日本</p>	<p>日本について自分の考え方を言える</p> <p>日本の社会の良さと悪さについて自分の考え方を伝えられる</p>	<p>1) 日本に来た感想を話し合う 最初の時 現在</p> <p>2) 日本のいいところを話す</p> <p>3) 日本の良くないと思ったところを話す</p>

	教材 2004 年度と 2002 年度の「外国人による日本語弁論大会」のスピーチ原稿	4) 日本に対する考え方を簡単な文章で書く 5) 「外国人による日本語弁論大会」のスピーチを読む(2004 年度 2002 年度) 6) スピーチに対する意見を話し合う
--	---	--

[実習の感想]

一年間の実習を通してたくさんのことを勉強した。まず自分が留学生であるため実習を通して新しい日本語の表現を覚えた。学習者に伝えるためまず自分で理解することで知らなかった表現を数多く覚えた。そして実習を通して一番得たものは人と喜びをともに享受することだった。

「受身と使役文を教えて欲しい」という学習者の要望を受けて、教材と練習問題を集めて次の週に共に勉強した。その次の週に学習者が授業の前に「昨日子どもに中国語を勉強させた」と笑いながら流暢に話していた。その学習者の喜びを見て私は嬉しかった。学習者の笑顔は私に使役文を使えるようになったよという喜びを伝えた。そのとき私は人に教える喜び、人のために考える喜び、そして人とともに喜ぶことを初めて感じた。

また学習者の状況を把握することの大事さを改めて感じた。学習者がいま何を一番知りたいか、なについて話したいかなどを踏まえて、学習者のニーズに合わせて教材とテーマを準備することの重要さを感じた。このことも学習者の一言からの考え方である。

前期の学習者であるCさんは後期来なかった。その理由を学習者の方Hさんは、「Cさんは大学院に行きたいから、読み書きの勉強や文法の勉強をしたかった、しかしこの教室は会話を中心に行っているから役に立たない、そのため後期は来なかった」と言っていた。この話を聞いて、学習者のニーズに応えること、学習者の立場に立って考えることこそ、人と共に喜ぶ教育だと感じた。

後期の授業記録（初級）と実習の感想

外国語学部英米学科 小田亜美

クラスの記録

月日・テーマ・担当	文型	語彙
10月17日 テーマ：自己紹介 担当：ハダー、竹川、小田	1) はじめまして。私の名前は～です。 よろしくおねがいします 2) お名前は？ 3) お国は？ 4) ～を貸してください。	
10月24日 テーマ：前回の復習 日本にいつ来たか 担当：村上、竹川	1) ○○の△△からきました。 2) いつ来ましたか。 3) ～年・ヶ月前にきました。	～週間前、～ヶ月前、～年前、日付の呼び方
10月31日 テーマ：家族、その日の朝食 担当：村上、幸得、松本、竹川	1) 私は～人家族です。 2) ～(妹)と～(弟)です。 3) ご家族は？ 4) ～を食べました。	夫、旦那、ご主人、旦那さん、妻、奥さん、子供、お子さん、こどもさん
11月7日 テーマ：昨日の出来事 担当：竹川、村上、小田	1) ～時に寝ました。 2) ～時に朝食・昼食・夕食を食べました。 3) ～時間テレビを見ました・勉強しました。 4) ～時に寝ました。 5) ～の勉強をしました。	時間や日付の言い方、数の数え方
11月21日 テーマ：過去の習慣 担当：竹川、村上、小田	1) ～の時、～をしていました。 2) ～時に起きていました。 3) ～時に朝食を食べていました。 4) ～時から～時まで学校で勉強しました。	寄宿舎、結婚式、運動 <質問のしかた> 何時に、どんな、何を
11月28日 テーマ：私の町・家 担当：村上、竹川、小田、佐原	1) 隣に～があります。 2) 近くに～があります。 3) 駅まで（歩いて、自転車で、車で）で～分です。 4) ここは～の部屋です。	家電製品・家具の名称
12月5日 テーマ：ファッション 担当：竹川、小田、ハダー	1) ～(服など)着ます・着ています。 2) 動作と状態の違い	衣類・アクセサリの名称 着る、脱ぐ、履く、かける、はずす
12月12日 テーマ：誕生日	1) ～から～をもらいました」	人形、縫う、誕生日パーティ

担当：竹川、小田		
12月19日 テーマ：自己紹介（新しい学習者が来たため） 担当：竹川	1)はじめまして。私の名前は～です。 よろしくおねがいします。	黄砂、かぜをひく、 お酒、居酒屋
1月16日 テーマ：冬休みにしたこと 担当：竹川、小田	1)～にいきました。 2)～をはじめました。 3)週に～日働きます。	アルバイト、隣、 紹介、面接、キッ チン、ホール アルバイト用語
1月23日 テーマ：各国の塾、アルバイ ト 担当：竹川、小田	1)～の近くで 2)～をしていました。 3)～をしにきます・しにいけます。	年女、年男、干支、 スクールバス

1. 保見ヶ丘日本語教室

1.1 日系人に対する見方

この保見ヶ丘日本語教室に行くまでは、日系人に対して少なくとも、偏見がありました。それを今考えると、日系人についてよく知ろうとせずにテレビなどで流れる情報のみで判断していたからだと思います。今ではテレビを見ていても、ほんの一部分しか見えていなかったのだと思い知らされます。

実習に行って最初にするのは保見団地の見学をすることです。ここで団地の大きさや、郵便受けの小ささ、車の多さなどを知りました。私がイメージしていたどこもかしこも汚いというのは吹き飛びました。確かに大量の粗大ゴミが一箇所に集まっている場所もありましたが、大きな団地があるとその周りの人たちも捨てに来るという状況はどこも同じようです。ただブラジル人がいるから汚いのではないのです。それをブラジル人がいるからと言って大きな問題にすることでもないと思います。この世の中には非常識なブラジル人も非常識な日本人もいるのです。しかしここで“非常識”という言葉が合わない気がします。その人にとっての常識が誰かにとっての非常識になりえるからです。この実習で学んだのは常識というのは自分だけのものだけということです。文句をつけるより解決策を考えたほうがとてもよいと思います。

私のバイト先にもよく日系人が来ますが、お酒を飲む場所なので酔ってうるさくなる場合もあります。それに対して、「あの人たち日系なんだよ。」と言われたことがありました。それを言った人は日系人に対して差別意識があったようです。同じようなことを白人がすると何も言わないのです。白人よりも日系人のほうが近いと思えるはずなのに、白人のほうばかりに目を向けている人が多いようです。

1.2 自分の立場

日本語教室での私の役割は先生として教えるのではなく、楽しく会話をするということです。母語ではない言葉で話すというのは大変なことだと思うので、日本語で話すときは楽しいという気持ちを大切にしたいと思います。楽しいと思えば日本語でもっと話したいと思ったり、少しでも積極的になれたりすると思うのでいつも心がけていたのは楽しくということでした。しかしそんなことを考えなくても、自然と楽しい雰囲気になっていたのはやはり教室の雰囲気がいいというのもひとつの要素だと思います。

楽しく話す中にも、学習者の方がわからないことがあればすぐにでも教えるのですが、その単語ひとつひとつについて説明することがとても難しいと感じました。今までで一番難しいと思ったのが“冗談”です。「おもしろいこと」「本当の話じゃないけど笑えること」などと説明しましたが私自身納得できませんでした。その時はクラス全体で冗談について説明をしましたが、すっきりとした説明ができませんでした。その時にすかさずSさんが辞書で調べて説明してくれたので助かりましたが、辞書がなかったらどうしていたのでしょうか。楽しく会話するだけでなく、単語を説明できる力もつけたいと思います。

2. 名古屋工業大学での日本語教室

名古屋工業大学では保見ヶ丘とは違って皆さん結婚している人が学習者でした。その分周りに知り合いがたくさんいるわけではないので、名工大での週に一回の授業は井戸端会議のように楽しくいろいろな話ができたらいいなと考えていました。ここではいろいろな国の人々と会えるのでひとつの話題で全く違った意見がたくさん聞くことができました。教育の違いに差があって面白かったです。インドのAさんは小学校から中学校までは寄宿制の学校に行っていたそうです。私はAさんが特別なのかと思っていたらほとんどの子供は寄宿学校に行き厳しい学校規律の中で過ごしていたそうです。韓国では高校になると朝と夕方に自習がありその間は授業で一日のうち半分は学校で過ごしているみたいです。小学校のうちは学校が終わると、塾のスクールバスが学校まで迎えに来てそのまま塾に行くそうです。中国人のLさんが外国で学んだわけではないのに、英語が話せるのは4歳からずっと英語を学んでいたからだそうです。ひとつひとつが大きく違って興味を持って聞くことができました。学習者には子供がいる人もいて日本の教育についても知ろうとしてくれて、会話のキャッチボールがよくできていたと思います。

4. 西保見小学校でのボランティア活動

いろんな「私」	矢野淑恵
教育サポーターをとおして学んだこと	加藤麻紀
保見小学校の子どもたちとの関わりの中で	清水めぐみ
PTA 祭りに参加して	松本奈津子

いろんな「私」

外国語学部英米学科 矢野淑恵

0. はじめに

私は2006年の5月から日本語教育実習の一環で、豊田市立西保見小学校へ1年間通うことになった。西保見小学校は、総人口9,149名、外国人住民4,110名（そのほとんどがブラジル人）が暮らす保見団地を校区としている。西保見小学校では、全校児童数が年々減少しているが、外国人児童数は着実に増加しており、2006年5月8日現在、全校児童数206名、うち72名が外国人児童（ブラジル籍69名、ペルー籍3名）で、全校児童の35%を占めている。そんな、西保見小学校の中でも特に「元気でおもしろい」（と私が思っている）学年、3年生（外国籍14名、日本籍17名）が私の担当となった。

ウキウキ気分で始まった私の1年は、楽しいことばかりではなかった。半年近く、私は、3年生のみんなに、「何で来たの？あなた誰？」と聞かれ続け、「知らない人、教育サポーターさん」と呼ばれ続けた。そして、「自分って何者？自分は何のために西保見小学校に来ているんだろう？」と自問自答した日々が続いた。そんな時、正直やめたいと思った。でも、約1年経った今、彼／彼女らの率直な問いが、「私」という存在を明確にし、私の活動に対するモチベーションをあげた。そのことについて話したいと思う。

1. 「教育サポーター」って何？ あなたは誰？

西保見小学校で活動が始まる前、校長先生から西保見小学校について、子どもたちについて、お話を伺う機会があった。校長先生は、自分の小学校のこと、生徒一人一人のこと、先生のこと、子どもの家族のことをありのままに話した。その姿に感動した。自分が小学校の時、校長先生が自分の顔を思い浮かべながら、自分のこと、家族のことを話していただろうか。答えは、NOである。校長先生とはあまり接点がなかったから、校長先生が自分のこと、ましてや家族のことを知っているとは思えなかった。「担任の先生方は大変でしょうけど、私は楽しんでますよ」。そんな校長先生の困難な状況でも楽しむ姿勢が、西保見小学校での活動を益々楽しみにさせた。

明日は、西保見小学校での一日が待っています。とにかく、人と対話することを大切に活動してこようと思っています。

伊藤校長先生が話してくれたことを、今度は自分の目で見、感じてきます。そして、校長先生のように自分の「言葉」で、西保見小学校のこと、先生のこと、子どものこと、子どもの家族のことを話せるように、これから一年活動していきたいです（メールでの感想；2006.05.10）。

子どもたちとの初対面の日、本当にドキドキした。「あー、これからどんな日が待って

いるのだろう」、不安と期待が入り混じった、そんな気持ちだった。子どもたちと「はじめまして」の挨拶をし、すぐ原学級で入り込み指導をした。子どもたちの顔から、「誰だよ、あいつ」「変な人が来たな」と思っていることがすぐに分かった。私は、「ま、初日なんだし、これから少しずつ子どもたちが私のこと受け入れてくれるようになればいいや」と思っていた。しかし、子どもたちが私を受け入れ始めたのは、それから半年以上経った頃だった。

さて、話を「教育サポーター」に戻そう。先生から言われていた、「教育サポーター」としてやってほしいこと。それは、1)子どもたちの注意を先生に向けさせること、2)放課（名古屋の方言で「休みの時間」の意）には子どもたちと遊ぶこと、3)比較的おとなしくしている子どもに注意を向けること、であった。そして、注意事項として「はじめと責任をもって活動すること」が付け加えられた。

新しい活動に取り組む時、誰でも何をしたいか戸惑うと思う。私も、自分が何をしたらいいのか、どの程度指導すればいいのか、どの程度「友だち」になればいいのか、戸惑った。先生のように指導すれば、「教育サポーターだろ。先生じゃないだろ。」と言われ、友だちのように接すれば、「うるさい、お婆さん。関係ないだろ。」子どもたちはなめてかかってくる。私の話に耳を傾けようとしめない。

また、子どもたちの姿勢を正したり、ちょっとでも話したら「そこ、静かにするように」と指導したりする自分に違和感を持った。「静かに黙っていることが美しいことなの？」「こんな小さなことで、怒る必要はあるの？」「もっと、のんびり子どもたちのペースでやらせるほうが、子どもたちの力が伸びるのに」。学校教育（今まで自分が受けてきた学校教育も含む）に対して、納得できない部分がでてきた。そのため、自分のやっていることに対して違和感を持ち、子どもたちに中途半端な自分で接することになった。

子どもたちは、そんな私の気持ちの変化をすぐ見抜く。自分が「教育サポーター」って何のためにあるんだろう、と考えていると、子どもたちは「ねえ、教育サポーターって何？何しに来ているの？」と聞いてくる。自分が自信をなくし、中途半端になっていると、子どもたちは「ねえ、最近何かあったの？顔が怖いよ」「矢野さん、最近かげ薄いよね」と言ってくる。

子どもたちの言葉は私の胸に突き刺さり、私は聞かれるたび、言われるたび、へこんだ。そして、自分にやれることって無いのかもしれない、そんなことを考えるようになった。

2. 私は「教育サポーター」 私は「やのとしえ」 私は「〇〇〇」

憂鬱な気分のまま、10月（後期）がやってきた。「教育サポーターって何だろう。」という悩みは、この時がピークだったように思う。10月の水曜日、朝早く起きたが、身体は動かない。小学校へ行って、子どもたちにまたあの「問い」を聞かれるかと思うと、益々身体が動かない。「今日は休もう。休んでリフレッシュして、また来週からいけばいい。」そんな甘えた気持ちが出てきた。すぐ先生に電話をして、体調がよくないということで休ませてくださいと頼んだ。電話を切った後、なぜか気持ちがすっきりしなかった。

気持ちをすっきりさせるために、リフレッシュするために、休ませてもらおうとしたのに、なぜかすっきりしない。「あー、また嫌なことから逃げている自分がいるよ。やるって決めたことでしょ？途中で逃げ出していいの？」もう一人の私が、「私」に聞く。「ここで悩んでいてもしょうがない！立ち向かえ、やのとしえ」そう思った私は、5分で準備をし、家を飛び出した。

この日、思い切って行ってよかったと思う。それまでもやもやして悩んでいた気持ちが、子どもたちの笑顔を見ると少し和らいだ。

それから、私は自分のペースを取り戻していった。自分がなぜ小学校で活動しようと思ったのか、その最初の動機を思い出した。私は、ただ「日本の教育現場」が見たかった。「今の子どもたち」について知りたかった。そして、「少しでも子どもたちが、私から違う感覚や視点を感じ取ることができれば」と思っていた。ただ、それだけだった。しかし、「教育サポーター」は、はじめと責任を持って活動しなければならない。自分の目的を忘れて、「教育サポーター」という肩書きに縛られていた。「教育サポーター」も先生のように振舞わなければならないと。

先生は子どもたちにとって、「先生」である。しかし、私は「先生」でない。子どもたちにとって私は、「お姉さん」であり、「おばさん」であり、「矢野さん」であり、「矢野」であり、「教育サポーター」であり、時に「先生」であり、「友だち」である。そんな様々な「〇〇〇」が子どもたちにとっての「私」なのである。

西保見小学校の「教育サポーター」は、子どもたちにとって、時に頼れる、時におもいきり遊べる、時にうっとりしい、等そんな様々な存在でいることなのではないかと考えるようになった。

3. 最後に

小学校の先生は、初めから私たち「教育サポーター」に、「先生」になれとはいっていない。ただ、時に「先生」となり、時に「友だち」になる、そんな間の存在になってほしいと思っていたに違いない。でも、私はその意味がよく分からず、半年以上悩み続けていた。なぜなら、「知らない人、教育サポーターさん」と呼ばれ続け、やっとのことで「矢野さん、矢野」と名前でもらえるようになったとき、「厳しくする必要はないのではないか」と考えたからだ。つまり、子どもたちにとって、不思議な存在、おもしろい存在だけでいけばいいと思った。でも、それは違った。子どもたちと私は、対等の友だち関係だけでいてはいけない。友だちなら他にもたくさんいる。ボランティアのお姉さん、お兄さんのように、1日、2日遊んでくれる友だちなら（ボランティアを否定するつもりはない。ただ「教育サポーター」の役割を明確にするために、ここでボランティアを出した）。私たち、「教育サポーター」は、1年を通じて、子どもたちの「教育」に携わらなくてはならないのだ。「教育サポーター」はそれを求められている（と私は考える）。

やっとな名前でもらえるようになったのに、また「先生」っぽく振舞ったら子どもたちに距離を置かれるのではないかと心配した。でも、それは違った。

子どもたちは、このいろんな「やのとしえ」と接することで、益々頼ってくるように、遊んでくるように、うっとうしいと言うようになった。先生の前では見ることのできな
い子どもの姿、それを掴み、それに合わせて、自分の存在を変えることができる「教育
サポーター」。私は、これぞ、学校が「教育サポーター」に望むことなのかな、と感じた。

こんな悩み多き、また変な「やのとしえ」に1年間関わってくれた子どもたちに感謝
する。そして、子どもたちも、この悩み多き、また変な「やのとしえ」に出会えてちよ
っとは幸せだったのではないか、と私は思っている。子どもたちが、これからも色んな
「教育サポーター」さんと出会い、色んなことを感じ、考え、学んでいったらいいなど
心から思う。1年間ありがとう、この言葉をみんなに送ってこのレポートを終る。

教育サポーターをとおして学んだこと

文学部児童教育学科 加藤麻紀

0. はじめに

私は豊田市にある西保見小学校で1年1組の教育サポーターとして実習をおこないま
した。実習は2006年5月から始まり、前期は毎週火曜日、後期は毎週金曜日に小学校に
行きました。

私の教室活動は授業中に子どもたちがわからない勉強の箇所を個別に教えること、姿
勢が悪い子どもの姿勢を正すこと、授業中に子どもが遊んでいたりと授業に集中す
るように促すことをしました。

そして、放課は子どもたちと外や教室で遊び、給食を一緒に食べて、掃除をして、下
校の時間まで子どもたちと過ごしました。

私の実習は2007年1月まででしたが、私が西保見小学校で教育サポーターとして感じ
ことを書きます。

1. 1ねん1くみの子どもたち

5月に初めて西保見小学校に教育サポーターとして1ねん1くみのクラスに入りました。
た。

担任の先生は鈴木先生という女性の方でクラスの子どものは全部で25人、その中で外国人
児童は8人（女の子7人・男の子1人）です。

初めてクラスに入ると、担任の鈴木先生から自己紹介の時間をもうけて頂きました。

子どもたちは私が話している間中、私の顔をじっとみていて、すぐに「かとうせんせい」「まきせんせい」とよんでくれました。初めて教育サポーターとして活動した感想は、授業中はまだ1年生になったばかりということもあるのか、授業に集中出来ない子が半分くらいいたように思いました。でも、先生が「こくご」の時間に『し』のつくものをいって下さい」というとみんな「はい！はい！」と元気よく手をあげ、「おんがく」の歌の時間では、体を動かす好きな歌は「もういっかいやりたい！」とどの子も元気いっぱいでした。

後期になると、勉強では「さんすう」のレベルが少し上がり、遅れをとってしまう子どももいました。友だち関係では女の子同士の持ち物トラブルがあって、担任の鈴木先生が仲裁して自分たちで「ごめんね」といいあい仲直りする場面もみられました。最初はどちらかというと消極的だったYちゃんとCちゃんも「せんせい、授業中に手をあげることができるようになったんだよ。でも、なかなかあててもらえないんだ」と私に報告してくれて、成長を感じることができました。

2. 1ねん1くみの外国人児童

外国人児童8人は全員ブラジル人の子どもです。顔は外国人でも、名字も名前も日本名の子どももいました。そうかといえば、日本人だとしばらく思っていた子どもが、ブラジル人だということがわかったりして、小学校に行くたびに様々な発見がありました。

外国人児童同士は学校の中ではポルトガル語を使ってはなしをしています。日本人の子どもとはなすときは日本語ではなし、子どもたちは使いわけているようです。鈴木先生は、ポルトガル語ではなししている外国人児童をみると、「みんなではなすときは、日本語ではなしでね。」といます。そのあと、「ポルトガル語ではなししていると、みんながなにをはなししているかわからないからだよ」と理由も説明していました。

外国人児童の8人の中で4人は「とりだし授業」といって、「こくご」「さんすう」だけ日本語教室にいて授業を受けます。原学級で授業を受ける外国人児童はある程度の日本語レベル能力があるということから日本人の子どもと机を並べ勉強をしています。

2.1 原学級の外国人児童Tちゃん

原学級のTちゃんは教室では裸足で、先生の話の聞いているとどうやら鉛筆をいつももってこないようで、他のブラジル人の友だちに授業中に席を立ってかりにいきます。Tちゃんは私や他の教育サポーターが授業に集中するように促しても「いや、いや」と言い、いすに長い時間座ることができません。あと、授業中に私が近づくと「せんせい、こないで」と強い拒否をします。最初、私は授業中にとっても嫌がるTちゃんの近くに寄ることができず、彼女との関係を放課や給食の時間に築いていこうと思いました。

Tちゃんは、だいたい放課は外に遊びに行かず、教室の中で一人だけで絵を描いています。わたしが「なにをかいてるの？」と近づくと「せんせいはさいしょからのなかまじゃないからだめ」といいます。恐らく、私が1ねん1くみに5月からきていることを言っているのだと思いました。

私はなるべくTちゃんと放課や給食や掃除の時間に話すように心がけると、しだいにTちゃんから家族のこと、兄弟のこと、好きな食べ物ことなど話してくれるようになりました。

勉強面では、彼女の「さんすう」のテスト結果をたまたまみる機会があって、基礎のたしざん問題ができていませんでした。恐らく、Tちゃんは私にわからないことを悟られたくないから授業中に近づくことを拒否していたのかと思いました。

2.2 原学級の外国人児童Jちゃん

原学級のJちゃんは日本語も不便なく話すこともできて、先生の出した課題も誰の助けもなくできる活発な子でした。

Jちゃんが「こくご」の授業の中で「みんなにつたえたいこと」を書くという時間に、「せんせいきて、きて」と私を何度も呼んできます。「わからない」と言ってくるので、授業の説明をもう一度したら「こうえん」と題をかいて絵をかきだしたので、私はいつも作業が遅れてしまう別の児童のもとにいきました。でも、何度もJちゃんが立って呼びにくるので、また机にいくと「日本語わからない」といって急にかんしゃくを起こして泣き出しました。何とかJちゃんが今度は題を「いえ」とかき直して、文にうつると目を見開いて瞬きもせず、歯ぎしりをしながら「せんせいかいて！」と言いました。そして鉛筆を何本も周りに投げ出しました。Jちゃんのこんな姿をみたのは初めてで、私はJちゃんとじっくりやっていこうと心に決め、隣につきました。

何度も途中、「にほんごわからない」「せんせいかいて」とにらまれながら、Jちゃんが「いえが好きなこと」、「おにいちゃんがいること」「Jちゃんが『おおきなかぶ』をよんでいるのをおかあさんがきいていたこと」など、なかなか全部は文にはできなかつたけどほぼ完成しました。

別の日では、Jちゃんが「さんすう」の文章題になると「わからない」、「こくご」の時間では、先生が「文の中で、フェリー（船）はどんな特徴があるか」というところに線をひいてね」と言われると「わからない」と私を呼んできました。Jちゃんの「わからない」は私に問題の答えを求めてくることでした。

「さんすう」では、文章題の中の『くり』ということばがわからないから始まり、私が教科書の絵を指しながら説明しだすと「わたし、ポルトガル語だからわからない」といわれてしまいました。

私はJちゃんに「くり食べたことある？」から始まり、「くり」の説明だけで授業が終わってしまいました。結局、Jちゃんは鈴木先生が板書した答えをまる写ししただけでした。

私はこのような様々出来事でJちゃんが原学級でどうしているのか疑問に思いました。ポルトガル語担当の藤本先生にJちゃんのことをきくと、学校に入る前に日本語が読めたことと、彼女がやればできる子なので原学級に入れて様子を見ていたとのことでした。原学級か少人数で基礎中心の日本語教室かどちらがよいのか判断も難しいものだと思います。

Jちゃんは今までの「こくご」の授業は文字をただ読むことをして、文字をうつすだけのことが多かったので、できていました。後期になると自分のことを日本語で表現すること、その文の趣旨を求められることが多くなりました。Jちゃんにとって、とても高度なことだと思いました。このことを通して、私はJちゃんが「さんすう」の基礎の計算は完璧にできていても、文章題になると「こくご」も同様に日本語の単語からわからないと進むことはできない現実を知りました。

3. 日本人児童と外国人児童

3.1 給食の時間

KちゃんとLちゃんと私と3人で給食の時間にはなしをしました。

Lちゃんは日本語があまり話せないけれど、「せんせい、ポルトガル語わかる？」ときいてきました。私が保見の日本語教室で教えてもらった挨拶と自分の名前と大きい、小さいなどの簡単な単語をいうと嬉しそうにポルトガル語の単語を次々いってきて、「これは知っている？」という感じでどんどん質問してきました。さすがに私が答えられずにいると、Kちゃんがポルトガル語で「大きい」「小さい」「犬」などの単語をどんどん言っていく、Lちゃんも「そうそう」といっていました。私はてっきりKちゃんは日本人児童だと思っていたので、あとから鈴木先生に「Kちゃんはブラジル人だったんですか？」と聞くと、「Kちゃんは日本人ですよ。両親も日本人ですよ」という答えが返ってきました。でも、彼女がポルトガル語をどこで覚えたのか不思議でなりませんでした。

3.2 掃除の時間 1

日本人児童Nちゃんがブラジル人児童の女の子が掃除をさぼって遊んでいると、ポルトガル語で「だめ」という意味のことばを大声で注意しました。それを聞いたJちゃんがとても怒って「ポルトガル語をつかわないで！」とっていました。

Jちゃんに怒った理由を聞いたのですが、「ポルトガル語は学校でつかってはいけない」みたいなこと言っていました。でも、彼女は学校でブラジル人児童同士ではポルトガル語でしか話さないのに、何でJちゃんがあんなに怒るのかよくわからなかったです。

あとから、Nちゃんに「何でポルトガル語でいったの？」ときくと、「Tちゃん（ブラジル人児童）が教えてくれた」と言っていました。

3.3 掃除の時間 2

掃除の時間にブラジル人児童のCちゃんとJちゃんがポルトガル語で楽しく話していました。その様子を見ていた同じクラスの日本人児童のKくんが「おれ、ポルトガル語わかんないから日本語で話してくれ」というと女の子たちは顔を見合わせてから、Kくん日本語で一生懸命に話していました。

4. おわりに

東京学芸大学の斎藤先生の講義の中で教育サポーターに求められるのは「先生でもな

い、友だちでもない存在」だとおっしゃっていた。まさにその通りであると思う。私が受けもった子どもたちは、1年生ということもあるのか、家庭でのこと友だちのことを放課や給食の時間に話してくれる子どもが多かった。そして、「頭がいたい」「耳がいたい」「お腹がいたい」など体調不良を私に訴えてくる子どもも多かった。しかし、「友だちでもない」という存在が一番難しいことだった。

子どもたちは、私のことを「友だち」に近い存在だから話してくれることもたくさんあったと思う。実習中盤になると、一部の女の子が私の胸をさわりだした。そして、私がトラブルおこしてしまう外国人児童のNくんとはなしをしていると、あとから男の子が「先生、もっと厳しく怒って」と私に言ってきた。私の存在を「先生」ではなく「友だち」に近い存在だということで、子どもたちの中で位置づけ始めたのかと思った。

私は斎藤先生の話聞く前は「だめなこと」は子どもたちに遠慮して真剣に話していなかったと思う。担任の鈴木先生からも「子どもたちがいけないことをしたら、私の授業をとめてもいいので大声でしかってください」といわれた。やはり、「だめなこと」は真剣に子どもたちに伝えないと、子どもたちにも伝わらないものだと思った。そう思ってから、子どもたちと勉強するときは勉強して、遊ぶときは遊ぶ、怒るときは怒るという自分なりにメリハリをつけた。そうすると、子どもたちも胸をさわったりすることもなくなってきた。

西保見小学校の子どもたち、1年1組の子どもたちは様々な文化や家庭の事情を抱えた外国人児童と学校生活を送っている。最初、私は外国人児童の教育サポーターとして実習するものだと思っていたが、現実には日本人児童、外国人児童を含めた1年1組の子どもたちのサポーターとしての実習だった。教頭先生は「本来の実習の趣旨とは違いますが、外国人児童だけではなく、日本人児童も含めて、これが西保見です。」と言われた。

鈴木先生から「さんすう」につまずいている子どもが、「まきせんせいがとなりにいるだけで最後までやれるようになりました。」という言葉もらった。あと少しでできるのに、つまずいてしまう日本人児童、外国人児童が1年1組にはいる。教育サポーターの存在は、クラス全体の授業はどんどん進んでいくが、つまずいている子どもの近くで待っていることのできる、安心できる存在でありたいと思った。

また、この実習を通して、子どもたちの身近な存在の教育サポーターだからこそ、日本人児童と外国人児童が学校生活の中で学びあう姿もたくさんみることができた。西保見小学校の子どもたちが小さい頃から外国人児童と机を並べて学び、遊び、話すことは日本、外国籍の子どもたちが成長したときに互いにとてもいい財産になることだと感じた。

そして、私自身も教育サポーターとして西保見小学校に関わった中で、子どもの教育、子育て、多文化社会を学ぶ場となり、考えるきっかけとなった。この経験をこれからの生活の中で生かせるようにしたいと思った。

西保見小学校の子どもたちとの関わりの中で

外国語学部フランス学科 清水めぐみ

0. はじめに

4月の最初の授業で豊田市の小学校で教育サポーターとして活動できると知ったとき、私は迷わず名乗り出ました。実際に小学校に入って外国人児童に対してどのような教育が行われているのか見てみたいと思ったからです。私は豊田市の南部に住んでおり、小・中・高と豊田市の学校に通っていましたが、私の小・中学校にはあまり外国人児童はいませんでした。学年に1人いるかいないかくらいだったと思います。今思えば外国人の児童に対する特別な措置は何もされていなかったと思います。日本語教育実習では東保見小学校のこぼの教室でも活動できると知りましたが、原学級での子どもの様子を見たいという気持ちから西保見小学校での活動を希望しました。私は教職もとっていたため4年次にも授業が多かったのですが、土屋先生や西保見小学校の先生方に配慮していただきました。そして2006年5月から毎週金曜日に西保見小学校に行くことになりました。

1. 西保見小学校5年1組

1.1 初登校（5月12日のメールをもとに）

朝の豊田行きは渋滞すると両親に言われ7時発。案の定渋滞で普段なら40分で行けるところ1時間以上かかりました。私が学校に着いたとき、既に校長先生は職員室に！びっくりしました。私は5年1組で田中先生というベテランの女の先生のクラスになりました。5年生は33人でブラジル人児童は4割くらいだったと思います。見た目や名前だけでは見分けにくいので、名簿にブラジル人児童はカタカナで名前が書いてありました。とても元気のいいクラスで、教室に入って自己紹介をした次の瞬間「しつもん！」と何人かの子が手をあげました。教室はすごい盛り上がりで、「身長は？」「体重は？」「好きな食べ物は？」などなど質問攻めでした。田中先生は質問タイムを7分と限定してストップウォッチを使ったり、うるさいときにはホイッスルを吹いたりしていました。教育サポーターと書かれた名札をもらい、ブラジル人児童、日本人児童関係なく授業がよくわからない子のサポートをしました。4時間目まで教室にいたのですが、そのあと田中先生が指導案を見せてくださいました。学級の事情を把握していたほうがいからとの配慮で貴重な情報を知ることができました。新しい環境で少し緊張しましたが、刺激の多い1日でした。これからも続けていきたいです。

1.2 誰がブラジル人？

初めて西保見小学校に行ったとき、5年生の名簿をもらいました。名簿をもらうとき田中先生に、「名前を覚えるのに役立ててください。ブラジルの子は名前がカタカナで書

いてあります。授業中、助けが必要な子のそばに行って説明したり質問に答えたりしてあげてください。」と言われました。カタカナの名前は4割くらいでした。私は早くみんなの名前を覚えようと、教室の椅子に貼ってある名前と名簿を照らし合わせていました。そして授業中はカタカナの名前の子を中心に机間巡視をしました。田中先生は「本当にわからなくて質問したい人だけ清水先生を呼びなさい。」と言いましたが、何人かの子が手をあげて私を呼びました。その中には名前が漢字の子（日本人児童）もたくさんいました。私は西保見小学校に行くにあたって「ブラジル人児童のサポートをするんだ」と思っていたのです。こし困ってしまいました。困ったことは理科室での理科の時間にもありました。椅子に名前シールが貼っていないため、誰がブラジル人なのかわからなくなってしまったのです。日本人の両親や祖父母をもつ子どもたちの顔は日本人によく似ています。彼らの国籍はブラジル、そして学校では（ブラジル人の友達同士で話す場合を除いて）ほとんど日本語を話し、名前も日本の名前（カタカナではありますが）です。このような子どもたちを見た目でブラジル人だと判断することはできませんでした。しかしその「困ったこと」は西保見小学校に行く回数が増え、私がみんなの名前を覚えたことと私自身の意識が変わったことでもう「困ったこと」ではなくなりました。意識が変わったというのは以前の「ブラジル人児童を・・・」というものから「助けが必要な子を・・・」という意識の変化です。私は今も西保見小学校に行っています。（2007年2月現在）授業中誰かが私を呼べばすぐにこの子のもとへ向かいます。もちろん、ブラジル人児童に配慮が必要なきはあります。そんなときはその子のそばに立っていてその子が出すサインを待ちます。サインは色々なかたちで表われます。手を挙げて呼ぶ場合もあるし、消しゴムで遊び始める場合もあります。今、私にとって西保見小学校5年生はブラジル人と日本人ではなく名前のある一人一人になっています。

2. ブラジル人児童の名前

2.1 私ユキエになる！

給食のとき、Mちゃんの椅子に「〇〇ユキエ」と書いてあるのを見つけたので、「Mちゃんの名前ってユキエっていうの？」と聞きました。Mちゃんは「うん。ユキエもある。でも中学校になったらユキエになるんだ。」と言いました。私が「でも友達みんなMちゃんって呼んでるよね。おうちでは何て呼ばれてるの？」と聞くと「みんなMって呼ぶ。でもユキエの方が普通でしょ。だから。」という返事が返ってきました。なぜそんな風にMちゃんが言ったのかそのときはわかりませんでした。12月になって道徳でいじめを取り上げたときの感想文を田中先生が読ませてくれたとき、Mちゃんがこの秋とても嫌な思いをしていたことを知りました。

[12月15日のメールより]

Mちゃんは夏休みの「未来のロボットコンテスト」で優秀な作品をつくり、豊田市で表彰されました。その表彰式のときのことです。「〇〇Mさん」と呼ばれ、壇上に上がる時、Mちゃんの後ろで知らないおじさんがこんなことを言いました。「M！？きいたことないぞ。そんな名前あるか？」Mちゃんはその言葉に深く傷ついて泣いて壇上にあが

れなかったそうです。その感想文に対する田中先生のコメントは、「先生はMちゃんにそんなことがあったこと知りませんでした。先生がそのおじさん怒ってあげたい。先生はMちゃんの名前本当に素敵だと思います。日本語の先生に聞いたらMという名前は『元気で明るくていろんなことを頑張るミツバチ』という意味があるんだってね。頑張りやのMちゃんにぴったりだと思います。」という内容でした。そんな素敵な意味があるなんて私は知りませんでした。子どもたちが教室から出て行ったあと、田中先生と少しこのことについてお話をしました。ちょうどMちゃんが「ユキエになる」と言っていたのが、その表彰式と時期的に同じだと思い出したからです。田中先生は今度Mちゃんとお話しようかな、と 言っていました。

2.2 漢字の名前

Mちゃんのほかにもブラジル人児童の中には自分の名前に対して何らかのコンプレックスを持っている子がいることも田中先生から聞きました。HくんとYくん（学校ではXくんと呼ばれています）は学校のテストにはカタカナで名前を書くのに、外部の人にみんなで手紙を書いたときは自分で漢字を考えて漢字で名前を書いたそうです。5年生の名簿をもらったとき、私はカタカナで名前が書いてあることがブラジル人だとわかる唯一の手段だと思いました。しかし、このようにカタカナで名前を表記することが外国籍の子どもが自分の名前にコンプレックスをもつ一つの要因なのかもしれません。また、12月に名古屋で行われたシンポジウムでは日本での就職に外国の名前が障害になると知りました。西保見小学校の子どもたちも将来、日本で就職をしようと思った時に名前が原因で就職できないのかもしれないと思うとすごく残念だしやるせないです。

3. 本を読むこと

3.1 Dちゃん

[12月8日のメールより]

今日の朝学は読書でした。Dちゃんはポルトガル語の本を読んでいた。私が、「それ、図書館の本？」と聞くと、「う～ん、学校の図書館で頼んで豊田市の図書館の本借りれる。」と言っていました。そんなシステムがあったなんて知りませんでした。その本は、三匹のこぶたに似た話らしく、私も読んでみようと思いました。たまにわかる単語がある程度でした。「難しそうだね」というと、「簡単だよ。子供用の本だよ。」と言われてしまいました。YくんやJちゃんも寄ってきて、私がお願いすると訳してくれました。

3.2 Jちゃん

Jちゃんは読書週間にたくさん本を読んだので表彰されました。私は表彰式の前の週、Jちゃんが教室で「赤ずきんちゃん」の本を読んでいたのを思い出しました。私がそばに行くと、「先生見て、この本。おもしろいよ。」と言うので、どんなところがおもしろかったか聞くと「このね、あかずきんちゃんの髪の毛。色が変わるね、あとクルクル。」と言っていました。その本の挿絵を見ると赤ずきんちゃんの髪の毛は赤、緑、黄色が混

ざったウェーブでした。Jちゃんの髪の毛は黒くて長いウェーブです。自画像を描いたときも黒いクレヨンで長いウェーブを描いていました。もしかしたら挿絵に興味をもってこの本を借りたのかもしれませんが。「おはなしはどうだった？」と聞くと「まだ全部読んでない。」との返事が返ってきました。Jちゃんは読書が大好きです。漢字はちょっと苦手だけど、授業中にわからない漢字があると「先生これ何て読むの？」と聞いてきます。漢字一字を書いて覚えようとしてもなかなか難しいけれど、大好きな読書を通して読める漢字を増やしていくといいなと思います。

4. むすびにかえて —教育サポーターとしての私と教師としての私—

私は今年（2007年）の4月から中学校で働くことになりました。正直に言って、西保見小学校に行き始めた当初は他の道も考えていましたが、子どもたちと毎週一緒に過ごしていく間に教師になりたいという気持ちがどんどん強くなっていきました。採用試験の合格報告をしたときは職員室の先生方も5年生の子どもたちもとても喜んでくれました。「先生、保見中に来て～！」と言ってくれる子もいました。今現在、勤務地はまだ決まっていません。保見中だったらまた西保見小の子どもたちに会えるかなと楽しみにしています。また教育サポーターとしての活動を通して西保見小学校で多忙な先生方の一日を見ることができました。（私が見たのはほんの一部かもしれませんが。）今までは教育サポーターという立場でしたが、あと数ヶ月後には教師として関わっていくことになります。豊田市の中でも保見は特別に色々な配慮がされていることも知りました。日本語指導の先生も常勤でいるし、教育サポーターも原学級に入っています。同じ豊田市でも私の住んでいる南部は外国人児童・生徒が保見ほど多くないので、特別な対応がされていないことが多くあります。また隣の知立市は一人の先生がいくつかの学校を担当しているのが現状です。この1年、毎週西保見小学校に行くのが本当に楽しみで、様々な行事を経るたびに成長していく子どもの姿を見てきました。また日本語教育実習という形で、西保見小学校以外にもAOTSや保見ヶ丘日本語教室など、普段見ることができない場所でもボランティア活動をする機会に恵まれました。これからも、日本語教育実習で感じてきたことや考えてきたこと、学んだことを活かしていきたいと思っています。

PTA 祭りに参加して

外国語学部フランス学科 松本奈津子

0. はじめに

この実習では、保見ヶ丘日本語教室以外に、外国人研修センターにいたり、豊田市の小学校を見学したり、一年に何度か、学校行事をお手伝いすることもありました。

私は、豊田市立西保見小学校で、PTA 祭りに参加しました。そこで出会った日系ブラジル人の方とお話をする機会があり、私にとって印象に残る一日となりました。

1. 家庭では

私が祭りのお手伝いに行くと、すでに保護者の方々が祭りの準備を始めていました。私は体育館でのゲームを担当しました。そこでは、日系ブラジル人の方とペアで仕事をしました。

ゲームの準備をしながら、二人で話をしていました。

彼女の旦那さんは日本人で、家では、子どもも彼女も日本語で会話をすると言っていました。私が「子どもさんはポルトガル語を話しますか。」と聞くと、「子どもはポルトガル語が分かるけど、あまり話さない。」と言っていました。

子どもたちはポルトガル語より日本語の方ができるそうで、時々ポルトガル語がおかしいと、少し悲しそうに話していました。また、彼女がポルトガル語で話しかけるのを嫌がるそうです。

しかし、日本の生活には満足しているとも言っていました。やはり、ブラジルにいる彼女の両親とあまり会えないので、寂しいときもあるそうです。それでも日本は安全で、便利で暮らしやすいと笑顔で話していました。

2. 外とのつながり

彼女は、夜勤の仕事をしているようで、職場での友達はあるが、その他ではほとんど友達がいなかったと言っていました。また、自分の日本語が下手だから恥ずかしい、と何度も言っていました。私は保見ヶ丘日本語教室の中上級クラスの人と同じぐらい上手だと感じました。

「日本語下手だから、恥ずかしいよ。」と言って、この日のような学校行事にもほとんど参加したことがなく、いつも旦那さんに任せていると言いました。

それからしばらく、祭りが始まるまで世間話をしました。日本語に自信がないから、銀行に行くのもあまり好きではないというお話や、保見団地のこと、私の大学生活のことなどを話しました。普段、仕事が忙しいこともあり、話し相手になる人が欲しかったのかな、と思いました。

彼女は、帰り際に私のところに寄ってきて、「また来る？ 楽しかった。」と言って帰

りました。私にとっては、話し相手をしていただけのつもりでしたが、その言葉を聞いて、私も嬉しくなりました。

3. 最後に

日本語教育実習の授業で、西保見小学校の先生に講義をしていただきました。その中で、小学校の現場の状況を聞くことができました。保護者のアンケート結果や、子どもの学校での様子を知ることができて、何が起きているかは理解したつもりでいました。

しかし、祭りのお手伝いで、講義であったような、日系の方の言語の悩みなどについて生の声を聞くことで、実感が沸き、急に身近に感じるようになりました。

この一年間、実習を通して、年齢、性別、国籍を問わずたくさんの人と話をしました。その内容は、特別なことではなく、本当に身のまわりで起こった小さな出来事や、自分の好きなこと、一日の過ごし方など、普段の私と、普段の皆さんとの会話でした。この会話の積み重ねで、相手の意外な一面に気づいたり、少しずつ仲良くなっていったりしました。

私自身「日本語教育実習」と聞いて、始めは何か大きなことをしなければならないと構えていました。しかし、実習を進めていくにつれて、素直に聞きたいことを聞いて、話したいことを話すという繰り返しが一番大切なことだったのだと気づきました。

始めは、祭りのお手伝いのために参加しただけでしたが、そこで、自分の聞きたいことを聞き、話したいことを話すことで、貴重なお話を聞くことができ、同時に話し相手になるという、小さなことですが、相手の方に喜んでもらったことが、私にとっては非常に心温まる経験になりました。

最後に、このような活動場所や、機会を与えてくださった土屋先生、保見ヶ丘のボランティアの皆さん、学習者の皆さん、小学校の方々など、多くの人々に感謝したいと思います。

5. 豊田市教育委員会「ことばの教室」でのボランティア活動

「ことばの教室」実習

大竹亜希子

ことばとは

幸得江美

「ことばの教室」実習

外国語学部スペイン学科 大竹亜希子

0. はじめに

「ことばの教室」は初めて日本の学校に通うことになった子どもたちが、日本語と日本の学校でのルール等を学ぶ JSL (Japanese as a Second Language) 的な特別クラスです。豊田市内にはたくさんの外国籍の子供たちがいます。その子供たちができるだけスムーズに日本の学校に入れるように支援しているのです。豊田市中の支援が必要な子供たちが東保見小学校内にある「ことばの教室」で学んでいます。この「ことばの教室」で学ぶ子供たちが原学級（本来所属するクラス）に戻っていく時間は、個人差も大きいのですが、だいたい4～6ヶ月程度です。この間に子供たちは原学級での学習についていけるだけの日本語をマスターし、学年相当の学力（主に算数と文字・漢字）を身につけ、日本の学校のルールを学びます。「ことばの教室」では小学一年生から中学三年生までが同じ教室で同じ先生について毎日朝の8:50から午後3:00まで学習しています。

1. 「ことばの教室」の子供たち

私が「ことばの教室」で実習を始めたのは2006年の春のことでした。毎週火曜日1時間目から帰りの会まで丸一日「ことばの教室」ですごします。実習を始めてすぐにこの子供たちはそれぞれ複雑な家庭環境におり、問題を抱えながら通ってきていることを知りました。最初に私が出会ったのはブラジルから来たばかりのCちゃんです。

1.1 Cちゃんの例

彼女は私が初めて「ことばの教室」に行った日に入室してきました。ブラジルから来たばかりの、とてもかわいらしい9歳の女の子でした。初めての外国の学校、知らない先生、知らない生徒、知らない言葉、初めてのルールの中、彼女はとても落ち着いて最初の日を過ごしました。賢く明るく、何も問題の無い子だったのですが、彼女は家庭がとても複雑で、ブラジルから一人、日本にいる祖父を頼ってきていました。Cちゃんのお父さんとお母さんは大学院に進学するため彼女を育てられず、日本に住む祖父のところに送ったということでした。しかしおじいちゃんは日本人の彼女がおり、その連れ子と三人で暮らしていました。Cちゃんはほぼ初対面のおじいちゃんと言葉の通じないおじいちゃんの彼女とその娘さんと生活していたのです。まだ小学校三年生、親元を離れて外国で一人知らない人たちに囲まれて寂しい思いもしたのかもしれませんが、学校ではまったくそんな様子を見せず、クラスで一番しっかりと宿題をし、とても早く日本語も覚え、やんちゃで先生に怒られるくらい元気にすごしていました。とても私の強い子でもあって、先生と衝突したり泣いたりしてしまうこともよくありました。しかしもうすぐ原学級に戻れるというところまで来た時、急にブラジルへの帰国が決まったので

す。お世話になっていたおじいさんが面倒を見切れないということでブラジルに帰ることになったのですが、そのときには彼女のブラジルの両親は離婚して、それぞれまったく違う地域に住むようになっていました。Cちゃん自身は「私ブラジルに帰るんだよ！お母さんと暮らすんだよ！」と嬉しそうに話していましたが、「ことばの教室」のラウラ先生は複雑そうな顔をして「あれくらい頑固で賢い子だからやっていけるんだろうね」とおっしゃっていました。

1.2 S君の例

S君はフィリピン人の両親の間に生まれました。でもお母さんは日本人と再婚し、日本へやってきました。S君には血のつながっていない日本人のお兄さんと、小さな弟たちがいました。彼は二年生でとても人懐っこく、「ことばの教室」にきたその日から友達をたくさん作り楽しそうに通ってきていました。しかしすぐに遅刻・欠席が目立ち始め、しばらくすると満足に学校に来ないようになってしまいました。「ことばの教室」は東保見小学校内にあるのですが、豊田市中から支援が必要な子供たちが通ってきています。家が遠い子供達は必然的に保護者の送り迎えが必要になってきます。S君の場合はこれが問題でした。S君に話を聞いてみたところ「お父さんとお兄ちゃんは夜仕事して朝はお酒を飲んで寝てる。だから運転できない」との事でした。そのうちに彼は「送り迎えができない」との理由で「ことばの教室」を辞めてしまいました。

1.3 Mちゃん・L君姉弟の例

Mちゃん・L君もS君と同じような状態にいる姉弟です。二人とも元気よく通ってくるのですが、お母さんの仕事の関係でどうしても朝決まった時間に学校へくることができないのです。「ことばの教室」では1時間目は算数、2時間目は文字・漢字、3・4時間目は日本語の勉強と、毎日同じ時間割で学習しているのですが、この二人は学校に着くのが3時間目に入ってからの方が多いため、どうしても算数と文字・漢字の勉強が遅れてしまいます。二人よりも3ヶ月遅く入った子供たちに追い越されそうになっており、これではいつ原学級に戻れるのか分かりません。

1.4 Qちゃんの例

Qちゃんは14歳、日本の中学2年生に相当する年でした。彼女は2歳の頃から日本に住んでいたのですが、両親が「日本の学校はお金がかかる」と思っていたため、この年になるまで学校には通っていませんでした。自宅学習のような形で算数や簡単な読み書きはある程度身につけていましたが、学校へ行っていなかったためか、最初は集団生活に慣れていないような印象を受けました。しかししばらくすると「ことばの教室」の中のお姉さんの存在になり、小学生の子供たちからとても慕われ、笑顔もできるようになりました。秋にあった学芸会でもリーダー的役割をしっかりと果たしていました。

2. 保護者

これらは「ことばの教室」の子供たちの一部の例です。全ての例に共通しているのが「保護者」です。学校に送り迎えしにくる保護者の方たちを見ていると子供たちに対するあふれるような愛情を感じます。しかし子供たちの保護者の多くはお金を稼ぐために日本へ来ているため、共働きの家庭が多く、仕事の時間も夜間だったり早朝だったり、さまざまです。日本にいる最大の目的が「働くこと」であるので、どうしても子供の教育に重きがおかれないう傾向にあることは事実です。ブラジルでは「学校は必要最低限行って卒業さえできればいい」という考えが一般的であると、以前ブラジル人の友人から聞きました。それに加えて、「いつか国に帰るから」ということで子供を学校に入れなかったり、「この滞在は一時的なもの」だから保護者も子供も「どうして日本語を学ばなくてはいけないの？」と感じていたりするようです。「ことばの教室」のように直接子供たちを支援する施設も勿論ですが、もっと根本的なところで保護者が子供の将来も考えられるよう、子供の将来にとって何が大切なのかを選べるよう支援していくことも大切だと強く感じます。

3. 実習生の役割

私が「ことばの教室」で実習を始めたのは春でした。始めた頃は大変忙しいという「ことばの教室」の先生方を助けて出来るだけ役に立とう、たくさんのことを学ぼうと、意欲に燃えていました。しかし実際に行き始めてみると思っていたように事は運ばず、不安になることが多くなりました。「ことばの教室」の先生方は年齢も日本語力もまったく違う子供たちを一度に相手にしなくてはならないので一日中てんでこ舞いをしています。そこに私が入ったわけですが、先生でもなければ先生になる練習もしてこなかったので最初何をすればいいかわからず、戸惑いながらいちいち先生方の指示をあおいでいました。私が何をすべきなのか、どのように子供たちを指導していくべきなのかをその都度私に教えなくてはいけないことが、逆に先生方の負担になっているかもしれないと思った私は、せめて先生方の事務仕事を少なくしようと、休み時間などに進んでテストの採点や宿題のチェックなどをしていました。しかし「自分の存在が先生方の負担になっているのではないか」という不安は秋頃までつづき、自信をもてないまま「ことばの教室」に通う日々が続いていました。私も子供たちもお互いになれ始め信頼関係ができたのが、夏から秋にかけてのことだったと思います。この頃から子供たちから相談を受けたり、好きな子のことなど、内緒話を打ち明けられたりするようになりました。私自身も子供たちが慕ってくれるのが、そして一緒にいるのが楽しくなり、休み時間になると子供たちと校庭に飛び出して鬼ごっこや縄跳びをして遊ぶようになりました。そんな中、私に自信を与えてくれたのがラウラ先生の一言でした。「大竹先生が来てくれると子供たちが嬉しそう。これからも子供たちと一緒にたくさん遊んであげてね」と言われたのですが、その瞬間自分が「ことばの教室」で何をすべきかがはっきりわかりました。私に求められていたことは、できるだけ子供たちとコミュニケーションをとることだったのです。子供たちは、家に帰っても保護者の方が家におらず、一人きりや兄弟だけで過ごすことが多いのです。忙しい先生方に代わって私がその子供たちと思いきり遊び、話

を聴き、日本語で会話をする事は、子供たちの日本語学習面でも、精神面でも役に立つことだったのです。一緒にいるだけで、普段は年上の「お姉さん」とあまり接することのない子供たちにとっては貴重な体験になるのだと思います。また、先生たちには言えないことや、休み時間の子供たち同士のトラブルなども、いつもそばにいる私から先生たちに報告することもできます。いつかMちゃんが校庭で遊んでいたとき怪我をして泣き叫んでいたのを子供たちは私に真っ先に報告してくれました。このように、自分が何をすべきかがはっきり分かってから、私は自信を持って「ことばの教室」に通えるようになりましたし、思いっきり子供たちと接することができるようになりました。「実習生」だからこそ、出来ることのあるのだと、気が付いたのは本当に大きな事でした。12月、卒論提出のため忙しくて「ことばの教室」を1ヶ月ほどお休みしたのですが、1月になって復帰したとき、子供たちが「大竹先生！」と飛びついて迎えてくれました。「今日大竹先生が来るよって朝子供たちに話したら、わーい、って大喜びしたんだよ」とラウラ先生にも言われ、実習先にここを選んでよかったと心から思いました。

4. 卒業した子どもたち

「ことばの教室」を卒業した子どもたちが元気に原学級でがんばっている姿をみるのは、私にとってとてもうれしいことです。休み時間などに「大竹先生だ！」と校庭で私を見つけて駆けてきてくれる元「ことばの教室」の子どもたち。「これ僕の友達」と、新しく出来た友達を紹介してくれた男の子もいました。秋の終わりには東保見小学校の学芸会があり、私も行ったのですが、舞台の上で卒業していった子どもたちがいきいきと演技しているのを観ることができました。何ヶ月か前までは言葉もほとんど分からずどこちなかった子どもが舞台の上で立派に日本語で演技をしているのです。きっと「ことばの教室」の先生方にとってうれしいことだったろうと思います。他の小学校や中学校に行った子どもたちの様子もとても気になります。将来、この子どもたちに「ことばの教室に大竹っていう先生がいたな」と思い出してもらえれば、これほど幸せなことはありません。

5. さいごに

「ことばの教室」にはいろいろなところから違った家庭環境と背景もった子供たちが入室してきます。「ことばの教室」はすばらしい先生方に恵まれています、それでもたった三人の先生方で多様な状況にある子どもたちに十分対応していけるものではありません。「ことばの教室」を子供たちにとっても、社会にとってももっと充実したものにするためには行政の力が今後さらに必要だと思います。先生方の待遇改善もその一つでしょう。それから送り迎えが困難だという理由で教室をやめざるを得ない子供がこれ以上でないように、教室の数を増やしたり、バスを出したりすることも考えなくてはならないと思います。財政的なこともあり厳しいかもしれませんが、入学前に数ヶ月だけでも「ことばの教室」で学ぶことが出来れば子どもたちのその後の学習力が大きく違ってきます。将来のことも考えれば子どものためにも社会のためにも今問題を解決していくこ

とが必要だと思うのです。「ことばの教室」は全国でも一番進んだシステムだと聞きます。しかしその教室でさえもまだまだ改善していかなくてはならない面はたくさんあります。これからは「ことばの教室」が市の事業になるということです。今抱えている問題を乗り越えて、子供たちとその保護者にとってよりよいシステムとなることを祈っています。

ことばとは

外国語学部フランス学科 幸得江美

0. はじめに

「ことばの教室」とは、一体誰が名付けたのだろうか。始めてこの名前を聞いた時、なんとなく違和感があった。小学校の教室は、「1年1組」といった名前が付けられている。その中で「ことばの教室」とは一体どんな教室だろう。塾なのか、それとも何か特別なクラスなのだろうか……。しかし約6ヶ月間、「ことばの教室」でボランティアとして通い続けた今、この教室を名付けた人の気持ちが分かってきたような気がする。このレポートでは、ことばの教室で出会った子ども達との日々を振り返り、彼らから学んだことを記録したい。一体何故、ある人は「ことばの教室」と名付けたのだろうか……。

1. ことばの教室との出会い

2006年5月19日、東保見小学校を見学させてもらった。いくつかの学年とクラスを見学した。校内の掲示物は全て日本語とポルトガル語で表記されている。そして、校内を歩いていると、多くの外国人の生徒とすれ違った。自分の小学校時の環境と比較をして、その違いに驚くことばかりだった。そしていよいよ「ことばの教室」へ。教室に一步入ると、生徒が元気に手を挙げて、自分を当ててくれと、先生に必死にアピールしている光景を目にした。歌を歌いながら、日本語や算数を覚えている。そして、教室を3つに分けて3人の先生がそれぞれで授業をしていることにも驚いた。「教室が生きている！」これがことばの教室の第一印象である。

2. 実習開始

6月初旬、就職活動も一段落つき、今しかできない様々なことを経験したいと考えていた。この日本語教育実習は、先生方をはじめ多くの方たちのお陰で、私達は恵まれた環境を与えられている。その機会を利用しなければ本当にもったいないと思う。あの時

見学した「ことばの教室」が頭から離れられず、土屋先生にお願いをして、ことばの教室に実習をさせてもらうことになった。

実習初日、どんなことが待っているのだろうか、楽しみだった。しかし一方で、実際私に何ができるのだろうかという不安もあった。ラウラ先生をはじめ、先生方は私を温かく迎えてくださった。部外者の自分が入っても大丈夫だろうかという不安もあったため、先生方の温かさに感謝した。

2.1 実習前半

第一印象と変わらず、ことばの教室はイキイキとしていた。生徒達一人一人も元気が良い。その中でも、T君と仲良くなった。教室のクラス分けでは、上級者であった。ある日、クラスの女の子（入室間もない）が私に話しかけた。「せんせい、○△*☆・・・。」ポルトガル語が分からない私は、彼女の訴えが分からない。「ごめんね、先生ポルトガル語、分からないんだ。」この言葉も彼女には通じない。日本語が分からない彼女、ポルトガル語が分からない自分。どうしよう、ラウラ先生に助けを求めようか……。すると、T君が「先生、この子、トイレに行きたい。でも、トイレの使い方、わからないって。」と通訳をしてくれた。ありがとう、T君！

私は大学で、フランス語を専攻している。そのため、ポルトガル語は分からない。両言語で似ている部分もあるが、彼女のように流暢に話されると理解できない。ポルトガル語に近い、スペイン語を専攻していれば、と実習中に何度も感じた。自分でも少しずつポルトガル語を勉強したりしてみたが、まだまだだ。

T君は、思いやりのある優しい男の子。T君に限らず、この教室では、入室期間が長い生徒は、新しく入ってきた生徒に、お兄さんやお姉さんの役割をする子が多い。生徒の入れ替わりが著しいこの教室でも、他の生徒に目を配り、その子が困っていたら、思いやりのある行動をとれる力を、生徒達は自然に身につけていくのだ。それは、この教室や学校で、誰もが味わうであろう、日本と自分の国の文化や生活習慣の違いに対する戸惑いや困難さを、みんなが理解できるからではないだろうか。その一つの例が、次に紹介する私に話しかけてくれた彼女の場合である。

彼女は、和式トイレの使い方が分からなかったようだ。お互いに言葉が通じないために、ジェスチャーで意思疎通をはかった。私は、上履きを脱いでトイレ用のスリッパに履き替えるところから、和式トイレの使い方全てをジェスチャーで説明した。私の一つ一つの行動に、彼女は真剣に見て相槌を打ってくれていた。この教室にいる子ども達は、日本語に限らず、生活の仕方にも分からないことが多い。そのことを、私に教えてくれた最初の出来事だった。

T君はその後、ことばの教室を無事に卒業していった。仲良くなった頃に、みんな卒業してしまう。このように、会えなくなって寂しくなる経験を何度としたけれど、このお別れは、彼らがこの教室で頑張った成長の証であるため、これからの彼らを応援していきたい。

次に紹介する二人の生徒も、私に多くのことを教えてくれた。V君とCちゃんである。

私が実習を始めた頃と同時期に、彼らも入室してきた。日本語は全く分からない状態である。V君は、他の子よりも入室日や学年がずれていて、勉強の進行度合いも違う。そのために、V君に合わせた勉強をしていた。私はしばらく、彼を担当した。しかし、授業中に落ち着きがなかったり、集中が切れてしまったりで、どのように気を引こうかと必死だった。集中力を切らさないために、同じ教え方を避け、先生の教え方を参考にいくつかのバリエーションを考えた。しかし、終わりのチャイムが鳴ると、一目散に前に立ち「キリツ！レイ！これで、〇〇のべんきょうをおわります！」と、元気よく言った。この日本語はしっかり覚えているという、可愛い一面も持っていた。先生は、彼はADHD（注意欠陥・多動性障害）の兆候があるかもしれないとおっしゃっていた。彼の行動や勉強の進行度合いはしばらく変わらずに、夏休みに入った。大丈夫かな、V君……。

Cちゃんは、小学校の低学年。年齢の割に大人っぽい生徒だった。算数や日本語を教えようと彼女に近づく。すると、すごい剣幕で睨みつけられる。また授業中で、先生に当てられて上手く答えられなかった時、彼女はずっと頭を下げて泣いていた。彼女は人一倍負けず嫌いで、頑張り屋さん。だからこそ、サポートして彼女の力を伸ばしてあげたいと思うが、なかなか彼女に近寄ることができなかった。そして、夏休みに入った。

2.2 実習後半

いつからだろう。早朝の眠気を覚ますために、ガムを噛みながら歩いていた小学校までの道のりを、今日の目標や子ども達のことを考えながら歩くようになったのは。今日は〇〇ちゃんにこうやって話しかけてみよう、以前先生が教えていたように、教えてみようかな、〇〇君は学校に来てくれるかな……。実習の初めから抱いていた、自分の役目が何か分からない焦り、自分の居場所が見つけれない不安、自分は先生方の迷惑になっていないかという気持ち。これらの気持ちを解決するためにはどうしたらいいかを考えていたら、眠気覚ましはいつの間にか、ガムから、子どもの気持ちを考えることになっていった。

子どもの立場にたち、気持ちを想像することで、自分から彼らを理解していこうと思った。自分の周りの人が聞いたことのない言葉を話している環境に、子どもの頃におかれたら、V君に限らず、誰もが戸惑うに決まっている。その戸惑いを、V君は他の子よりも素直に表していただけなのだ。私は、フランス語を勉強したいという自分の意思で、外国語を勉強した。しかし、この教室に通う子ども達は私のような自分の意思ではない。自分の意思で行動するか、そうではないかの違いは大きいと思う。

Cちゃんも、勉強を理解したり自分の気持ちを言いたいけれど、日本語では理解できないし上手く伝えることができない。このもどかしさが、彼女から可愛い笑顔を奪い、その代わり涙を流した。この頃の彼らにとって日本語とは、ことばとはどんな存在だったのだろう。日本語を嫌いになって、勉強することを諦めてしまったらどうしようかと不安になった。

しかし、夏休みが明けて大きな変化があった。V君は夏休み前よりも、日本語をたくさん話している。しかも、授業にも楽しそうに参加し、誰よりも元気よく手を挙げて発

言している。そして、授業中も落ち着いてきた。彼の変化に驚いた。夏休み中に、何が起こったのか……。彼に力を与えたものを、授業中にも見つけた。それは、生徒を温かく見守るラウラ先生の存在である。ラウラ先生は授業中、V君を他の生徒の誰よりも褒め称えた。彼が発言する度に「V君すっごいね！」と拍手をした。褒められて伸びるという、彼の性格をラウラ先生は分析したのだろう。

ことばの教室の先生方は、一人一人の生徒の長所・短所を把握している。そして、長所を伸ばそうとする先生方の姿勢を見習いたいと思った。生徒を温かく見守る先生方のおかげで生徒達は、初めは辛いであろう日本語の勉強を諦めずに、無事にことばの教室を卒業していく。かつて抱いていた自分の不安は、どこかに消えてしまった。

V君は日本語をどんどん身につけ、授業も楽しくなり、初めの戸惑いが薄らいで、落ち着いてきたのではないだろうか。「ちがうよ、これは〇〇だよっ！」と、他の生徒に教えている彼の姿を見て、子どもの成長は無限だなと感じた。

ある朝、教室に入った私を見て、「せんせい、おはよう！」と一番にあいさつをしてくれたのは、Cちゃんだった。この頃から、彼女も日本語を多く話すようになり、眉間にしわを寄せることが減り、笑顔が多くなった。近寄る私を睨み付けていた彼女は、話しかけてくれるようになった。

V君は無事にことばの教室を卒業していった。Cちゃんは、あともう少しで卒業というところで、家族の事情により急遽ブラジルに帰国することになった。日本に戻ることは未定だそうだ。Cちゃんのように、家族の事情で帰国をしたり、ことばの教室に通えなくなる子どももいる。辛く悔しい思いをしながら身につけた日本語は、この先どうなってしまうのだろうか。この教室で過ごした時間は、彼らにとって何だったのだろうか。子どもには何の罪はない。親や家族の事情で、他国の日本に来て、また家族の事情で帰国する。不安定な環境の中で育つ子どもがいることを目の当たりにした出来事だった。

3. まとめ

「ことば」とは一体、何だろう。普段何気なく使っている「ことば」とじっくり向き合う時間を、この実習は与えてくれた。そして、ことばの教室で出会った先生方や生徒達から多くのことを学んだ。授業や本で知った出来事を、この教室で実際に直面した。

「ことば」とは、生きる力ではないだろうか。彼らは、ことばによって支えあい、ことばという壁に直面し、時には悔しい思いをした。しかしそれを乗り越え、ことばによって自分に自信を与えた。

「日本語を勉強することは、目的ではなく手段です。」と、ラウラ先生はある講演でおっしゃった。ことば（日本語）を身につけ、その子らしい人格形成をし、強く生きていくことも、ラウラ先生は子ども達に教えている。

この教室で過ごした日々を、これからの生きる力にしてほしい。日本でもブラジルでも、将来どこで生活することになっても、この「ことばの教室」で学んだことが、かけがえのないものになることを、教室を名付けたある人は願っていたのではないだろうか。

最後に、実習をコーディネートしてくださった土屋先生を初め、ことばの教室で温かく私を迎えてくださったラウラ先生、てるみ先生、マルシア先生、子ども達に心から感謝しています。

【第2部】

2006 年度日本語教育実習年間記録

2006 年度日本語教育実習年間記録

2006 年度日本語教育実習担当 土屋千尋

1. 日本語教育実習について

A. 週 1 回の授業時間内におこなう教室内活動

-実習の準備, e-mail 報告についての討論-

2006 年度の授業は、月曜日 4 限目 (14:30~16:00) および火曜日 7 限目 (19:30~21:00) であった。月 4 限目と火 7 限目の授業の内容は、基本的におなじである。したがって、夜間主コースの学生が 5 限目を、昼間主コースの学生が 7 限目を受講してもよい。

B. 日本語教育関係機関（下記の実習先を含む）の見学, 他機関研修会参加

C. 実習：実習先と活動内容は以下の表のとおり

	実習先	実施期間	概要	参加状況
	NPO 法人保見ヶ丘国際交流センター主催「保見ヶ丘日本語教室」※1	毎週日曜 10:00-12:00 通年	入門・初級・中上級・子どもクラス, 1年4ターム。実習生全員が日程を調整の上、都合がついた日に、参加し、教室運営。 ※担当教員は指導者&ボランティアとして毎週参加	全実習生 (24名) が参加
豊田 市 保見	豊田市立西保見小学校 (全児童の 35%が外国人児童)	8:30-放課後	実習生全員が学校見学。 希望者が教育サポーターとして在籍学級に「はいりこみ」指導。学校行事には、実習生および担当教員はボランティア参加。※担当教員は学校アドバイザー (豊田市教育委員会より委嘱) をつとめる。	毎週きまった曜日に実習生 4名
団 地	豊田市立東保見小学校 (全児童の 30%が外国人児童)	8:30-放課後 通年	実習生全員が学校見学。 希望者が、国際学級(とりだし授業)および「ことばの教室」(豊田市教育委員会主催、豊田市内に在籍する来日してまもない児童・生徒に対する初期指導をおこなう)にティーチングアシスタントとして参加。	毎週きまった曜日に実習生 2名, 実習修了生 1名が参加
	(財) 海外技術者研修協会中部研修センター日本語研修コース日本語ボランティア ※2	平日の夜 土曜の午後 日曜の午前	実習生全員が日本語研修コースの授業を見学。 1年6期(1期6週間)の日本語研修コース開催中にひらかれる日本語ボランティア教室(2名以上)に参加。	全実習生 (24名), 参加

名古屋工業大学国際交流 センターボランティア日 本語教室(終了後,センタ ー長名で感謝状授与) ※3	毎週火曜 10:00-12: 00 通年	希望者が2人以上でグループになり,留学生の家族 を対象とした日本語クラスを担当。	実習生3名が 常時参加(不定 期で他の実習 生が参加)
--	-------------------------------	---	--------------------------------------

※1 NPO 法人保見ヶ丘国際交流センター主催「保見ヶ丘日本語教室」

保見ヶ丘日本語教室は、NPO 法人保見ヶ丘国際交流センターが、豊田市北部にある保見団地の第二集会所で、毎週日曜日 10:00~12:00 にひらいている日本語教室である。保見団地は入居者数が全部で約 9,200 人ほどのおおきな団地であり、その内の 4,000 人が外国人住民で、そのほとんどがブラジル人である。外国人住民のおおきは自動車関連等の製造業に従事する工場労働者である。NPO 法人保見ヶ丘国際交流センターは、その保見団地で、日本語教室を核としてボランティア活動をしている団体である。センターは、保見団地でおこっている様々な問題が単なることばの問題ではないことをふまえ、多様な背景をもった人々がおたがい気もちよくくらししていくために、一緒にかんがえ、行動していくことをめざして設立された。センターでは、週 1 回の日本語教室開催の他、生活相談、通訳・翻訳、フェスタジュニーナ（ブラジルのお祭）自治会や地域の人々とのイベント共催など幅広い活動をおこなっている。実習担当者の土屋は、当センターの会員であり、ボランティア活動をおこなっている。

※2 AOTS(= (財) 海外技術者研修協会) 中部研修センター (豊田市貝津町向畑 37-12)

AOTS(The Association for Overseas Technical Scholarships)は、民間企業の技術研修生（発展途上国の技術者）のうけいれ事業をおこなっており、東京都、横浜市、大阪市、豊田市の 4 カ所にセンターがある。豊田市のセンターを中部研修センターという。各センターで会社へいく前の事前研修や、品質管理、生産管理などの管理研修をおこなう。センターでは、1・2・3・6 週間コースがあるが、日本語学習は 6 週間コース（1 週間研修旅行をふくむ）参加者に対して、おこなっている。この 6 週間コースは年に 6 期開講される。中部研修センターでは、この 6 週間コースの研修生を対象に、ボランティア日本語クラスがもうけられている。コース開始前に、実習生の代表者がボランティア希望者の活動希望日と授業テーマをとりまとめ、センターにしらせる、それをセンターの研修課日本語班の先生方が調整をおこない、研修生にしらせ、クラス参加者を募集して下さるといいうしくみになっている。

※3 名古屋工業大学の留学生の家族に対する日本語ボランティアクラス

名古屋工業大学では、留学生の家族を対象に日本語ボランティアクラスが開設されている。名古屋工業大学国際交流センターがそのコーディネートの任にあたり、そのクラスのひとつを本学の日本語教育実習生が担当させていただいている。

2. 外部講師をまねいての特別授業

5月8日（月）

「外国人児童教育理解のために-夢と希望を持って学ぶ西保見っ子の育成」

菱田洋美（豊田市立西保見小学校教頭）

5月9日（火）

「外国人児童教育理解のために-夢と希望を持って学ぶ西保見っ子の育成」

伊藤哲也（豊田市立西保見小学校校長）

12月4日（月）

「外国人児童生徒の教育の実際」

齋藤ひろみ（東京学芸大学教育学部）

12月19日（火）

「外国人児童生徒の教育の実際」

松本一子（NPO法人子どもの国）

1月16日（火）・1月22日（月）

「日本語テスト問題のつくり方」

宇佐美洋（独立行政法人国立国語研究所）

3. 日本語教育実習受講条件

(1) 日本語教員課程基幹科目のうち、日本語学（1）・（2）・（3）から8単位以上、日本語教授法（1）・（2）を8単位、計16単位以上修得したもの

(2) 学研災付帯「インターンシップ・教職資格活動等賠償責任保険」への加入

「インターンシップ・教職資格活動等賠償責任保険」は、インターンシップ、教育実習、保育実習、ボランティア活動、介護等体験活動中におきた災害事故に対して適用される保険である。この保険に加入するためには、まずは、学研災（＝学生教育研究災害傷害保険）に加入することが条件となっている。

4. 実習にあたっての留意事項

-活動を常に記録し、自分が何をしたかを客観的に分析し、考察すること

-すべての実習はe-mailで他の実習生、教員に活動報告をおこない、情報の共有をすること

-実習には2人以上で参加し、不測の事態がおきた時、たがいに協力して対処すること

昼夜開講制を導入している本学では、実習の授業も昼夜それぞれに開設されている。昼夜両クラスの成果を共有すると同時に、さまざまな学科に所属する実習生同士の連携をふかめるため、メーリングリストを活用している。

2006 年度日本語教育実習報告書

2008 年 3 月 27 日発行

愛知県立大学日本語教員課程

土屋千尋（現 帝京大学）

東弘子・宮谷敦美

〒480-1198 愛知県立大学外国語学部

Tel. +81-561-64-1111

印刷 株式会社コームラ

本報告書は、愛知県立大学諸実習経費により刊行された。